と、あの村は馬鹿村、總べてが馬鹿だといふことになります。それだから馬鹿村の話が澤山あります。方々をお捜しになれば澤山あります。東京府なら東京府、或は神奈川縣なら神奈川縣に行けば、この馬鹿村といふのがあります。馬鹿村といつても、そこの村の人が皆馬鹿といふ訣ではないが、譬へばひじきのあらめはみちを引いて食べろといふと、ひじきのみちを引くといふのを、道を引いて食べろと言はれたからと、その村の者は道をずる〳〵引つ張つて歩いて、砂まみれになつたのを食べた、といふやうな村が澤山あります。村全體をさういふ風に言ふことは、今でも半信半疑ながらも、さういふ風にいつて居ます。それと反對に、法螺吹きの話、自分の村の自慢、俺の所にかういふ自慢な者が居るといふことを、代表者を出して自慢した。つまり昔は智慧のあるといふことが美德です。智慧のある者が勝利で、智慧のない者が馬鹿だつたのです。現代になるといふと、智慧のある奴といふと、こすい奴、猾い奴といふことになりますが、さういふ風のことが話に殘つて居る。つまりそれは、昔の部落々々の爭ひといふことから起つて居ます。これは近代の江戸になると、惡態村同士が、年が變る時とか、節分の時に、掛け合ひをして惡態をつき合ひます。その惡態が非常に練れて來ると、惡態をつくことが職業になり、一つの藝になつて來ませう。之と同じです。江戸等では、惡態が藝術化して、惡態にいろ〳〵修飾が付け加つて芝居をしてゐませう。譬へば、助六の芝居を見ましても、揚卷が意休に向つて惡態をつきませう。これらが惡態のはつねと申しまして、いろ〳〵な惡態をつく樣になります。それが爲に、江戸の

軟文學は、惡態ばかりつくやうになつたので、江戸つ子の文學といふものは、皆惡態の文學です。それが片方では、落し噺しを產み出して居る訣です。

まう一つ要素があるのは、つまり、もつと下掛つた話がそれに割り込んで來ることです。ほとや尻や、穢いことを言ふと皆が喜びませう。これは一番原始的といふと語弊があるが、一番素朴なものです。さういふものが、中へ割り込んで來た。穢い話も澤山ありませう。御存じの天宇受賣命が、神憑りして踊られた時の姿についての傳へがそれです。すると天照大神が天の岩屋戸の中に御隱れになつて居て、何故俺が隱れて居るのに神々が喜んで居るのだらうと、開けて御覽になつたのです。或は播磨風土記を見ると、大國主命と少名彦命といふ御二人が、出雲に居られて、「お前はどちらが辛抱出來るか。」「俺は排泄を堪へて走ることが出來る。」「俺は重い荷物を擔いで走ることが出來る。」それで出雲を出發して、播州の姫路の近所まで走つて行かれた。隨分走つたものですが、その中に大國主命は堪らなくなつて、叢に屈んでしまはれたら、そこに小さな篠竹があつて、其を彈き返して袴を穢した。はじき返したから「其處を波自賀といふ」と播磨風土記に書いてあります。ところが少名彦命も、俺も疲れたといふので、荷物を投げ出された。其荷物も汚れも皆岡になつた、といふことが書いてあります。

昔から穢いことを言ふのが好きで、此外にもさうした穢いえろちつくなことが、幾らでもあります。つまりさういふものは、それ自身笑はせる藝術ではないのですが、それが笑はせる藝術の中

へ這入つて行つて、段々落し噺しが發達して行くのです。これは順序を立てゝお話すれば、面白いのですが、今回は筋道を立てゝお話する暇がないのです。

六　繪解きより講釋へ

吾々はどうかすると、落し噺しと講釋といふものを混同して考へますが、講釋といふものゝ筋道も、又別に一筋通うて居るのです。つまり落し噺しと同じく、日本では過去の短い詞、或は短くなくとも、ある文章をば演繹し敷衍して説明する藝術といふものがあつたのです。つまり説明して行くといふ點では同じことです。それから、まう一つは、何でも書いてあること、或は唱へられて居ることをば、敷衍して話すのです。講釋といふものゝ起りは、幾らか新しくて、私の考へでは、まづ繪解きといふものから始まると思つて居ます。恐らく新しいと申しても、少くとも平安朝まで溯るでせうが、つまり繪卷物の説明をするのです。初めは宗教畫の説明をしてゐたのですが、その宗教畫が次第に進んで來て、いろ〳〵な繪物語・繪卷物といふことになつて來ます。つまり卷物をひろげて、これはどういふ訣でどう、といふことを説明して行くのですが、ところがそれがだん〳〵發達して、今度は繪と同じく説明の詞といふものが伸びて行きます。さうすると、繪解きといふものゝ藝術が益鍛へられて來、繪を説きながら文句を讀んで行き、その文句の説明の藝術といふものが進んで來るのです。その後に段々書物になつて出て來た訣です。

譬へば、平家物語とか、義經記といふやうな種類のものが出て來てゐます。さうすると又、さういふものを訣り易く説明して行く職業の人が起つて來ます。これ等は主として琵琶を彈く人たちですが、つまり琵琶を彈きながら、平家物語の文句を説明するのです。平家物語を説明するのは恐らく盲目だつたでせう。つまり盲目が琵琶を彈きながら平家物語の説明をしたのです。併し、平家物語といふやうな書物になると、非常に澤山の異本があつて、同じやうなことをいろ〳〵に書き換へたものですが、それを大體、盲目が覺えて居て、覺えて居る文句に從ひながら、解説して行くのです。その解説は、文句と近く離れずに、そんなに文句から變つてしまはないのです。琵琶を彈きながら平家物語の文句を語つて行き、傍ら少しの説明を加へて行くのです。だから、平家物語そのものが、Aといふ盲目の手に依つて延長せられ、Bといふ盲目に依つて延長せられる中に、段々變つて行くのですが、それならば、根本の平家物語といふものはどうだといふと、盲目は讀めませんけれども、傍について居る人が盲目に覺えさすのです。今では點字で習はせませうが、その頃は點字はなかつたのですが、かうした眼の悪い人、或は盲（メシヒ）といふ人々の爲にすら書いた本が、平安朝の末から鎌倉の後に出來てゐるのです。

ところがもつと下つて來て、室町時代になつて、それらのものでは足りないで、義經記が段々流行つて行きますと、奥州の人々は、都の詞で書いたものは訣らないので、奥州に居る盲目の琵琶彈きが、奥州詞で説明し解説する樣になります。解説といふとをかしいが、貴方々の中には古い

講談を御聽きになつて居ない方が澤山あるでせうから、御訣りにならぬかも知れませんが、御聽きになつて居る方は御訣りでせう。今の講釋師の方々は、聰明な方ばかりで、臺本を持たずに喋る人が多いのですが、併し臺本を持てば百人力で、どこ迄も延長して行ける訣です。だからその原文をば奥州詞で飜譯して行くのです。ですから今、奥州詞で書いた義經記も殘つて居るのです。辨慶なんかも奥州辯を使つて訛り散らして物語をするのですが、さういふ風にして段々物語を讀んでゐたのです。つまり、元は總べて物語を讀んで繪解きをしたのを、今度は琵琶彈きの盲の坊さんが、その物語の文章を延長して解說して行くのです。

それが更に、江戸時代に近づいて來ますといふと、今度は澤山武家の浪人が出來て參ります。江戸の街、その外の大きな街で、武士が澤山祿を貰つて居ますが、それ等が全國に落ちこぼれて、祿にありつけない人々を雇ひ入れて、さうした群集的に職業を失つて居る自分の目下の者を澤山連れた人達が、ある大名に加勢して、それが成功すれば其處に住み着くのですが、大名が成功しなければ落ちぶれてしまひます。すると、さういふ人達が、まづ奴になつて、自分の部下を方々に住み込ませるのです。かういふ訣で、人入れ稼業といふものが出來て來ます。そして、それにくつ着いて居る浮浪の者と、暇で苦しんで居る旗本との爭ひが、盛んに行はれて來たのですが、更にさういふことのやれない連衆になりますと、戰場を往來した知識をば利用して、古い戰爭物語を語る者が出來て來るのです。太平記を讀んだり、源平盛衰記を讀んだり、つまり、太平記讀

み・盛衰記讀みといふ職業が出來て來たのです。これは眞正面に太平記・源平盛衰記を、その儘讀むのではなくて、講釋をするのです。つまり普通の人が聽いても訣るやうに、非常に肝腎なところはその儘讀むけれども、入り組んで訣らない事情等は、皆說明して行くのです。着て居る衣裳の說明をするとか、或はその人々の關係を說明するとかといふやうな、意味文句を說明する、これが段々發達して、つまり講釋師といふものが出て來たのです。

だから、それらの講釋師は、初めは自分達が戰場を往來したから、戰さに關する駈引きは知つて居ますので、その知識を振り廻して說明した訣です。これが二代三代と重つて來れば、その浪人氣質がなくなつて、普通の町人になつて來ます。それで段々講釋といふものも、意味が變つて來る訣です。それでも尙、極近年までは、講談では軍書を讀むといふことが一番本格なものとされて居たが、譬へば近年死んだ馬琴その他の先輩が亡つてからは、軍談を讀む人はなくなつて行く樣に見えます。この會の講師の方々、どの方を見ても、軍談には凡、興味を失つて行つて居られる樣な氣がします。併し未だに軍談といふものが、講釋師の一番本格的なものと認められて居まして、職人か博奕打ちか訣らないやうな三尺もの、博奕打ち・泥棒といふやうな社會のものは、一番講釋の下司なものとされては居ますが、又それだけに人情に近く、今の吾々の生活に近く掘り下げられても來た訣です。

非常に要領を得ない話になりましたけれども、ともかくも日本の傳承文藝の、二つの型の話は、

これで出來たと思ひます。つまりそれを持つて世の中を流浪して歩く文藝があつたといふこと、それからまう一つその外に、斷片的に世の中に行はれた權威ある詞を說明して行く、といふ藝術が、段々世を經るに從つていろ〳〵に變つて來て、まづ落し噺しが生れて來る。それと同じ脈とは必しも言へないけれども、物語を說明するといふやうな形で、繪解きから講釋といふものが生れて來る。かういふお話を申し上げたのです。

ところが最後に申して置きたいことは、この二つの傳承の形といふものは、實は別々のものではなく、恰度講釋の時に申しました繪解きの事を、まう少し申し上げれば訣りますが、つまり吾々は、文字とそれから口で言ふ詞とに、かつきりした區劃を考へ過ぎて居ますが、よく考へますと、これは文字で表したものは口へのり、口で表したものは文字へ出て來るといふ、相互關係を始終繰り返して居た訣です。だからして、平安朝から起つたらうと思はれる繪解きといふやうなものでも、直に口の上のものになつて來たのです。譬へば地獄極樂變相圖といふやうな繪を畫いて、それを示しながら、惡い事をするとかういふ風になるぞ、といふ因果律の物語をする、さうした爲事が、段々世の中を流浪して歩く人達の爲事になつて來たのも、これは繪解きがあつて始まつたのではないのですが、熊野の社をば增築する爲に、といふ美名の下に認可せられたのです。これが一時非常に澤山になりました。熊野に觀世音比丘尼といふものがあります。その熊野の觀世音比丘尼といふのが、女の居る家へ出掛けて行つて、地獄變相圖を掛けて哀れな說明をする。つ

まり、女といふものは罪の深いものだ、殊に女でありながら女にならずに終るといふことは、洵に不幸なものである、それであるから貴女が熊野にお賴みするといふならば、私が賴まれて行かう、といふことでお金を貰つて行つたのです。日本では古くから結婚しない者と子供を產まない者は、これは同じことで、兩者とも死後、血の池地獄へ落ちると信じられてゐたのです。だから、それが厭ならば、私に賴みなさいと言つて歩いた訣です。獨身の暮しをする者の多い江戸等では、かういふ者の力が伸びて行くのは當然な訣です。何の爲か訣りませんが、昔は石女が多かつたのであります。それで觀世音比丘尼などいふものが跳梁跋扈したのでせう。さういふものが繪解きをし、歌念佛といふものを唱へます。

七　江戸時代の傳承文藝

つまり江戸の文學といふけれども、江戸の傳承文藝として淨瑠璃・說經・祭文・念佛、この四つが非常に大事なものです。その中の念佛といふのは、種類がいろ〳〵ありますけれども、比丘尼歌念佛と申しまして、この歌念佛の文句をば小說にし、或は淨瑠璃に飜譯したものが、可なりあります。これは、立派に口承文藝、傳承文藝の、本道に文學に這入つて行つたものです。譬へば、お夏淸十郎の物語といふものは、西鶴も作つて居ますし、近松も作つて居ます。その後も屢、蒸し返され、今でも蒸し返されて居ますが、これは熊野の觀世音比丘尼が物語つた物語に違ひない

のです。眞實の事實だといふので、五十年忌の歌念佛といふやうなものを書いてゐますが、清十郎が獄門に掛つたのは何時だといふやうなことを言つて歩いて、清十郎歌念佛といふやうな清十郎を記念する意味の題目を唱へたのだと思ひます。

さういふ風に昔の形が繰り返し〳〵して出て來る。この形といふものは、日本の國が出來て居つたか、未だ出來て居なかつたか訣らない時代――出來て居るといふのはをかしいのですが、國の基礎が本道に定つて居たか定つて居なかつたか、訣らぬ前からの形です。そしてその形を何時でも繰り返して居るのです。今でも祭文といふものがありますが、恐らくあの祭文といふものが、今の浪花節の基礎になつて居るでせう。祭文といふ語自身に、變な聯想がくつ附いて居まして、祭文のことを日本左衞門と謂ひます。日本左衞門といふのは、沼津の利兵衞といふ大泥棒といふことになつて居ます。當時の祭文語りといふものは、あちらこちら流浪するから、それで日本左衞門と稱する祭文節があるのだ、といふやうな、何だか訣らぬやうな說がある位です。とにかく祭文といふのは、山伏が方々を歩く時にとなへたので、――山伏といふのは修驗道の極末輩の者達が、錫杖を鳴らしながら人の家の門に立つて物乞ひをする。――それが不眞面目な者ならば、人の家の息子や娘のこと等を唱へる訣です。かうした所から、新版歌祭文といふやうな淨瑠璃も出來、それから更にお染久松といふやうな小說にもなつて來た訣です。

それから說經といふものは非常に古いものです。說經の本を質すと、平安朝の末までは遡れると

思ひます。まだ確かに考へて居ませんが、略、說經といふのはお經の意味を敷衍して、それに適切な物語を嵌めて行く、つまり、過去現在未來に亙つて、適切な實例をば、お經の文句の中に入れて行く訣です。つまり修身の講話の樣なお經の文句を說く時に、例話を當嵌めて行くことが、說經なのです。だから平安朝あたりの說經師といふものは、非常に辯舌を練つたものらしいのです。ところがそれが次第々々に藝能化して行つた訣です。

それから淨瑠璃といふものは、說經の女の語りものを言つたのです。つまり、說經で女の語るものが淨瑠璃だつたらしいのでして、つまり女語りが面白いから、說經よりも淨瑠璃が段々盛んになつて來たのです。唯、室町をまう少し下つて、織田・豐臣といふ時代になつて、その時代に出て來た淨瑠璃十二段草紙といふもの、これは牛若丸の愛人淨瑠璃姫のことを作つた物語ですが、これは義經記の裏を言つたやうな物です。この淨瑠璃姫のことを書いた物が非常に盛んであつたので、それから淨瑠璃が始つた、と申しますけれども、私はさうは思ひません。もつと前から淨瑠璃といふものがあつて、女が藥師如來の功德を說いたもので、さういふ物語が淨瑠璃で、それが段々進んで來た時に牛若丸のことを綴つて、その愛人をば淨瑠璃姫としたのだと考へます。で淨瑠璃姫は、三河の鳳來寺の峰の藥師樣の申し子だといふ風に傳へられて居ますが、それが段々進んで來て、結局姫の名前を淨瑠璃姫と命名する樣になり、それの物語が非常に盛んに行はれたので、淨瑠璃といふ名前が固定してしまつたのだ、とかう私は思ひます。それでこの說經と淨瑠

璃とが、竝びながら江戸へ這入つて來た。だから民間の語り物の柱は、どうしても說經と淨瑠璃、それのまう一段低いのが祭文・念佛、といふやうな種類のものになるのです。そしてそれらのものが、昔の物語をば傳へて居る訣です。

ところが吾々はかういふ風にも考へます。卽、それらのものゝ傳へて居るのは、ごく近代のものだらうと思ふけれども、存外昔に種があつて、それが時代々々に順應するやうに、主人公の名前を變へ、事件をば潤色したりして、變化して來て、元の形を失つてしまつて來て居るのだ、とかうも言はれると思ひます。だから結局、江戸時代の四つの語り物を摑へて考へましても、その根本へ遡りますと、話の種類が非常に簡單になるのではないか、と思ひます。この度の話は、大變纏りのない話でしたが、唯或はかういふ風な考へ方を爲されなかつた方も澤山あるかと思ひまして、必要な方面、及び多少でも興味と暗示とを與へ申すことが出來れば宜いと考へて、纏らないのを覺悟で申し上げました。傳承文藝としては、この外にまだいろ〳〵なものがあります。けれども、この度の催しに對しての傳承文藝といふものは、まづそれ位で話は盡きるかと思ひます。

物語りと地の文章の古形

昭和五年五月「民俗藝術」第三卷第五號

つひに聽く機會がなくて居た奥淨瑠璃を、民俗藝術の會と、中道等さんの肝入りとで聽く事の出來たあの夜は、非常に幸福感を深く持ちました。實は、あれほど面白からうとは、私でない他の方々も、恐らく思はれなかつたらうと思ひます。それほど、面白すぎるほど面白かつたので、何の爲に此淨瑠璃が、今の世の中にもてはやされないのか、其理由を知るに苦みました。たゞ一つ、文句が多少古典的である事が胸に浮ぶだけです。

聞くところによると、かほ一節では、たゞ一人の語り手だ相な。そこに、非常な懷しさと尊さとを感じますが、同時に、どうしても抱かずに居られない疑ひと、あやふさがあります。それは、鈴木幸龍さんの、個人としての持ち味以外に、新しい世間の影響が、意識・無意識、兩方面から這入つてゐたとしても、誰がそれを聞き分ける事が出來るかといふ事です。祭文・說經・歌巡禮・義太夫、降つては、浪花節以前の節まはしが殘つてゐるのか、それとも新しく加つたのか、判斷のつきかねる部分が大分あつたと思ひます。殊に、私を不安がらせた一つは、盲人として口寫し

に覺えたとしては、出る筈のない誤讀が、ちよい〳〵あつた事です。それにしても、若太夫の說經節から古い說經節を考へるよりは、少しは安心してよい信賴も、持てないではありません。中道さん其外、東北の方に、尙どこかの町場・農村に殘存してゐる筈の奧淨瑠璃を、是非探索して戴きたいと言ふ希望が深まつて來ました。其ほど、此淨瑠璃に對する興味を喚起してくれたのです。

あの晩得た最單純な直感を述べさせて貰ふと、奧淨瑠璃の中で、一等中心になつてゐるものは、物語りの部分だといふ事でした。此事は、他の淨瑠璃類では、もう疾くに影を潛めて居るに拘らず、どうやら此だけには、まだ古い面影が殘つてゐる樣に感じられたのです。物語りが事件の說明でなく、物語りを完全にする爲のものとして地の文章が出來たといつた形があります。つまり物語りの背景として、短い文章が插入せられ、其が次第に發達して來たと見られ相に思ふのです。此が極度に發達し、技巧的になつたものが、早物語りです。譬へば、八島物語りを例にとつて見ても、一々物語りの前後に、此は何々の物語りだと言ふ事を斷つてゐます。義太夫あたりになると、其が語り手の插入句といふ氣分を失つて、いざ物語らんと座を構へるといふ樣な、本道の地の文になつてしまふのです。結局、物語りの連續です。だから其物語られる部分は、外の場合にも繰り返されてもよい訣になつてゐるのです。私は、八島の謠ひが、何故あんなにもてはやされたかといふ理由を、あの時初めて悟りました。其は、八島の事件そのものとしてもよし、又、八

島の戰爭を體驗した人の物語りの中に、其まゝ插入してもよいのです。譬へば、此接待の場合に、やはり八島が這入る事が出來ます。或は、景淸などに見ても訣る樣に、かうした面白い修羅の場面の物語りは、拔きさし自由に出來たものでせう。必しも八島ばかりでなく、他の合戰物語りの場合にも、其は考へられる事ですが、殊に八島は、有名な事件が、一時に幾つも重つてゐるので、最人氣があつた訣です。それで、かう言ひ換へてもいゝでせう。かういふ場合に、かういふ人が八島を語つた。また他の場合に他の人が八島を語つた。さういふ事の重つたところから、やがて八島物語りなるものが遊離して來たと見る事も出來るのです。

とにもかくにも、物語りの部分と、地や詞(コトバ)の關係の、最古い樣子が、或は非常に變化してゐるのでもあらうと思はれる、此奧淨瑠璃を通じて、尙伺ふ事が出來ました。此は非常に幸福な獲物だつたと感謝してゐます。

「八島」語りの研究

昭和十四年二月「多磨」第八卷第二號。昭和十五年一・二月「能樂畫報」第三十五卷第一・二號

春のはじめに、私は「八島」を語らうと思ひ立つた。ところは屋島であり、祝つて八島・矢島と言ふやうな字面を何時の代からか、用ゐ出した勝ち修羅物である。

一つは、此國の昔に戻つた氣風の漲つて居る時である。一つは、白秋さんの生國柳川に近い眤み深い大江の幸若の舞の詞にも、緣の濃いもので、この親友の健康を祝賀する心には、大いに叶ふものがあると思ふのである。又私にも一つ、之を古く筆記して殘しておいてくれた伊藤良吉君の上にも、吉きこと來よと祈り添へさせて貰ふ氣である。

早々よい事ではないが、聽いて下さい。去る昭和八年來、友人某に貸してあつた久我家文書の中、當道・盲僧一類に關する記錄文書が、おしつまつて、私の手もとに戻つて來た。長く出たまゝになつて居たので、今はその整理調査に忙しい。其中、九州一圓に居た地神盲僧と稱する琵琶彈き——師の房など稱する——の演藝種目の中にも、此が重いものとなつて居るのが「八島」であつた。壹岐の島の師の房の生活を詳しく語つてくれた、亡き菊地武德氏が、あの海に向つた長者原(バル)

を、すこし節がゝつた言ひ廻しで、思ひ出し〳〵「八島」を語り乍ら歩いて行かれた俤が、今もかうしてゐると、目の前に出て來る。けれども、無念(ブネン)なことには、壹岐の「八島」の臺本は、併しとう〳〵見ないでしまつた。

「八島」と言へば、直に謠の「八島」に出て來るやうに、いきなり八島合戰が語られるのだと思つてゐる人が多いかも知れない。併し其謠すら、約束通り、旅僧に對して、鹽屋の翁の姿で現れたしてが語るのである。だから、場處は直接屋島ノ浦ではあるが、物語は一つの手順を越してゐる訣である。

昔から何故、度々、色んな風に「八島」が物語られたか。其あり樣と理由らしいものを、お話することが出來れば、幸である。さう言ふ關心を持ち出しかけたのは、先年、日本青年會館の「鄕土舞踊・民謠の會」に、遠州周智郡奥山村西浦(ニシクレ)から、古い田樂舞ひの來たことがある。その演じた種目の中に一つの「八島」があつて、鬼の面をつけた二人が、あひ舞ひをする。と言ふよりは、「立ち合ひ」と言ふべき種類かも知れぬ。謠ふ文句は謠曲の「八島」の文句の訛つたものに過ぎない。其よりも心ひかれたのは、其ふし廻しであつた。其筋を聽き乍ら思うたことは、此謠自身は固より本格のものからは遙かに遠いものであり、又古い俤をどんな程度に殘してゐるかゞ問題であると言ふことだつた。だが、其から見れば、今の謠は、甚進んでゐる。而も變化さへしてゐる。昔の謠はともかくもつと、情ないものだつたに違ひないであらう。その、人を寂しませる謠

で而も、鬼の面を着けた二人が行きつ戻りつあひ舞ひをするのが、如何にも景清・美保ノ谷に見え、又、能登守・繼信にも見えた。この村に二春(フタ)出かけて見た私には、殊に深い印象があつた。こゝでも「八島」は重いものとしてゐた。なぜさうまでして謠はなければならないか。日本の種種の藝能の中には、「八島」が屢色々な角度に織り込まれてゐるのを思ひ合せた。譬へば、吉野山の所作事には、靜と忠信との道行き――道行きは戀愛の男女のに限られない。主從の道行きもある。「筑紫轢」の如きもさうだ。道行きといふのは、さういふ人々の旅のあはれを謠ひつ舞ひつ、交糾ひまぜて行く藝能である――がある。即、その中の一つなる義經千本櫻の三の切、殊に江戸芝居では、常磐津がゝりで、何が何やら訣らぬ美しさに、誇張せられてゐる。花の中で、靜と忠信とが八島の話をあひ舞ひでする。道々物語りをするどころではなくなつてゐる。此は、忠信が居る爲に、繼信討ち死にのまなびをして見るのだと言へば其きりだが、何も其ほどにして、こんな場合、せなければならぬ訣もない。あれは、別の理由が底からつきあげて來て、さうさせてゐるのに違ひはない。

此はほんの一例で、「八島」は昔からいろ〳〵な臺本の中に、何か機會があると、入り込んでゐる。「八島」は幸若舞に出てゐるのが典型に近いものと思ふが、其他のものにも、同樣なものがぼつぼつ頭を出して來る。初めに述べたとほり、八島と言うても、普通の源平八島の戰ひを直敍するものではない。能樂の「八島」は、戰ひの方で、して、昔の合戰の樣子を物語る。語り終つて、

中入りになる。あひ語りが出て話す。それが這入ると、後じての義經が姿を表す。此は義經及び義經が今の世に顯した姿と考へられてゐる。ところが、前じてが却て幽靈で、後じての方が現實のものゝやうな錯覺が起る。この事は固より、謠の修羅物を通じての事實だが、此能には殊にその感が深い。この謠の「八島」では、凡三つばかり大事の場所がある。つまり、前じての戰語りに、景清と三保ノ谷の鎧引きの話、其後に、佐藤繼信の戰死の話がある。但、謠では、この話は要領だけになつてゐて、繼信の死はともかくも訣つても、平家方で能登守の侍童菊王の死の事が、説明もなく突如として、「どうど落つれば、船には菊王も討たれければ、共にあはれと思しけるが……」とある。菊王の討たれは皆が知つてゐるものと見てゐるのである。後じてになつて、義經の弓流しの段。ところが八島に關聯した話を考へると、ほかに、那須與市の扇の的があり、更にそれは、一の谷の合戰にまで延長が出來る。敦盛熊谷組討ちなどが其である。八島合戰は戰物語として興味の豐富なものだつた。だから色々なものに採られた。かう言へば「八島」の色々な物語の「八島」で、鹽屋の翁の詞の中に、

「……源義經と名のり給ひし御骨がら、あつぱれ大將やと見えし。今のやうに思ひ出でられて候」

とある。これは修羅物の中でも特殊な書き方のやうである。

この文句と先に述べた繼信・忠信・菊王の件が、極あつさりとかたづけられてゐること、この二つが、大分問題を與へてゐる氣がする。つまり、謠の「八島」は、其以前にも古い物があつて、皆が知つてゐるから、省略せられてゐることを示してゐるのだ。

其から先の鹽屋の翁の語りに見えるものは、如何にも物語らしいではないか。「今のやうに思ひ出でられて候」とあるのが、殊にさうである。「八島」の語りをして歩く者があつたら、さう言ふ風にするだらう、と思はれる氣持ちが出てゐる。言ひ替へれば、世間にそんな物語の爲方があつたのだ、と感じるやうに書かれてゐる訣である。

ところが、先に觸れておいた、舞の本の「八島」を見ると、主人公は義經でなく、繼信・忠信になつて居て、其兄弟の故郷の家に、奥州下りの義經の一行が、偶然にも泊ることになつて、兄弟の母親の請ひに任せ、二人の戰死の有様を語ることになつて居る。此は、謠の方の「攝待」に當るものである。つまり、謠では「八島」と「攝待」と二つ揃つて、八島の話が完全になる訣だ。謠だけの形の上では、さうも見えないが、舞の本を中に立てると、二つに岐れて居る。幸若では、生きて居る義經が、佐藤兄弟の母尼公（ニコウ）の前に現れて、繼信戰死の模様を話す。義經が物語る人だが、物語りを聽くものは、實は尼公でなくて、外にあることを思はせる。幸若の「八島」は追懷談で、昔かう言ふことがあつたといふ物の言ひ方を、物語の中に取り込んで活かしてゐるまでゞある。

謠の「八島」とても、さう考へれば、やはりさうでもある。だが、後じてになると、現實に近い形に表現して動作する。そこに現實と昔とが混合して來る。前じては單に語り人であるのに、後じては謂はゞ語り人に靈がのり移つて狂ひ出す——その様を幽靈として出現させることになつたのだといへる。此は能が演劇だからである。唯耳で聽く幸若では、自ら違つて來る。現實に見て來たと信ずることの出來る旅人が來て、其から經驗としての過去を語ることになる。過去を語る爲には、現實にまで延長せられて實在する生證據の人が必要だつたのである。八島語りは義經・辨慶が出て語る程、確かなことはない。又、聞きてが當事者の母なる佐藤尼公であるといふことは、物語の眞實性を增す訣である。尼公に語つた物語を、更に受けついで聞くといふのだから、此が正眞正本といふ訣である。

ところが、八島合戰を物語るところでは、主人公が二通りある。卽、繼信と忠信と。それから、語る人が義經または辨慶といふやうになる。だが、世の中のことは、單純な論理では說けない。かういふ形が、幸若舞の盛んだつた室町時代から江戸時代の初めにかけての人の心に適つてゐたのである。若いか或は美しい人の物語であるからといふばかりでは、聞いてゐる人が、心をうちこんで來るとばかりは說けまい。問題は何故、二人が主人公になつてゐるかである。

「八島」は幸若舞では大事なもので、又同時に幸若舞の盛んになつた一つの原因でもある。幸若舞が盛んになると、その臺本も澤山出來るが、その僅かな昔の臺本に溯ると、最大切なものとし

て現れて來るのが「八島」である。幸若舞の流祖といはれる桃井直詮は、もと叡山の喝食で、草子類に直ぐ節をつけて語るのが非常に上手であつたと言ふ。その語つたものは八島の草子だつたとも傳へられてゐる。この直詮云々の話には、傳承に重疊した僞認識がある。直詮は空想の人物らしくて、系圖に現れて來るといふこと自身が問題である。實は、幸若丸といふ團體がゐたことを思はせる位である。强ひて言へば、その幸若丸の一流の中に、桃井直詮が出現したのだと說く方が理くつに合ふ。幸若丸は丹波に出た梅若丸と同じく一流の藝能人の總名だつたのである。看聞御記には、御存じの繼信・忠信の繪らしいものが、八島の繪と書いてある。これは繼信・忠信の繪詞らしい。繪詞は形の固定しないもので、文章が元のものと變つて來る。うつぼ物語にしても、文章を繪に節錄する。それで、元の文章とは變つて來る。繪詞の固定しないのは、繪詞が讀み上げられたからである。幸若舞は多く繪詞を讀み上げてゐる。繪解きも繪卷物を讀み上げてゐる。繪解きは繪は見せるが、詞書は自分で讀み上げる。だから、繪詞は讀む人の自由になる。それで鎌倉時代以來の繪詞にはいろ〳〵異本が出來たのである。さうした本の固定がなか〳〵研究として興味のある所で、又同時に容易でないものなのである。だから、一般には、繪詞は固定性が薄く、從つて、異本が多いのである。ところが、かういふ風に文字で書き表された物語のも一つ前に、次の樣な事が考へられる。物語の多くは文章に書き取られる前に、口の上で語られて居た。それが筆錄され、其習慣から創作する人が出て來たと言ふ事實を認めなければならない。

八島の物語に最關係深いものに例を取れば、義經記があるが、此書物の成立に就ても、右のやうな事が言へる。だが、義經記に就ては、古く柳田先生が「雪國の春」に書かれて居るから、私など、もう其をくり返す必要はないと思ふ。義經記と同じやうなものに曾我物語がある。此も文章に出入がある。この物語にも若い二人の兄弟が主人公として現れる。

此より前に、此話の中心繼信・忠信兄弟二人がある。曾我兄弟は同じ所で死ぬが、佐藤兄弟は、兄は八島、弟は吉野山で主の身替りになつて立ちはたらき、其後死ぬ。けれども、結局は何れにしても、同じ事である。だから、昔かういふ若い二人を竝べて物語る習慣があつたのではなからうかと私は考へて居る。

繪詞は大抵、初めは小さいものがだん〳〵と大きくなつて行く。が、今昔物語から宇治拾遺物語が出來たやうな、大きな物語から節錄せられ平易化せられた場合もある。此は例外で、目で見たり、耳から聞かされたりする中に、だん〳〵大きくなつて行く。だん〳〵一段づゝつき添うて行く。だから、繪詞の書き出しは、「さてもその後」、「さる程に」、「そも〳〵」など〻書く。かう言ふ風に段々大きくなる。それが偶然の機會に、——世に殘るのは偶然に殘るのが多い樣だ。それで、曾我物語・義經記なんかも殘つて行つたのである。初めは殘る原因は何も無いが、段々殘るべき理由を自らの內に作り出し、又一方に於いて、平家物語・源平盛衰記などがそれを助勢したのであらう。が、も一つ考へなければならないのは、農村の信仰である。

農村で、昔から例外なく考へて居たのは、稲蟲の出るのは死靈の祟りだと謂つた風に考へて居た事である。その死靈を逐ひ出さなければならない。毎年出るやうな事があると、豫め之をはぐらかして、呪術の目潰しを喰はせようとする。誰が祟るか、何ういふ事情で祟るか訣らないが、祟らなければならない訣があつて祟るのだらうと信じて居る。大昔から、田植ゑより刈り上げまでの間には、村の爲に良くしてくれる神と、良いも悪いも考へないものとの爭ひの形式の演劇が行はれて來た。悪い事があると、あれがやつて居るのだなと推測する型がきまつて來て居る。さうして其祟りするものに、名がつけられて來る。日本では初めは、それをあるすさましの威德を持つた神として居た。ところが、後には段々位置を高めて考へて來て、其すさましの神が、却て悪神を抑へる神となつた。卽、祇園・御靈會の起つたのが其である。御靈も、柳田先生の古くからの研究題目である。御靈は澤山あるので、その名がいろ〳〵になつて來る。一番慣れた祟りの者の名を、さういふ神の名につけて來るやうになつた。さういふ人は、思ひがけない死を遂げた人、恨みを含んで死んで居る人々が多く考へられて來る。つまり、祟りの神にも名のないのは、不安なので、何かと名をつけて、其を祭り却けようと努めた。だから其名をとり出すのに、それを考へるに都合の良いものとして軍記物が利用せられた。それを傳へて歩く專門家——遊行神人・聖など——が居た。其人々の語る物語りの中に、不當の死を遂げた不遇の人物が居ると、其人の名が祟り神の名となる。だからさのみ怨みを含んで死んだらしくない人でも、名高い戰死者の中、

變つた死に方をした人などが採用せられる。實盛が其である。さねもりは、元は、田畑を荒すものと考へたらしい。さねもりといふ詞自身、さなへにも、さなぶりにも似て居る所から見ると、何か稲に關係がありさうな所から、昔の人の名に思ひ寄せたのだらうと言ふだけでは說明にならない。實盛が、北國加賀篠原で死んだその死に方が、印象的だつた。と言ふよりも、もつと原因をなしてゐるものは、多く物語に語られたと言ふことである。併し、良く考へると、彼は安心して死んで居る。謂はゞ名のれ〳〵と手塚に呼びかけられても名のらず死んだ事などが印象深かつたのだらう。感じの良い名の上に、農村に關係のありさうな名である。それと一つは實盛に對する人の好意が、反對に、田を荒すさねもりを良くして來る。實盛人形は全國に分布して居るが、此は田の蟲を誘うて連れて行くとも、又、稲蟲を撒き散らすものとも、ちようど逆なことを、一つの物の上に考へて居る。深田で亡くなつた人を求めるなら、遠くは義仲、降つては忠臣義貞朝臣の方が、ずつと實盛よりも適切な筈なのに、かういふ人々には、昔の史實は、沒交涉な知識だつたから、さうした先人に、田に祟る靈を覓めようとはしなかつた。

ところが不思議なことには、實盛は白髮を染め、若者の姿で死んだのが、一つの著しい傳へである。此も原因にはなつてゐるかも知れない。彼に限らず、曾我兄弟も若盛りに死んで居る。我々はさういふ風に死んだ人々を若く美しいと想像する。此が昔人の持つた美德だつたのかも知れない。けれども、義經記を見ると、義經は色は白いが、猿眼で齒が出てゐると書いて居る。して見

ると、綺麗だからと言ふ事は、話の條件になつて居さうもない。だが此も、昔の少人鑑賞の一標準だつたかも知れない。

偶然かも知れないが、實盛と曾我兄弟とは、所謂「虎が雨」の降る時分に死んで居る。とにかく、此時分は田の行事の行はれる頃であるから、時季が印象を與へて居るのであらう。若く、新しくて、強い力を持つて、而も何處へも行く事の出來ない怨念が殘つて居る。さういふものが、如何にも農村の人々が持つて居た田を荒すものゝ考へにあてはまる。それと同時に、かういふものを良く慰めれば、――あなたはかういふ方ですと、此方から定めてかゝつてやれば、あゝさうだつたのだと自ら考へて、よくしてくれるだらうと考へる。恐らくそんな考へ方から、曾我兄弟などは、武家以外の農村にまで適用せられて行つたのであらう。

曾我兄弟は、その生きて居る時代に明るい時代は一度とてもなかつた。何の爲の一生だつたのかと思はせられるほどである。そこで、この二人の兄弟が農村の田畑について居るものゝ上にかぶさつて來たらうと思はれる。盲御前が來て、田畑について居るものに向つて、あなたは曾我兄弟だつたのですと言へば、その靈氣はいゝ氣になる。何者か實は訣らないものでも、さう言はれゝばやにさがる心持ちになる。かうして、判官びいきの熱だつて、農村にまで榮えて行つた。義經も報いられない人だ。義經の本傳は、傳說と錯綜するほど、傳說化してゐる。義經記は彼の花々しい時代を取り去つて、前のあはれな時代、それから飛躍して、賴朝と不和になつてから死ぬる

までの事を書いて居る。死ぬる時も、側に附いて居たのは、彼の奥方と子どもきりだつた。非常に淋しい死に方をして居る。此物語り以前既に、彼の境涯をはでに傳へて居る物語（平家物語・源平盛衰記）があるのに、何の爲にかう暗い所ばかり書くやうになつたのか。其處に義經記成立の原因がある。農村の人々の欲望でも、語る人の迎合でもなく、時勢でさうなつたと言つた方がよい。ふより、農村の人々の欲望するに從つて段々、みじめな彼として發達したものであらう。と言若くてあはれな最期を遂げた、浮ぶ瀨のない、同情されて居る魂――かう思うてよい。

又、村を荒すものと田を荒すものと同じで、田を荒すものは同時に疫病をはやらせると考へられて居た。何故此が戰爭について居るか、軍記物と言はれる形に這入つて居るか。皆の興味に適へる爲にさうなつたと考へるのはいけない。恐らく、恨みを殘すものゝ原因が戰爭と同じものだつたと言ふ考へが、軍記物と同じ形をとらせたのであらう。田遊びは戰爭と同じで、よそから來る神が、田についてゐるものと爭ひ、結局、田についてゐる執念いものが負けて、どうしても、田の稔りを遂げさせねばならぬことになる。だから、田遊びは軍記物に近づいて行く。かうして、宗教家に持ち運ばれた軍記物が農村の物語に結び附く一方、農村の行事もだん〳〵に軍記物に延びて行く。

ところが、最考へなければならないのは、人物の變化して行く事で、曾我兄弟は二人、實盛は一人だ。大抵は一人で、稀に、曾我・佐藤兄弟のやうに二人である。さうかと思ふと又、主人公が

女である事もある。ところが物語をする主人公は自分の閲歴を語るより、自分の側近く居た人の閲歴を語る方が普通である。日本の物語の古い形は、溯ると「私がかうした」と言ふ表現に行き着くことになりさうである。併し、日本の物語には、純粋に一人稱と言へるのは殘つて居ない。一番古いものでも、一人稱・三人稱まじりで、其間に人物の訣らないものが出て居る。あいぬの神の敍事詩は純粋の一人稱である。一人稱で言へない所まで、持つてまはつて一人稱表現をして居る。日本の古い物語には、純粋に一人稱のはないが、三人稱に變へながら一人稱を殘して居るのが多く見出される。かういふのは結局誰が言つて居るのか訣らない。かういふ文學を、學者は、一人稱を使つて居ないから――、後に他の人が全然三人稱態度で作つたのだらうと說く。他の人が作つたには違ひないが、やはり、其神なり、人なりの歌つた歌と考へて、傳へた理由が殘つて居る。譬へば、有名な調ノ伊企儺の妻、大葉子が詠んだ歌、

韓國の城の上に立ちて、大葉子は領巾振らすも。日本へ向きて　――欽明紀

「領巾振らすも」と敬語になつて居る。にも拘らず、後の人が大葉子を詠んだ歌だと說明するが、此だけの說明では安んぜられない。此歌を大葉子につける理由がもつとなければならない。其例は詳しく擧げなければならないが、さうする事は唯皆さんを憂鬱ならしめるばかりであるから、今はやめて置く。唯一つ例を取ると、日本では、代名詞は二人稱と三人稱と同じで、それを又、位置・方角を表す代名詞にも適用して居る。かの・そのかとそとは同じもので、區別は絕對に

無い。この事實は、一人稱と三人稱との間に混亂が出來、其間に變な二人稱の出來て來た時代の俤を殘して居るのだと見てよい。

まづ、よほど古い物語の形式を殘して居るものゝ外は、ある人が、主人公の生活を、側から見てゐたと言ふ物語の樣式が普通である。

ところが、語り傳へられる主人公にも、いろ〳〵ある。今謂ふやうに、一人の場合、又、二人の場合、主人公と語り傳へた者と二人の場合、主人公と副主人公とある場合、そのうち主人公を除いて、語つて居る者が主人公になる時がある。更に、それが形が替り、二人の主人公が出來る。併し、主として主人公の生活を見て居た人が、物語の中に、自分の感情は勿論生活までを露骨に挿入して來る。すると、純粋の三人稱とは言へなくなる。第二の位置に立ちつゝ物語をして居る。さういふ形のものが殖えて來る。日本の物語では、一人稱と三人稱とあり、その間に二人稱とは言へないが、第二の位置の人が、一人稱で語ると言ふ形が榮えて居ると考へられるものが多い。さうすると、物語をする人が、宗教家であると言ふ昔からの條件が、再どうしても、省みられる。又、物語をするものは長生きすると考へて來る。一體、日本では神聖な職業に與るものは、死なないと考へて來て居る。昔は「死」と言ふものが明らかでなかつたが、死と言ふものゝ考へが明らかになつても、尙昔の物語をする人だけは、どうしても生きて居なければならない筈の者であつた。先の「八島」の謠の如き、其印象の薄いものでも、例の「あつぱれ大將やと見えし、今に

思ひ出でられて候」などゝ、其戦を見て居た者が話して居るやうに表現して居る。宗教味の濃厚なものでは、もつと此が濃厚であつたものと思ふ。世間の人も亦、それを信じて居た。此事に就ては、柳田先生も書かれ、私も早くから考へて居たが、此話をしないと、話の根が出來ないから話した訣である。

語る人が、見て居た人で、同時に物語を生活にして居る人だと考へられて來る。それで、非常に長く生きて居る人があつたと考へられて來る。昔は、神の側近く仕へて居た人が、後には替り、宗教的に物語を傳播する爲、諸國を廻つて歩くやうになる。彼等は神からさきはへられた人である。ところが、日本においてすら、逆にわんだりんぐ・じゆうの如き、咒はれた不死者がある。八百比丘尼が其である。先生の力説せられた常陸房海尊も義經主從戰死の場に居合せず生き延びた。其が不死の原因と見られるのである。何の爲に生きて物語をして歩かなければならないか。聖なる爲事をせんが爲に長く生きて居ると見えるのもある。元は、物語をせなければならない筈だつた人たちが、後世物語を外にしても、長生きするやうに考へて來たのである。長生きして語り歩くのは、物語をして人々に知つて貰はなければならない事があつたのだ。つまり、罪障消滅の爲の懺悔の生活をして居るんだと言ふ考へに這入つて來るのである。前に述べた基督を最期に導いた猶太人が其爲に、永久生きて居たと言ふ、同時に猶太種族漂泊史の宿命を語るものと同じ話になる。併し、此二つの話の一致は偶然なのか、それとも間に脈絡があるのか、それは容易に

訣らない。八百比丘尼の話及び其系統の話を見ても、人の知らぬ間に人魚の肉を食べた——東方朔は西王母の園にある桃の實を度々食べた——と言はれて居る。長生きする事に、薄暗い事がついて居る。盗んで食べた爲に生きて居る——此事が話の主題では無いけれども——と言ふ事がつき物なのはどうした訣か。男の方になると、常陸房海尊の如き、數百年後まで生きて居たと信ぜられ、時々姿を現して居る。彼は義經が高館で最期を遂げた時、寺參りをして居た爲、死に後れて、爲方無く逃げたとも、又單に、逃げたとも傳へて居る。此海尊一味の事については、先生の書き物にすべてをお讓りしてよいほど立派な研究だ。

どうも、何か薄暗い事がつきまとうて居る。だから贖罪の爲に語るが、語つても〳〵埋め合せがつかない。海尊もさう說くべき人であつた。

ところが、さう說明をせない部分もある。物語するものを人間と言はずに、狸とか狐とかにする傳へもある。(狸の長生きするのは日本だけではない。)人間以外で、人間の側に居るもの、人間と親しい關係の結べるものが、長く生き、人間の生活を見て居て、語り傳へる。すると、人間が側に見て居て、自分の感情で物語る他に、人間以外のものが人の形となつて物語をすることもあることになる。狐や狸は長生きするから、それでこんな事をするのだと簡單には說明出來ない。蛇や何かでもよい訣だのに、何故狐や狸が物語をするのかは、私も說明出來ない。古い事を知つて居るから、靈的な動物だからとばかりは言へない。もつと原因がありさうだ。一例を取ると、

曾我兄弟と關係の深い男に、鬼王・團三郎（ダウザブラウ）の兄弟がある。ところが佐渡へ行くと、團三郎狸と言ふのが居る。物語りをしたとは傳へて居らない。狸と思はれて居るものに團三郎と言ふ名を附けられたのだ。又、三州にはおとら狐が居る。此も恐らく曾我物語を語つた人間の名から出たに違ひない。おといふ愛稱は後についたもので、元は虎御前のとらに違ひない。併し、さういふ精靈を使ふ宗教家が物語をして歩いたのだと說明することは、今は避けたい。とにかく、團三郎狸にしても、おとら狐にしても、物語をした事は忘れられて居る。

鬼王・團三郎の兄弟の歩いた事、虎御前の來た事は方々に傳へられて居るが、それは皆彼等の行跡の印象が殘つて居るのである。さうかと言ふと、義經の若い時の愛人の淨瑠璃姫が歩いて居る。淨瑠璃姫は淨瑠璃十二段草子及び其系統の物語の女主人公といふべき人である。此も淨瑠璃を語つた女性の遺跡で、曲中の人物の遺跡となつたのである。併しながら、たゞそれだけでは濟まない。同時に、淨瑠璃物語（十二段草子以前のもの）によつて自分の事を語り歩いたものが居た證據になる。

狸の話は澤山にある。四國には狸の話ばかりで、狐の話は一つもない。本道に狐の居る居ないはともかく、弘法大師が四國へは狐の來ないやうにしたのだと信ぜられて居る。その四國狸の中に、八島狸といふのが居る。此狸は八島の合戰を、まるで活動寫眞のやうに目の前に見せる。八島狸に關する文獻はだん〳〵ある。

かういふ風に、あちこちに、物語の主人公自身が語り、主人公の側に居た人が語り、主人公に特別な關係のない人で、長生きをして居て物語り、實演して見せる者まで出來て來る。かういふ風に日本の敍事詩の歷史を調べると、それを撒布して歩く一種の神奴・寺奴の生活のあつた事が訣る。又、訣らぬ理由で長生きした動物がそれに關與して居るといふ不思議な疑問も生じる。唯、我々の場合には、「八島」を主として申さなければならぬから、話の領分は極狹まる。我が國の戰爭の中では、何と言つても、源平わけめの合戰が一番大事である。その源平合戰の中でも、最大事な戰爭が八島の戰ひと壇の浦の戰ひである。壇の浦の合戰を見せる狸も居た。

農村に對して災ひを與へ勝ちの魂に印象深い英雄の名を與へると同じく、英雄たちの働いた場面を八島に取るのは理由がある。八島は戰爭の代表的なもので、戰爭の語りをしようとすると、必八島をする。それに、八島の合戰は能で見ても薄暗い所がなく、勝ち修羅と言つて、祝言に屬し、緣起のよいものになつて來た。此理由で八島を引き出したかどうか、それは今は訣らないが、八島は早くから人氣があつたのであらう。狂言でも、源平盛衰記を出すと、必八島をする。此事は、人間に於ける、曾我兄弟・義經・虎御前・淨瑠璃姫・靜の物語を作り出して來るやうに、戰爭と言へば、八島を出さなければならぬ隱微の約束があつた。今一つそれに微力な助勢をなしたものは、琵琶盲僧が廣く世間を歩いた事である。三味線渡來以前の日本の、本格の藝能は、琵琶によるもので、宗教的にも、藝能の上にも重きをなして居たけれども、そればかりで、八島が高い位

置を占めて居たとばかりは言へない。此は小さな原因で此を言ふ位なら、寧、幸若舞からした「八島」の勢力の大きさを語りたい。

日本の戰爭の物語には、八島の物語がよく割り込んで來る。わり込んで來るには、來る理由があつた。其は實の處、八島合戰のまだけぶらひもなかつた昔に、既に原因が用意せられてゐたのである。

巫女と遊女と

昭和二十四年二月「橿原の友」第六號。婚禮特輯號

大盡と末社　我々は遊郭の生活は穢いものと思つてゐるが、江戸時代の小說・隨筆等を讀むと、江戸時代の町人は遊郭生活を尊敬してゐる。段々調べてみるとその生活も訣る。遊びにゆく人達は目的は同じところなのだが、直接に賣色に關係した事を目的としてゐない。吉原・新町・島原等に於ける遊郭の本格的な遊びをするお客をだいじんと言ふ語で表してゐる。大盡と書いてゐたが、元は大神と書いたのである。それに對してお供が從いてゆく。それを末社といふのだが、後に太鼓持ちを末社と言ふやうになつた。それは大盡についてゆくお供と末社との間が離れてゐるので、お供（太鼓持ち）を末社と言ふやうになつたのである。

神社に於いては主座の神が大神であり、そこに配合せられてゐる小さな神が末社である。ところが吉原では末社とは言はない。と言ふのは江戸の町を對象としてゐるからである。昔の人は都會と郊外とを區別して、郊外に住む人は江戸の町に對して江戸といつたのである。

大盡と言はれる男が伴れてくるお供をえどがみといひ、その土地の人間で大盡を取り卷くものを

ぢがみと言つてゐる。それで見ても大神・末社等の語は神社の神々によせてゐる。なぜかと言へば現在の神社の性格では訣らないが、昔の神社の祭りの主要なものは宴會であつたのが、近頃になつて嚴肅な儀式ばかりを殘してゐるのである。要するにお祭りが盛んになると言ふ事は、饗宴が大きくなることであつた。

祭りと饗宴　遊郭に於ける饗宴はお祭りの形式を踐むのだが、昔の人は正直だから、重要な部分だけを行はずにとにかく始めから終りまで行つたのである。吉原へ遊びに行くと饗宴を開く。村の饗宴と同じく或式が行はれ、その式に來臨する正客があり、それを廻る陪從の客があり、これらの人々に主人が酒・肴を進め、藝人を進め、客もこれに應じて後、客が主人の進めた藝人を自分の思ふ通りにするのが昔のきまりであつた。遊郭の揚屋へ行つても同じ形式で行つたのである。例へば月見は遊郭では大事な行事であり、地唄の「月見」を見ても遊郭に於ける遊びの席の様子が訣る。島臺を据ゑ（島臺卽、洲濱臺は平安朝時代から饗宴の席に出てくる）、そこへすゝきをあしらひ、銀紙で作つたお月様を張る。その島臺を置いて饗宴の座敷が開かれるのである。祭りの時招かれた神が饗宴を受けるのと同じ形を、客が受けるのである。唯違ふのは、客がその費用を支拂ふだけである。昔の人はさういふ遊びをする身分になりたいと絶えず思つてゐたのである。性欲をほしいまゝにするのではなく、座敷のとりさばきを如何にするかゞ問題で、傳說にも殘る事を豫期した。當時の人々には、それをうまくやる事によつて名譽と考へたのである。

舞大夫　その時に招かれた女で一番上の女を大夫といふ。これは神事に關係のある語に違ひないが、客が遊びにゆく饗宴とは關係のない語である。當時遊郭での遊びは、大爲込みな遊びで、大夫は、始めはそんなに教養が必要であるとも思はれなかつたが、身分のある者が自由に出入してから、相當な教養が必要となつて來たのである。近代では幸若の舞大夫が、遊郭の大夫の本流遊女である。しかもその中には歌舞妓もの、亂暴狼籍を働くもの、所謂無賴漢（豪華な服裝をして人の思はくもかまはぬ振舞ひをするもの）などゐたが、江戸初期は相當な教養があり、素性も良かつたので、見識が高かつた。それが無賴漢氣取りと相俟つて意氣地となつたのである。普通の女と違ひ、彼女等はさういふ個性を持つてゐた。

教養を積まなければならないだけに、その口があつて、女の藝事或は諸文學、或は藝術、或は花等に行つたのである。それ迄は職業的な幸若のであつたが、その後段々本道の藝に進んで行つた。遊女の位置が高まると、當時の人々は、まるで、貴族の女性か遊女の位置の高い女性かでないと、女の高い生活を知らないのが、江戸時代の小說隨筆に出てくるところの女性觀である。そんな風になつて來てから遊郭生活を理想的に考へてくるわけである。

結婚を教へる女　それなら何の爲に遊女と言ふ賣色が行はれて來たかと言へば、理論や想像では解釋出來ない。つまり我々の結婚といふことには、相手の女性が決つたらその人とすぐ結婚する、といふのは昔の風習ではなく、その爲には段階があつた。男の爲に女があり、女の爲に男があつ

たのに違ひない。女の結婚する場合の事をよく言つてゐるが、男の結婚する場合の事を考へてみる必要がある。その場合大抵、村の青年に結婚法を教へる女があつたのである。その女は宗教的な威力をもつた人であつて、適齢に達した男等に、結婚の方法を教へるのであつて、昔の人の理想としてゐたのであらう。

何處の國に於いても、どうして生殖の道を覺えたかを考へると、事實は何でもなかつたのだらうが、想像にしてみると不思議なのである。銀蠅や鶺鴒のつながつてゐるのを見たりして、人間以外の動物の叡智によつて悟らされたと考へるのは、一つの理想である。

だからとつぎの教へを教へたのは、村々にとつぎを教へる女がゐなくては、男は結婚しなくてもすむだらうといふ一つの理想で、教へなくとも結婚はするが、教へる女があるのは生殖の方法を教へる爲ではなく、そんな女を設けなければ宗教的儀式がすまないと言ふ事なのである。大抵の場合は宗教的な女性がゐて、初めて、生殖の道に這入るところの女に會ふ。それはつまり宗教的關門を通らす事で、女の場合、初夜權の様に、女の體に持つてゐる悪い血を宗教的威力を以つて排除する意味なのである。男も同じく婚姻するのに、宗教的儀式によつて適當な資格を與へられるのである。

普通神社に仕へてゐる巫女が、さうした爲事をしたのは、古く記録に載つてゐる。神社に仕へてゐなくとも、宗教的な要素を持つてゐる女であればよい。中には旅をして來る遊女もあり、村に

附屬してゐる遊女、神社・寺院等の附近に住む遊女等がある。

さういふ一つの關門を通り越して初めて結婚に這入るのである。男が通らなければならない關門を割合に早く忘れて、男は女の處へ通つて結婚する様になつた。遊女の處へ通ふ年齢は、いくつから始つてくるか、宗教的な女性とのこゝろみは何歳までか、祕密な事であるだけに訣らない。

藝能民習

あまり世の中が變り過ぎて、ため息一つついたことのなかつた我々も、時々ほうとすることがある。鳥が粟を拾ふやうにと言ふが、ほんたうに零細な知識を積んで來た私どもの學問も、どうかうか、若い人たちが繼承して行つてくれるに任せるほかはない。そんな妙な方法で、學問と言へるのか、變な學問もあつたものだと言はれ〳〵して來た私たちの研究も、おのづから中絶する日が、そこに見えて來た。

人の用意してをつた知識を素直に受け入れないことが、學問の發足と言ふのが、本たうだとすれば、私ども位、先人の學說から自由をふるまうて來た者も尠からうと思ふ。

と言つて、其を自慢する訣でもない。たゞ今まで口にしたことのない胸臆を書きつけて見れば、どんな氣持ちがするだらうと言ふ氣で書きはじめたまでのことである。

かう言ふ書き出しをつくつて見たが、さて何も變つたことが出て來さうにもない。此後、國文學などを研究して行く若い人々のうちに、かういふことを考へる人もあらうかと思つて、言はゞ身

昭和二十四年八月「新小說」第四卷第八號

後の笑ひを豫期しながら、其をまた一つの力に感じながら書いて置かうと思ふことの、緒口をつけてゐる訣である。あのごつた返した昭和の末に、こんなことを書いて、隱者ぶつて居た男があつたのだ、と言はれようと言ふ志願を持つてゐると、まあ言へば、さう言ふ風にも言へる。

私などは、生れだちから歌舞妓役者や藝能人を極度に輕蔑するやうに爲向けられ、教へられて育つて來た。だからそんな小屋の立ち竝んでゐる盛り場に入りこんでゐて、知つた人にでも逢はうものなら、忽赤い顏をして、人ごみへ隱れてしまふ。其でゐて、さう言ふ人だかりの中へ、まるで鞜晦するもの〻如く這入りこむことが、嬉しいのではないが、もう一生の癖になつてしまつた。

だから、私の學問も、一端に、芝居町や稽古屋の生活に繫つてゐるやうなものである。

日本流の劇や音樂を、如何にもはな〳〵しい、艶やかなもの〻やうに思つてゐる若い人達に、其だけは、明治末期から、東京人士の持ちはじめた錯覺だと言ふことが告げたい。私はやはり紳士の足を入るべからざる小屋の中に蹈みこんでゐるのだと言ふ肩身狹い思ひを忘れないで、以下の芝居學問を話し續けようと思つてゐる。

「曾我物語」と芝居との關係は、ともかく長いものである。殊に江戸歌舞妓などになると、まるで全演目が、曾我狂言の分化したもの〻やうにすら思はれさうなところもある。併し江戸時代の古い上演目錄を作つて見ると、存外其は近代に寄つての姿で、古くは我々が持つ豫期ほどには、曾我

物語が、歌舞妓を壓倒してゐた訣ではなかつたのである。

春芝居から五月興行まで、据ゑ置きもあり、さし替へもあるが、ともかく皆曾我の世界の狂言を續けてゐると言ふことは、あまり偏つた江戸歌舞妓の習慣であつた。こんなことは京大阪その他の地方の芝居にはない事實であつた。其だけに又、江戸芝居の曾我偏重は目立つたものである。誰の經驗か今では訣らなくなつたが、栗原氏、尾上松助の言ひひろめたものゝ様に考へられてゐる。奥州の「判官(ハウグワン)びいき」の話がある。義經に關係のない狂言にも、幕開きはまづ舞臺空虛の、上手の障子屋臺から、判官義經現れ、「一間の内より義經公悠々として出で給ひしが、さして用事もなかりければ、再一間に入り給ふ」と語る淨瑠璃に連れて、影を消す。其と共に本狂言が始まるのだと傳へてゐた。松助も誰かの後を受け傳へたに過ぎないのだらう。此傳へには、まさか幕毎に、さうしたことがあるとは言はないが、どの幕に限るとも言はない點が、確實性を疑はせる。だがともかくも、誰かの經驗が、輕兆な樂屋生活者の間を、持ち廻らして適度な笑ひを含めて來たことは、察してもよい。多くの地方の芝居小屋の一日が、序(ジョ)に先立つ三番叟の蹈まれることなくては行はれなかつた様に――恐らく本來の意味は違つて居るのだらうが――、必義經の出る小幕或は其に準じてよい場面があつたのであらう。固定した習慣を理會なく積み重ねて來た歌舞妓の藝團では、其一座々々特有の狂言、又共通の狂言があつて、其を演ずることが、言ひ知らぬ古い約束に對して、其一座を成立させる必須の條件だと言ふ風に考へ、又その信仰によつて、興行

の日々に其狂言・場面を演じることを忘れなかつたのである。

たとへば江戸歌舞妓の三座――中村・市村・守田が、おの〳〵へんてつのなさ過ぎる脇狂言を持つて居て、興行の間、毎日之を演じたのもやはり其一種であつた。さうして、其上更に三番叟は行うてゐたのである。つまり芝居興行の條件として、二つの形式的な藝能が行はれなければならなかつたのである。若し三座の興行條件として、其上に奥州風の義經開口と謂つた場面が添うて居たとしても、不思議はない。さういふこぐらかつた習俗の間を摺りつ、潛りつして發生した藝能が歌舞妓なのだから。

その義經出場に當るものが、江戸における曾我狂言だつたと考へることは出來る筈である。三番叟や脇狂言乃至は奥の芝居の義經が添へ物で、曾我は眼目の江戸狂言であり、本藝だから、其等とは別と考へようとするなら、其は大きな間違ひと言うてよい。

歌舞妓が最初から、あの様に我々の鑑賞に堪へる内容を持つてゐたり、又本藝となるだけの目的あるちやんとした狂言を持つて居たものと言ふことになるのである。

今日優れた藝能・藝術と見てゐるものが、最初の目的から分化した目的によつて活きて居り、本來の目的は却て、失はれてしまつたものゝ多いことを思はないやうでは、こんな世界のことはわからない。三番叟が歌舞妓の本筋だと言ふ考へも、地方藝能の比較の結果から言ふことも出來るのである。又狂言の如きも、其々の劇團の草昧時代には、本藝であつたことも、正面きつて言は

れぬことはないのである。
曾我を本藝としたある劇團が、江戸において榮えた結果、周圍の他の劇團を風化したのだと言へぬこともない。曾我狂言を演ずると言ふことが、曾我を誇るべき名作・名狂言と自負して居たと言ふことにはならないのである。「曾我物語」と言ふ題材が流行を促すだけの力を、偶然持つた作物であり、又別にさうなる筈の遠因があつたのだと言ふことは言つてよい。同じ事は、奥州芝居で笑ひの種「義經記」の場合にも通じて言はれる。義經記の流布が奥淨瑠璃を發達させたと同じ力が、他の奥藝能に働きかけたとすれば、奥州芝居において、義經の出場なくしてははじめられないと言ふ固定觀念を持たせることになつた道筋も考へられる。
曾我信仰流行の地盤であつた駿河・甲斐に近い相摸・武藏の土地が、早期には曾我信仰を出發點とする歌舞妓を持つて居なかつたとしても、別に餘所ほかから、大成しかゝつた姿で流れこんだ曾我芝居をとり入れ、更に之を自由に、放恣に伸して行つたとすれば、江戸の曾我歌舞妓隆盛の勢ひは、自らにして來るのである。さうなれば、最初からあつた狂言を守るやうな形で、曾我狂言を中心にして演じる風の起るのも當然である。
其上に尙今一つ、別の理由があつて、一つ狂言を凡半年に渉つて演じとほすやうな風を作らせたのである。
江戸の芝居は元々、年中開場してゐると言ふ様な風はなかつた。恐らく年一度二度と言ふ風の制

度を守つて、其以外に臨時興行と言つた形で、次第に興行度數が殖えて行つたのであらう。前回の出し物とおなじ物を出して居ても、不思議のない程間遠であり、同時に又、年中行事と言つた積りがあるから、出し物はくり返されても不思議ではなかつたのであらう。興行者の企畫が進む其を出來るだけ、改めて行くと、曾我のくり返しにしても、その都度一部分づゝ、狂言のさし替へ・作り替へを入れてゆくと言ふ様なことになつて行く訣である。新しい觀客ばかりをあてにする後々の興行とは違ふので、見物は常に固定してゐたのである。
ところが五月が來ると、愈曾我の祥月である。彼等が知らぬ間に、彼等の習俗の土臺になつてゐた知識は忘れてゐた。其が何となく、彼等の心を刺戟して、ほのかな幻影のやうなものを浮べさせた。
もう御存じのない人々も多いだらうが、曾我兄弟はなぜあんなに、弟の方に印象が深くあるか、殊に昔の江戸つ兒と言はれる人々が公平（キンヒラ）並みに五郎を崇拜するかと言ふと、其竹を割つたやうな氣性や、勇力を渴仰するからだと思うてゐるだけでは、答へにはならない。彼の名のごらうが、中世以後の信仰に深い關係を感じさせたからである。此は柳田國男先生も既に言はれた、佐倉宗吾などの怪談も、宗五郎と言ふ名の發音が御靈（ゴラウ）を聯想させたからだと言ふ說は、動すことの出來ぬ學說になつてゐる。必しも堀田家何代前の殿様を苦しめたと言ふ傳へも、宗五郎のごらうといふ名に因緣があつたのである。さう考へれば、さうした怨靈信仰と關係のある五郎は、鎌倉權五

郎以來隨分ある。曾我の五郎兄弟は、富士の兩麓の國では、隨分御靈（ゴリヤウ）としての凄い力を表して、何の緣のない後世の百姓たちをも惱してゐる。其爲、あの本の土臺も出來たかと思はれる程、深い畏れを人に持たし、彼等の短い一代記が段々に成長して行つた。殊に名が御靈（ゴリヤウ）の古い一つの發音だつたごらうであつた弟の方が、痩形（ヤサガタ）のやうに段々想像の發達して行つた兄よりも、執念の强いものゝやうに思はれたのである。

義經なんかも、ごらう（ごりやう）に何の緣もない名だが、やつぱり死後の亡魂の恐がられる理由はあつたのである。其爲にこそ、關東から奥州へかけて、あんなにまで判官びいきを流行させたのも、謂はゞ恐歡待（コハモテ）の現れだつたと言はれぬこともない。若くて心の伸べられなかつた、怨みを持つて死んだらしい人々が、とりわけ恐れられて、京の御靈（ゴリヤウ）八社の同族のやうに見られてゐたのである。だから其に持つて來て、五郎など言ふ名があつたものなら、其畏れや思ふべしである。心安らかに死んだはずの五郎なども、おちついて死なしては置かれなかつたのである。若し、純な志の、寃屈して死んだはずだと、押しつけた五郎兄弟も、義經も、幸福な人々の住む後世の農村を祟りまくるものと思ひ定めてしまつたのである。

聯想は無責任なものだけれど、よくまあ此ほどに手をひろげて引つかゝりをつけると思ふ程、合理化の範圍をひろめるものである。日本の田舍では、容易にひつかゝりもつきさうにない遠方同士の間に、同じ樣なことを言うてゐる。其が亦、民俗の常態で、不思議とするにはあたらないが、

端午の節供（五月五日）を五月御靈（ゴグワツゴリヤウ）といふことなども、かけ離れた土地と土地とが同じ考へを持つてゐる。端午の節供でもあるが、同時に昔の御靈會（ゴリヤウエ）に關係があつたらしい。五日の日の事には なつてゐるが、日本の農村では、五月一个月が最重大な物忌（モノイ）みの月であつた。謹んだ上にも虔まねばならぬ月である。田植五月であり、五月雨月（サミダレヅキ）でもあつた。而もこの月の廿八日は、富士の裾野で兄弟の仇討ちがあつて、ついで二人別々に切られてゐる。五月御靈は、古い御靈會を意味した名だが、かう呼ぶことが既に、色々な聯想の中心に立つた信仰のあつた事を示してゐる。五郎のとむらひ月だといふ、農民たちの考へが、其である。「大磯の虎が涙雨」と言つて、曾我打ち入りの夜に降る雨を言ふと傳へた雨も、唯虎御前に責任を負はせたゞけの昔語りで、さういふことを言ひ出した原因は、農村における皐月（サツキ）の意味の深さ、說いても說ききれぬ五月の心理を、あゝ言ふ形に說いて見たばかりである。

曾我兄弟をもてはやしたのも、だから簡單に封建人の思想などゝきめてしまつては、先人を謬ることになる。却つてそんな事に關心を持たぬ農民が、あれまでに二人に對する信仰や、傳說を育てゝ來たのであつた。「五月御靈」を、曾我の五郎の記念月のやうに考へた田舍びとが、關東にひろく住んで居て、恐らく曾我にかけかまひもなくなつた後世までも、五月にさへなれば、この若い横死者の伸べ難い心をとひ弔うて慰めなければ、どうも祟られさうで、心がやすまらなかつたのである。其爲に、江戸の早期から、曾我座とも言ふべきものがあつて、年が年中、招かれゝば

何處へでも出向いて行つて、農村を荒さないやうに御靈（ゴリヤウ）の一種になつてゐた曾我殿原（トノバラ）の靈を齋（イハ）ひ鎭める、――念佛狂言にも近いものを行つて居たものであらう。

其が、五月になればひとまづ舞ひ收めて、在所へ戻る、と言ふやうな爲來りになつて居たのであらう。一時代も二時代も前の田樂猿樂（デンガクサルガク）の時代から、賴まれて地方興行に出たのは、まづ田植時までゞ、その時來れば、さつときりあげて一旦故郷へ戻ると言ふ慣はしになつてゐたやうである。そんな中に近代の初め、武州足立郡に根據を持つてゐた中村勘三郎などの座が、さういふ曾我の狂言を携へ歩いたものではなかつたか。其も此も、風に舞ひたつ田居（タヰ）のほこりのやうに、證據からまづ亡びてしまつた。

さう言ふ座で舞ひ荒された田舍曾我が、本流めいて立ち直る機會は幾らでもある。其は曾我物語のてきすとを、その演藝の種目にとり入れて、臺本の整理をすることであつた。其てきすとこそ、數多い曾我物語の諸本であり、又外に最有力な女舞大夫等（ヲンナマヒタイフ）――幸若（カウワカ）の女舞――の練りに練つた「舞の本（ホン）」があつた。此は曾我物語の異本のことで、最人望の深かつたものであつた。

無賴の徒の藝術

昭和十一年六月「水甕」
第二十三卷第六號

我々の生活してゐる明治・大正・昭和の前、江戸時代、その前室町時代、その前鎌倉時代――その鎌倉から江戸迄の武家の時代と言ふものが、どの時代でも同じやうに思はれますが、違つてゐます。武家の生活が型をもつて來る時代、それをかためる時代があり、――武家が土地に對して執著の少い時代と、土地をはなさない時代とがあります。民族性格からは、土地を自由に考へてゐますが、これは事實は明らかで、合戰記等の生活を書いたものには、あるものが旗擧げすると、その大將が國々を歩いてゆくうちに、大勢の人がつき、最後に行つたさきで生活します。義仲が信濃を歩くと、それについて都迄這入つて、その人々は信濃には歸らないで都ではてゝしまひます。かう言ふ例が地方の豪族には多く、土民の歴史はそれを考へぬとわかりません。それがいつしか時代と共に、武家が土地に執著するやうになり、大名の國替へで擾亂を起したりしますが、幕府のその國替への政策は無謀のやうですが、それがかつての土地を自由に思つてゐた時以來の考へであり、德川の初め以來さう考へてゐたものが、治つて來ると土地への執著と共にさうゆか

なくなります。

土地をうつしてゆく武家の生活の起りはどうか。系圖を見ても歴史を見ても、土著の家と言ふのはなく、皆うつゝてゐます。相州小田原の早川氏が中國に來て、小早川の家を開いてゐるやうな例がいくらでもあります。伯耆の名和氏は、懷良親王につき九州へ下つて、八代邊を根據地としてゐ、遠く琉球迄渡つてゐます。これは武家時代に初つたのではなく、昔からその生活法が行はれてゐたのが、次第に土地に根を下すことゝなつて、今日最後迄根を下さず殘つたものが、所謂山窩と言はれるものです。これはおそらく諸國を轉々してゐた流民の最後です。昔、土地を確然ともつてゐる人達の外に、周圍をまはつて來る今日の山窩の如き種族が、いくつあつたかわかりません。さう言ふものに、記紀にも見えてゐる海士（アマ）の民があります。それらの連衆が多く前には文學を、日本の古代生活の上に供給してゐました。その海士が自分達は文學を失つて、のんきな歌人などの間に、「あまをとめ」等と言ふ語となつて殘りました。

それが、土地をもたぬものは奴隷の如く考へられてくると、土著を初める樣になり、世の主な流れにならつて生活します。その土著を誇りとする時代にあつて、ある一部のものたちが土著しきらないうちに、時代が變つてしまひます。それが又、平安朝時代から鎌倉時代になると、さう言ふ土著でなくともよいものが力を得、復活し、武家は諸國を、部下を從へて次々と歩きます。行く先々で土地を占めて其處におちつき、又あるものはそこをはなれ、はなれたものが又おちつき

ます。

疑問は、武士階級がはたして何處から出て來たかであります。武士階級は、平安朝の武官の階級ではなく、當時武官は結局文官と同じであつて、武士はそれとは違つて、地方から出たものです。武官・武士、この二つが調和したのが平家です。

武士と言ふ語そのものも起原がわかりません。何の爲にこんな字を作り、こんな字が現れたのかです。武士の語以前、野伏・山伏等の語があり、これは佛敎上の修行者です。この野伏・山伏が脫離して武士の語が出來たのではないかと假に考へてゐます。たけ〳〵しい士と解するよりは、かう考へた方がまう一つさきを示してゐます。武士階級には、武官から奴隷のもの迄あり、すべて皆武士であつて、考へるべきは、武士の語が後には印象が綺麗になり、武士と言ふと大名を考へますが、そんなものばかりではありません。たとへば、合戰となると、百姓が竹槍をもつて出て來て落人を殺してものとりをしたりしますが、同時にたのまれて戰ひにも行き、都合が惡ければ盜人もやります。道德などは、それは團體の道德であつて、團體をはなれゝば道德などはありません。その村だけの、村と言ふよりは永住の土地をもたない一部の人々の團體の道德を守り、一致した行動をとります。そんな連衆が巡つてゐて、時代が變つてもゐます。應仁の亂等があると、それがどこからともなく、どか〳〵とやつて來ます。大阪の冬の陣・夏の陣などにも寄り集つてやつて來ます。一人づゝ來るのではなく大勢をつれてゐます。移動村落です。

それが落ち著いたのは江戸時代です。今迄動いてゐたものが土著してしまひ、殘るものはなほ歩いてゐて所謂非御家人となつてしまひます。そんな時代に、御家人になれないものは都會へ出て來ます。それがどうするかと言ふと、人入れ稼業を初めます。こゝで江戸の奴の生活が出て來ますが、この奴の生活が一番近代的です。近代的だと言ふのは不良です。不良の徒の生活がいつの時代にも一つのもだん味があります。江戸時代のそれが奴です。これが世を風靡して、高い位置についてゐる人にも傳染し、旗本奴となり、又京都迄傳染して公卿や宮中の女の人にも奴風が模倣されます。これを歌舞妓風と言つてゐます。幕府がどんなに壓へても、壓へきれません。大久保彦左衞門など、その尻押しをしてゐます。つまり一番古いものと新しいものと提携してゐます。一緒になつて幕府のやり口を非難してゐます。後には大變な勢力となり、旗本奴と町奴と爭つたりして、長兵衞が殺されたりします。その爲に、それ自身が保てず崩壞しますが、この風は惡いことには違ひありませんが、時代を推進する力となつてをります。

この風が、もしなかつたすれば、江戸の文學はあんな形では出なかつたと思ひます。江戸の文學は、歌舞妓者の文學、つまり無賴の徒の文學です。無賴の徒の情熱ですべてを突破して出たもの、これが江戸の文學です。江戸の文學が何故元祿中心で大きく、後は下り坂となつたかは、歌舞妓風と官憲の力の衝突の靜まる時代、調和の時代がそこにあるからです。そこには大きな情熱があります。壓するものと壓されまいとするものとの情熱です。時代の力とうちあつて壓しきれない

處に、その價値があります。近松・芭蕉・西鶴にも、この無賴の味があります。西鶴のよさは、無賴の味です。無賴の力で、人が顏をしかめるやうなことを平氣でどん〳〵書いてゐます。近松にも、戰國生き殘りの無賴の型があります。近松の文學には、戰國生き殘りの生活方便として軍書讀みの生活が、流れ込んでゐる型が見えます。隱者と言ふ語がありますが、江戸の文學者に限つて言へば、隱者の立ち場でものを見てゐます。隱者として、無賴の味をもつて、世間を見てゐます。言ひたいことを言ひ、書きたいことを書いてゐます。それを一蝶などは餘りやりすぎたので、やられてゐます。この隱者は幇間(タイコモチ)のやうなことをやつてゐ、歌を作り、文を作り、貴族の子弟を教育してゐます。その主眼は男女のものゝあはれを教へる、手紙の書き方・歌の作り方を教へてゐます。それを、新興特殊階級の遊女のもとへつれてゆき、遊女は遊女でそれに對する方式を作り上げ、發達させてゐますが、それらは皆無賴の隱者に教へられてゐます。江戸の文學を推進した力は、遊女の力です。

我々の國には、隱者が平安末から現れて、貴族・勢力家の家々へ自由に出入してゐました。歌を作り、文を直したりしてゐました。これは個人として社會以外に出たものです。この者は、階級の別にしばられることなく、大抵の階級に自由に出入が出來ました。藝能の田樂・幸若・猿樂等にもこれを認めることが出來ます。つまり、社會外の人達がある日に限つて、松の内とか盆とかに限つて、家々に出入出來る自由が與へられてゐて、信仰と藝能の兩方をもつてゐます。さう言

ふ藝人達は破格の取り扱ひをうけてゐます。つまり社會外の社會のみでは工合が悪く、信仰行事をとり行ふと言ふ型をもつてゐます。これによつて家々に這入つてゆきます。田樂・猿樂でも、もとはしれてゐます。定つた日に村々の主な家を祝福にゆくのですが、藝能が發達し次第にぱとろんがふえて來ると、結局附屬がわからなくなります。興業團體の色彩をもち、社寺をはなれて、信仰行事の色彩なしの藝能となります。併し藝能は信仰から出發してゐます。神社の神人(ジンニン)はその信仰を普及する爲に藝能を行ひます。大和猿樂も春日につき、興福寺・七大寺に關係し、さらに諸國をまはります。

さうしたなかには信仰の中心をふり落す團體もあります。一例は平安朝の祇園の信仰です。日本的に言へば素盞嗚尊、自由に言へば牛頭天王の信仰です。祇園神人は京のみでなく地方へも出て行きます。最盛んであつたのは、鎌倉をすぎて室町戰國の時分ですが、藝能が非常に發達してゐました。祇園囃子がそれです。これはかつて、祇園の信仰でもち歩かれた一つの神輿、又はそれに類似のものが渡御になる道の樂です。併し祇園の藝能はそれにとゞまりません。信長は異風の裝ひをしましたが、あれには型がありました。つまり祭りの昂奮にまきこまれたもので、都から來た祭りの行列にまきこまれたものです。祇園の神人は、他の祭りにも放免と言ふ名で參加します。その型は歌舞妓に殘つて、車引などに出てゐます。

ともかくさう言ふ變つた服裝が祇園信仰の神人行列中にあつて、世間の人は皆眞似てゐます。こ

の異風は當時の一番もだんなものです。結局時代を下ると歌舞妓風です。歌舞妓の語はかぶく、亂暴の振舞ひをする事です。それが固定して、かぶきが芝居につき、歌舞妓のうちに、寛闊・六法等の語が出ます。六法などは、やはり寺の奴隷六法法師の動作で、そのねつて歩く動作が芝居に殘つたものです。つまり神人でも奴隷でも一つの傾向になつて來て、同じ流行によつて流れてゆくやうになります。寺では奴隷のことを候人と言ひ、或は日本流にさむらひ法師とも言ひますが、寺での位置はわかりきつてゐます。豪族についてゐるさう言ふ連衆がさむらひです。それを後には、内容が變つて、さむらひと言ふと才分の高いものを言ふやうになります。

つまり、日本の藝能・文學が、我々の板につき、我々のものになつたのは、低い階級のものゝ爲事が認められ出してからのもので、この低い階級のものは皆宗教家です。これらの人々は、皆社會外の社會にゐて、無頼の徒です。土地もなく、祭りの時だけ許されて無頼が出來ます。平安朝末の法師達の振舞ひはこれと同じことです。これが近代迄も社につき、又ははなれて動いてゐて、社につく神人が、山や川を越えて御札をくばつて歩いたもので、その行動は無茶苦茶なことが多かつたのです。これらが下級の武士の出て來る處となります。かうして、近代の藝能にたづさはるものと、信仰生活にゐる人々の中のある部分と、武家のある階級は、皆一つであつたと言ふことになります。

歌舞妓とをどりと

東京と上方とでは舞踊家の態度が異つてゐる。東京の踊りは歌舞妓の歴史に關りを持つてゐるが、上方の舞ひは能から出てゐると言はれてゐるだけに、上方のは、そんなに踊りは芝居と密接な關係に捉はれてゐないのだ。

東京だつて、歴史は歴史として、もつと役者の舞踊から自由になれないと言ふ謂はれはない。役者は專門を持つてゐる。舞踊家が極端に役者の踊りに隨ふと言ふことは、舞踊家自ら源を涸らすことになる。

我々からすれば、能がゝりだとか、芝居がゝりでない方が踊りらしい氣がする。だから、これでも踊りかと言ふ氣のするものが多くて、踊り自身すら早くから不純なものになつてゐたのではないだらうか。

何と言つても現實がかうあるのだ。だから其から出發しての議論でなくては、と言ふ論法で、歌舞妓所作事を踊りの正道なものとするのなら、話は別である。事實、今のやうな組み合せで、芝

昭和十四年六月「舞踊藝術」第五卷第六號

居をくり返してゐるなら、歌舞妓芝居そのものをも滅することになりはすまいか。

今で言へば、東京に、舞ひの名手が役者に多い。菊五郎などはあれだけを歌舞妓に專念したら、どんな役者になつたらうか。あの人氣の源になつてゐる踊りは、あの人の藝を蝕んでゐるものだと言ふことに氣がつかない筈はないと思ふのだが。

又三津五郎に踊りが出來なかつたら、あの特殊な顏を以つて、もつと役者としての大をなしてゐるだらうに。踊りのために、實に其だけの役者と謂つた形になつて終つてゐる。此ほどあの人にとつて、氣の毒なことはない。

歌舞妓と言ふものが、ひと頃問題を湧き立たせてゐたが、それは問題ではない。

當然歌舞妓自身で刈り取るべきであらう。歌舞妓が、歌舞妓發生時代から劇的要素を自由に伸ばさないやうにさした踊りと、平行してゐるのがいけないのだ。

そして歌舞妓芝居の景氣の悪い時は、踊りでつなぐと言ふことが、いつも行はれるが、これは歌舞妓そのものから言つて悲しむべきことであるし、又踊りから言つても喜ぶべきことでない。歌舞妓と踊りは別個のものとして進んで行かなくては、どうしてもいけないだらう。

高級な藝術はさておいて——しかし踊りそのものもある點高級ではあるが——全體として民俗藝術と言ふものは、出たとこ勝負のものが積み重なつて大成してゐる。

新舞踊などについても彼此言ふだけの力はないが、これからのものはそんなのでなく、成算もな

ければいけないし、理想もなければいけないのだから、そこに周到な心がまへが望ましくなつてくる訣である。ほんの其場きりの鼻先思案見た様なものでは、どうにも間に合はないのだ。民俗藝術と新舞踊とは違ふのだから。

新舞踊と言ふものに打たれたと言ふ感じがしないのは、深い内容がなく、單なる思ひ付きから出來たものが多いからではあるまいか。

我々は屢、古典舞踊の復興と言ふものを見せられるが、今に何の型も殘つてゐないものを、復活してみせられたところで、其に信頼してゐる氣がしない。疑ひばかりが起つて來て、少しも樂しめないのである。試演は大事だけれども、完成した藝の維持といふ事が更に大切である。

出來れば型も殘つてゐて、廢曲にならうとするものを採集して整理してみせて頂きたいものだ。何でも努力はよい事だ。

だが、舞踊の廢曲を興すにも、文藝復興の情熱と方法が備つて居なくてはならぬと思ふ。民俗舞踊に於いての採集の態度で、舞踊家もすゝんでくれてこそ、古典の復活も意義を生じてくる。

座談に過ぎないから、深く考へても居ないし、元々舞踊については、からきしの素人なのだから大目に見て通つて頂く。

舞ひと踊りと

昭和二十七年十月
「藝能復興」創刊號

日本の藝能には古代からまひとをどりとが嚴重に別れてゐた。いろんな用例からみても、旋回運動がまひ、跳躍運動がをどりであつた事が明らかである。藝能と言ふより、むしろ生理的な事實について言つてゐるのである。だから宗教者が、ある時興奮狀態におちいつて、その心理作用が生理的條件をつき動して表現せられるとき、ある場合は旋回運動としてはげしく、又はゆるく舞ふ事になる。又時としては跳躍運動として、その興奮の程度によつて、或は高く或は靜かに、をどり上る動作がくり返される。歴史以前からの久しいかうした反覆が行はれてゐる間に、いつか神祭りの樣式として、是非とも行はなければならないものとなつて來てゐた。それが次第に周圍を取りかこんで凝視し、又は傍觀してゐるものにあたへる效果を、出來るだけ有效に强くしようと考へるやうになる。そこにまひ或はをどりの藝能、或は藝術的の價値を考へることがはじまるのである。

おそらく宗教的儀禮を執行する人のうちに一人があつて、神がより來つて、神らしい動作をして

ゐるそれ〴〵の舞踊の有様を見ながら、之はどういふ狀態に神があるか、どういふ神の動作か、さういふ事を判斷する者がをつたに違ひない。さうして其等の人によつて、夫々をどり・まひの特殊な意義、場合々々の價値と言ふものが定められて來たのであらう。だから多くの場合、舞ひと言ふのは、大樣で靜かな性格をもつた神の一面を表す事が多い。踊りは、幾分荒々しい粗野な感情を表現するでもん・すぴりつとの類の動作であることが多い。其で、自らその精靈(オノヅカ)が勢よく我々の前から退去する姿を表す場合が多くあつて、其爲に古來神遊びを初めとして、我が國に行はれてをつた幾多の鎭魂の舞踊である所の遊びが、次第に舞ひの方に傾いて、名もさう呼ばれるやうになつた。踊りは專ら、伊勢踊り・念佛踊り・神送り踊りの類の激しいものになつて行つた。さうして長い藝術と無關係な踊りの時期がすぎて、念佛踊りを中心とする踊りが次第に純化して、其頃流行し出した小唄類と合體して、種々の組みの踊りが出來、又その踊り手にも色々な種類の人々を加へた結果、譬へば、處女は處女、既婚婦人は既婚婦人の踊りといふ風に、踊りは踊りとして特別に藝能としての觀照に耐へる樣になる時が來た。之がおよそ室町時代以後と見れば間違ひが無からう。盆踊りの頭をもたげて來たのも、およそこの時期である。

ところが、踊りの盛んになるのも大體時期があつたので、戰國の頃に、急に著しくなつて來たのが歌舞妓踊りである。それが總べての踊りを指導するやうな地位に、やがて立つてゆくやうになつた。此時期になつて踊りも亦藝能としての地歩を保ち、次では藝術の域に到達するばかりになつた。此機運を早め、此動きを捉へたものは、歌舞妓役者の劇場において行つた踊りであつた。京阪地方には何しろ歴史久しい宗教舞踊があり、それが早くから藝術化するばかりの境地まで進んでゐた。其後文學的な優れた詞を持つた曲舞、更に舞ひの外に優婉な歌と身振りの融合した猿樂能などが現れて、舞ひは殆此上發達の望めない迄に進んで來た。だから踊りの價値は相當に認められてゐても、それが當然の地位を得る爲には、自ら新しい地位を求めるほかなかつた。新興の都會で既に歌舞妓の一つの根據地となつてゐた江戸は、正に踊りの根を下すべき土地であつた。其後兩方實際、舞踊——舞と踊——の内容は、融通があり交換があつて、事實においては非常な違ひがある訣ではないが、江戸の舞踊は踊りと言ひ、それが歌舞妓から出發してゐる新しい歴史を示す名となつた。上方の舞踊は、近世の舞ひの頂點なる能を基礎として、それを崩したにすぎないといふ意義において舞ひと言つてゐたのである。

此二つの間に強ひて區別をつければ、相當な年代と地方的特色を背負うて來てゐるのだから、相當の限界はつける事は出來るが、要するに同じものと言つてさしつかへがない。唯その技術、其から、表現の上における約束の些細な相違は、今日この會場で、舞踊の指導者が夫々細やかに演じて示し分けられるだらうから、それに期待して、あなた方は十分目を遊ばしてよいと思ふ。

長唄のために

昭和二十四年十一月「慶應義塾長唄研究會プログラム」

私どもの様に大阪の町の中に育つた者にとつては、江戸長唄は生れだちから縁が少かつた。上方では、舊幕時代から引き續いて、明治の中頃に到るまで、關東から來た藝謠は、すべて、長唄であらうと、清元であらうと、一中であらうと、新内であらうと、皆ひつくるめて、たゞ江戸唄と言つた。そしてどれも同じ様な三味線の節に、同じ様な歌ひぶりで歌つてゐた。

だからその後、明治三十年代になつて、上京して初めてこちらで時折、長唄や清元を聞いた訣だが、長唄にしても、清元にしても、これが所謂上方の江戸唄の系統のものかと驚いた程に、大阪で聞いた江戸唄の印象とは違つてゐた。おそらく、大阪ではじめて長唄を芝居へ入れたのは、齋入市川右團次（大正五年歿七十歳）であつたのだから、それ程大阪の町には、江戸唄は縁がなかつたのである。思へば不思議な事實である。

所で、長唄について、既にこれだけ改良せられて來たのであるから、私には、もはや改良せられる餘地はないと思ふが、しかしどうしても長唄が濃厚に持つてゐる所の理想は、實は長唄そのも

のとは關係はないと思はれる。つまり私の言ふのは、今の長唄は、倫理的な心構へと言つたものを持つてゐる、と言ふことを言つて居るのだ。その爲に長唄は、ます〳〵澄んでは來るが、それが同時に長唄を寂しくして行つて居ると言ふことが言へる。

しかし幸ひに長唄は、常磐津の如くには、まだ衰へて居ない。だからその將來の爲には、今こゝで、まう少し豊かな人生を取り入れることが必要だと思ふ。豊かな人生を取り入れると言ふと、すぐ劇場音樂としての形に專心することを勸める様に聞えさうだが、さうではない。反對に、長唄はもつと劇場から離れて、長唄獨自の發達をはかるのが本道だと思ふ。

大學の學生が集つて長唄の研究會を催したりすることが、何か似合しくない感じをおこさせるのは、實は、長唄の持つ劇場趣味がさうさせるのである。だから今こゝで、長唄の爲に、長唄を學問的基礎の上に立てゝくれる人が出て來る必要があると思ふ。

地唄

昭和二十五年草稿

地唄とは、ろおかるの唄と言ふこと。上方の人々が、江戸の唄に對して、土地の唄と言ふ意味でさう名付けた。江戸から言へば、上方唄と言ふことになる。

上方では、長唄・清元・常磐津など、それにもつと古く這入つた唄や、江戸淨瑠璃の類を括めて、江戸唄と言つてゐた。其等は、法師が彈(ヒ)いてうたふと、差別なく、皆一つものになつて了つた。明治以後、東京から次第に其道の人々が、上方へ來る樣になつて、其人々が遊廓を中心に弟子を取る樣になり、段々に差別がついて來たが、もとは皆、上方では、法師や、その亞流の町(マチ)師匠などがうたつて、何もかも、一つに響いたものである。

明治以後、一番先に、江戸唄らしいものゝ、大阪へ這入つて來たのは、新内であつた。京都も多分、そんなことだつたらう。かう言つてしまふと、少しの間違ひが見のがされてゐることゝなる。實は上方で暫らく絶えてゐた祭文節が來てゐた。舞臺や高座と關係なく、袖乞ひする旅藝人が持つて來たものであつた。これが、江戸で言へば職人階級と言ふべき人たちに移されて、寄席や、

貸し席で、藝披露をするまでに出世してゐた。其後、何度目かに來たのが新内ぶしで、此は色町をとほして場末の町々のどうらく若い衆が習ふやうになつた。床屋の親方などで、新内の師匠を兼ねたものが、我々の記憶に殘つてゐる。明治二三十年頃のあり樣である。その外のものは、師匠が、東京から居を移して來なかつたから、本筋のものは傳はらなかつた訣である。從つて長唄・常磐津・清元などは、長く京阪には行はれなかつた。

とにかく、それ等は、一括して江戸唄と言ひ、中には、江戸の方で消えたものが殘つてゐる。其等、江戸唄の本は、上方では、別にまとめられて、枕本(マクラボン)の形で殘つてゐるものが、幾つかある。

地唄は、法師が、謂はゞ家元である。もと〳〵、家元制度の行はれたのは、江戸であつて、之に當るべきものは、上方にはない。江戸政府の社會政策の結果に出來た癌であつて、指導權といふやうなものがあり、其が地唄は、法師がするのが本格のものであつて、法師以外がするのは、正式なものではないと考へられてゐた。琴や三味線を樂器として、唄をうたふ。もとは琴であつて、くだけたものが、三味線である。兩方共通のものもある。

富崎春昇と言ふ人は、もう東京へ來て、かれこれ二十年にもならうか。面白い樣な面白くない樣な、變なものだ。

地唄に包含してゐるものは廣い。大體の區劃は、長うたと端うたとに分れてゐる。長うたとは、形の長い短いによるのではなく、其流に於ける本格のものがさう言はれる。由緒正しいものを言

ふ。勿論、琴にも三味線にもひく。はでと言ふ語は、今は、豪華なことに言ふが、端うたの場合の如く、もとは、本格をはづれた、變格のものを言ふ。まう一つ、小唄と言ふ部類があるが、嚴格には言はない。民謡を三味線に取り上げて、改調したもので、以上が、地唄の大體の區分と言つてよい。普通は、本調子・二上り・三下り等の調子で分類するか、或は、檢索に便利な樣に、題目の字數で分けたりしてゐる。

長うた・端うた・小うたと言ふ分類は、江戸に移つてゐる。江戸では、音樂の中心は遊廓にはなく、芝居小屋にあつた。劇場に音樂の本流があつた。其劇場が、正式の音樂を持つた頃からあると言ふ訣で、杵屋の長唄が、長唄の名を專らにした。つまり正式の劇場音樂と言ふ名である。其に對して變格のものが端うたであるが、後には、その極一部の、歌澤節を端唄と言つた。歌澤節は、喧しく言へば小うたである。つまり、江戸と上方とでは、藝謡の名稱は同じでも、內容は違つてゐる。

「歌曲時習考」は、歌曲さらへかうと訓む。昔の人は、今の人が會と言ふ處を講と言つた。さらへかうは、それをもぢつて、「考」としたのである。此外に、「糸のしらべ」と言ふ本があつて、地唄は普通、此二種である。しかし、歌の數は同じ「時習考」を名とするものでも、段々に增えて行くので、幾通りもの、厚さをもつた本がある。しまひには、四寸程の厚さにまで達してゐるが、「糸のしらべ」の方は更に增えて、二冊に分れる程に、なつてゐる。

「時習考」の方は、厚くなつてゐる一方のは、三味線唄ばかり集めたものであるが、まう一つ別に、琴唄ばかり集めたもので、三分の一程の分量を持つてゐるものがある。稽古本に過ぎぬから、いくら種類があつても、校訂には役に立たぬが、竝べて變遷をみるのは面白い。

○

本てうし

きつね火　まへうた

つきはつれなや。はやあかつきのかねのこゑ。さらば〳〵の　こゑもたえゆくをだのはら。おくりかへせば、ひえのやま風みにしみて、なたねの花のうらがれ。けさのわかれに、つきをたもとにのこいて、あるかなきかの　しゆびを思ふがいのちさ。戀のをぐるま　まはるをのこのあれかし。心をのせてあはうに。（合）かぎりある身のかぎりをしらで、かひもなき世をうちなげき、なんのいんぐわに、しやばに來て、いきてそはるゝ身ではなし（合）　月をみばやとちぎりし人も（合）　こよひそでをや　しぼるらん　——歌曲時習考

このきつね火前歌は、「歌系圖」によると、作者は大石うきと言ふことになつてゐる。うきは卽、大石內藏助の廓名である。

歌系圖と言ふのは、天明年間に出たもので、流石庵羽積の名が署してある。地唄の作者を調べた

本である。羽積が、どう言ふ根據でしたのかは訣らないが、私の想像では、多分、法師に聞いたのであらうと思ふ。上方唄は、法師の家に傳つたものだから、多くの想像や傳說を含んだ。併、作者は如何にも適切にあてゝある。

ともかく、地唄の作者の輪郭や想像範圍は、この本を見ると、大體訣る。中には意外な人をあげた點が、參考になる。

此書は、國書刊行會本の歌曲の部、或は日本歌謠集成に這入つてゐる。

――狐火を選んだのは、大石內藏助作と言ふことの背景が面白い。內藏助が遊んだと言ふ島原は、其頃は六條の廓で、そこで、自分でうたつたと言ふ。そればかりでなく、詞章もよく出來てゐる。大石うき作にはまう一つ、「里げしき」がある。此もよく出來てゐるが、此方は、江戶の藝謠の評釋書としては、實際の權威を持つ「歌曲評釋」(醒雪佐々政一博士)の、一番初めの上方唄の部でしてをられるので、今は此を避けて、狐火の方を選んだ。兩方とも境地が同じで、よく似てゐる。だから、或はどちらかゞ大石うき作で、他は內容によつて、類推したのかもしれぬ。

時習考では、狐火まへ歌と狐火とが別になつてをり、糸のしらべもさうだが、「大成糸のふし」は、二つが續いて一つになつてゐる。つまり法師の流派々々によつて、さう言ふ小異があつて、續けて歌ふ流儀もあつたのであらう。

大石うき作となつてゐるのは、前歌の方であるが、一續きになつてゐるものとすると、全部さう

言ふ事にならう。

前歌口譯

月はそつけなくて、思ひやりのないものだ。早、曉方の樣子になつて、西へ傾いて、男と別れなければならない時を告げる鐘の音が、聞えてゐる。男と女とが言ひ交(カハ)す、さやうなら、また逢はうの聲々も、とぎれ〳〵になつて、しまひには、聞えなくなつて行く廓の外の廣い田圃の見わたしよ。

さて、男を送つて了ふと心寂しくなる。向うに見える比叡の山嵐が身に沁みて感ぜられる。まだ、春は早い時分だのに、菜種の花が半分枯れ〳〵になつてゐて、あはれは此上ない。今朝のこの別れに、空に淡々しい殘月が袂にうつつてゐるが、すつかり晴れきらぬ心を持つたまゝで、ぼうとしてゐる。さうして思ふのは、かうして今度は、いつ逢へるか訣らぬ、心細い次のあひびきの機會に賴みをかけてゐるのが、せめてもの生きがひである。

戀の小車が廻る、それではないが、心のよく廻つて、こつちの心の推量のつく男が、あつて欲しいものだ。そんな男があれば、心の中の一切合切その男に任せて、逢ひ通さうと思ふのに。

どうで死んで行く、限度のある筈の人の命の、その限度と言ふものが考へられないで、生きて居てもその效果もない世を歎いてゐる。

どう言ふ過去の因縁で、此世に生れて來て、生き永らへてゐるのだらう。生きてゐる間に、夫婦になつて添はれる身ではないのだし。

一緒に月を見ようと約束をしておいた人が今夜、涙を流して、袖をしぼつてをるであらう。

語釋其他

此前うたには、狐火のことは出て來ない。此時の色街は、六條の廓で、六條のはづれから、朱雀野を通つて行く。その廣い光景を、背景として、考へること。

○つれなや　つれなしはそつけない、自分の思ふ心と關係のないこと。○茱萸の花の……　敍景としてよく言つてゐる。此だけで、女の氣持ちが、しむぼらいずされてゐる。○しゆび　あと先の都合と言ふことで、男女が都合をつけて逢ふ、逢ひ曳きのこと。○いのちさ　此さは、粗大な、奴詞めいた、遊女の語づかひで、捨鉢な氣持ちを表してゐる。○戀の小車　實在するものではないが、歌詞として、持つて來てゐる。まはるを出してゐる。○まはる　氣が先ぐりしてまはる。疑ひ深い時にも言ふが、こゝは、賞めてゐるので、心のよく屆く、こつちの心を推量してくれる人。女の不滿を言つてゐるので、思ふ仲でなくてもいゝから、氣のよくつく人がゐたら、と思ふのだ。○限りを知らで　人の命には限度がある、と言ふことが訣らないで、と言ふのではなく、訣つてゐるが、執著した生活をしてゐることを恥ぢてゐるのだ。○添はるゝ身ではなし　此しは、

詠歎が出てをつて、單に終止ではない。ないしと言つたしである。○月を見ばや　此處から、氣分がすつかり變つて了ふ。先へ〳〵と伸びて行くだけで、どう言ふ事を作るかを思つてゐない。一貫した性格を書かうとしてゐるのでもない。一貫してゐるとすれば、約束して來ない人、と見てもよい。

神樂（その一）

昭和九年五月刊、西角井正慶著「神樂研究」序

こんなに立派な本が出來たのですから、私の序文など必要がない訣です。たゞ、著者への親しみが、何か言はせずに措かないのです。

かぐらと言ふ語の解釋は、西角井さんにも出來てゐると思ひますが、猶少しばかり申し添へて置いた方が、便利かと思ひます。普通世間の人が言うてゐる解釋は、私たちを刺戟しませんから、こゝに竝べる事を止めます。端的に言ふと、日本の神座に移動的なものがあつて、其が一つ、有力なものであつた事を見せてゐるのだと思ひます。

此語の意義は平凡です。音韻變化を持つて來る事は不自然になりますから控へますが、結局、かぐらは神座（カムクラ）といふ熟語に過ぎません。かむくらがかぐらとなるのは自然の事です。しかし、どの神座でもかぐらと言うたのではなく、或種類の神座を、專らかぐらと言うてゐたのです。若、さうでなければ、其らの人達の持つてゐたものが有力になつて、其人らの持つてゐるものばかりを言ふ樣になつたのでせう。其には、條件があります。つまり、旅をして、言ひ換へれば、移動して歩く神座に對して、世間の人が、其らの人の語を認めて、かぐらと言うた訣です。

さて、其かむくらなるものは何かと言ふと、神體を入れる容物です。しかし、其なら何でも神座であつた樣ですが、少くとも私どもの考へでは、單に神體が入れてあるだけではいけないので、其が祠（ホコラ）であり、宮殿であると感じられなければ、神座ではなかつたのです。つまり、荷物と同じものではない――もつと詳しく言ふと、旅行中に荷物の中から神體をとり出して、其を臨時に据ゑて拜ませるといふ樣なものではない――ので、持つて歩くもの其ものが神座でなければならぬのです。

更に言ひ換へれば、呪術を行ふものが漂泊して、彼方（アチラ）此方（コチラ）で神體をとり出して自分達の宗教的威力を發揮する其ではなく、練つて歩きながら神を人に示すといふ行き方が、まう一つあつたと見なければならぬのです。卽、神を隱してあるのと、露出してある――帳（トバリ）もないといふ事ではない――のと、二通りあつた事を考へねばならぬのです。

私は、其後、方言の採集を怠つてをりますので力强いことは申されないのですが、名古屋附近及び信州の上田附近では、代神樂の獅子の這入つてゐる箱をばかぐらと申してゐます。此は一例ですが、少くとも、獅子頭が旅行するには、其が露出してゐる必要があつたのです。でなければ、精靈を退散させる威力が發揮出來なかつたのです。

此獅子頭の這入つてゐるものを箱と言ひましたが、正確に箱ではなく、實は荷物になつてゐるの

です。其の一番適切にあらはれてゐるのが吉田天王（豐橋市）の繪卷物で、此を見ますと、殆、頭にかぶつてゐると見えるほどの低さで、頭上に獅子の這入つた箱を一本の棒で捧げた人がゐるのです。

で、名古屋と上田とでは心細いのですが、ほゞ方言の運搬された徑路は想像されます。北信と尾張平野とをつなぐ路線を採訪して見れば、最違つた意味に於てかぐらの意味が見出せませう。先、第一條件として、獅子頭が箱に入れてある事です。獅子頭がかぐら其ものだとは思ひませんが、其が這入つてゐるものをかぐらといふのは、卽、次の推理を齎します。

何故獅子の樣な猛獸が、昔から日本の祭禮、或は村の式日に出てくるのか、此點を考へて見る必要がありませう。ところが、「信西古樂圖」を見ますと、私共が從來もつてをつた或想像が適切な形で胸に再現して來るのです。曳かれながら練つて歩く獅子及び豹の類の猛獸のあつた事です。一體日本人は、今までの私達の學問では到底理會し得ないほど、大陸の猛獸の名を知り過ぎてゐます。獅子はもとより、象の字をあてゝゐるきさ、或は、陰陽道との交渉をどの點まで切り離せるか訣りませんが、豹を中つ神と言ひ、殊には、態々「韓國（カラ）の虎とふ神」など言ひながら、古代から其を知つてゐたのです。勿論、其中には、現實に日本の土地に渡來したものもありますが、概しては、空想味を多く含んでゐます。

どうして、かういふものを知つてゐたか、其は、かういふものが來ると信じてゐたからなのです。

此が我々の知らない間に、只今あちこちにある虎踊りの樣なものを殘す元となつたので、虎に假裝したものを中心とした行列なども行はれてゐた事と思はれます。率直に申すと、其が極めて古いところにもあつたのであらうといふ考へなのです。

此は、言ふまでもなく私どもの常に持つてゐる假定の一つ、海彼岸（ウミノカナタ）の賓客が此土を來訪して、災厄を未然に祓ひ退けて行つてくれるといふ信仰の分化した、一方面に過ぎないのです。が、又、其獅子が、一面では、佛典の上の高貴な譬喩としての獅子、或は菩薩の乘り物の獅子などを觀念にとり込む事によつて、益、向上して行つたのです。しかし、其と共に一方、獅子に對する知識を僅かしか持つてゐない、或は段々と頭の中の形を崩して行つた地方の人々にとつては、何うしても、書物以外の獅子が結びついて、そこに、神と精靈との對立するものといふ考へに錯倒——其は常にあり過ぎるほどの——を起し、驅逐せられる側の猛獸として、獅子なる猛獸が、更に一級上の靈物に對抗する形すら考へて來たのです。だから、日本の側から獅子の知識に割り込んだものは、すべて農村の邪魔ものでした。かのじゝ・ゐのしゝ、いづれも農村の害物です。此考へからさういふものゝ全體、或は一部分に扮裝して祭りに參加する樣にもなつた訣です。

かういふ風に言ふのは、實は、逆な言ひ方であるかも知れません。とにかく、農村の祭りには、一方明らかに田苑を荒す猛獸が來服する形を示す藝能が行はれてゐたので、此、攻めるものと服するものとの名が、一つ語のしゝで暗合してゐる事に、結びつかねばならぬ結合を完全にしたに

違ひありません。どの獅子舞を觀ても、全然獅子を邪靈と見なしたものもなし、又、完全に村落家屋を祝福するものと言ひ切る事も出來ない有樣です。

獅子に關して話が長引きましたが、村ごと家ごと、殊に一町内ごとに一つづゝ獅子頭を持つてゐる事の本意でない事を申し添へて置きませう。必、元は、週期的或は突發的に來り過ぐる獅子があつて、其を、その村專有のものにしようと企てた事から、かうした形が出來たのだと思はれます。

獅子にすらいろ〳〵な獅子がある樣に、獅子以外の動物も、きつと度々通り過ぎた事でせうが、其が段々獅子に傾いて行く理由が、必、あつたに違ひありません。

かやうに、來訪するものが、神の形から動物の形に至るまで、幾種類あつたか知れぬと同時に、その姿、その行列、その裝飾の末々に至るまで千差萬別であつた事が考へられます。

必しも獅子とは限らないのですが、さうした靈物がものに容れられて運ばれて行く。其を往き過ぎる邑落の人々が拜する事が出來る樣になつてゐた。さうした輿・車の類の一種に、かぐらと特別に呼ばれる樣になつたものがあつたと思ふのです。

次に、さうした神の旅行が段々意義を變化して、邪惡を誘導するものといふ風に感じられて來たのですが、此が進んで、禊ぎの式を施して通つて行く神、或は神人の姿になつたので、其次に起つて來たのが代參の形です。私たちの考へてゐる代神樂・太々神樂といふ語は、簡單な樣で、猶

幾樣かの用語例を考へる事が出來るのですが、かうした代參の意味も含んでゐるに違ひないのです。即、過ぎ行く村の人々に禊ぎせしめ、其を一括して運び出す訣です。だから、此西角井さんの書物に多く類例が見出される筈の神樂と祓へとの關係が生じて來るのです。

祓へと禊ぎとは、區別ある語と考へられながら、既に古く、日本の神道が神學を持つた時代には、一つ事の樣に、或は、僅かに開きのある事を想像しながら遺はれてゐたのです。一括して携へ行くといふ形は、實は禊ぎにあるので、其で同じ樣な場合に、此二つの語を遺つた訣です。又、此書物に見出される樣に、神樂と禊祓とが密接な理由も、かういふ處に根元がなければなりません。私どもには、何う考へても、譬へば、三河の花祭りに於ける神樂の斷片が、ゆまはり・きよまはりの合理的解釋なる、生まれ清まりにあるとする樣な系統の考へ方は、神樂そのものにとつては第二次の變化だと思はずにはゐられないのです。即、禊祓によつて復活すると觀らるゝ樣な方法を言ふのです。何と言うても、最初は、鎭魂舞踊を意味する神遊びの一種であつた事を忘れる事は出來ません。私の古くからの想像をもつてすれば、かぐらは多くの神遊びの中、恐らく八幡系統の神遊びであつたといふ事になつてゐます。其が、前に申した神座にのせられて、西國から東へ上つて來る途中の行裝をもつて名づける樣になつた名稱だ、と考へてゐるのです。謂はゞ、特殊な神座（カムクラ）を曳き、或は昇いて鎭魂法を施して行く神人のする舞踊を意味したほど、それほど目立つた神座をたづさへてゐたのに相違ないと思ふのです。たゞ、私どもには、其神座に乘つた神體

が、果して獅子頭であつたやら、どうやらといふ決定が出來ないのです。
神靈を運ぶ容物はたくさんありますが、大體分類すると、首に懸けるもの、頭にのせるもの、背に背負ふもの、或は、手に持つものなど、一荷にして擔ぐもの、躰につけた場合と、輿の樣に舁くもの、一人で捧げる――淡島願人がついて歩いた棒のさきに祠のついた形にもなつた――もの、車につけて曳くもの等が主なるもので、其中特に人の目についたものは、意味は多少違ふが、鉾・山・屋臺の形であつて、いづれも其中に神體がはひつてゐるのですが、前に言うたのは、神體がこゝにあるといふ事を皆に示して拜ませるものだつたのです。私の話はさういふ事を言ひたかつたのですが、話がごちや〳〵になつて、よく徹底しなかつたのは遺憾です。この遺憾の筋をお感じ下さる方々の爲に、此本がある訣なのです。

神　樂（その二）

昭和十六年五月刊、西角井正慶著「神樂歌研究」序。著者との對談

日本の神道に、最重大な意味をもつてゐる呪法の鎭魂法が藝能化した第一歩が神樂だと思ひますから、どうしても、日本の藝能史に於ては此を第一に擧げるべきでせう。その點であんたが此の問題に第一指を觸れられたのは見識があつたと思ひます。

あんた自身もさうでせう、一緒にやつて來た私もつく〳〵感ずることですが、すべての藝能に對してもさうだつたやうに、殊に神樂では、吾々の考へが幾度變つたか訣りません。其中でも神樂の起源については、實に豹變に豹變を重ねて來たわけで、何處まで自分の前說を取り消さなければならないかと考へる位です。さうして此頃やつと暫定式な結論だけは得たと思ひますが、併し、さうしてみると、昔の人の言つてをつたのと大して違はない所におちて來たやうな氣がするのです。どうせあんたの今度の本にも出て來るでせうから、あんたの書いてゐる部分をまう一度繰り返すやうな形になるかもしれませんが、一言だけ付け添へることに致しませう。

私共が最初、內侍所の御神樂だけについて議論してゐた時、あんたから注意を與へられて、淸暑

堂の御神樂の方も考へなければならぬといふことが訣つたのですが、今になつてみると、結局清暑堂の御神樂の方が、内侍所の御神樂よりは古いものだつた。さうして、神樂の歴史については、まう一つ重要な暗示を含んでゐるものだ、といふことがだん〳〵訣つて來ました。平安朝中期以後の神樂の形を考へるのに、まづ、そのうちに清暑堂の御神樂の要素を強く認めなければならない。その外に、薗韓神まつりの神遊び、之を加へただけで大體傳つてゐる神樂の形はできると思ひます。その外に色々な地方の大社、或は國々の特殊な神遊びが宮廷に攝り入れられて、それが合體したものだ、と言へば、それで足りるのだと思ひますが、さうすれば清暑堂の御神樂といふものが、どうして起つたかといふことが問題になります。これは恐らく大嘗祭に接續して、舞樂殿の後房、卽ち清暑堂で行はれた御遊が、大嘗祭の意味に於て毎年繰り返される新嘗祭にも行はれたといふところから、毎年行はれる御神樂となつたことは、まづ間違ひないことだと思ひます。それならば、御神樂が何故大嘗祭に行はれ、十一月に行はれないか、といふことになりますが、これは簡單に說明出來ると思ひます。つまり、同じやうな神遊びをもつてゐる鎭魂祭が、新嘗祭に近く行はれるからです。それならば、鎭魂祭の時にどういふものが行はれるかといふと、神遊び、倭舞、此の二つといふことになつてゐます。その倭舞のかはりに薗韓神の神遊びが這入つたものが、とりもなほさず御神樂だといふことになるのです。同時に宮廷が大和においでになつた時代と、山城京にお遷りになつてからとの相違を見せてゐる訣なのです。

あんたには說明するまでもないことですが、この本を讀まれる人たちの爲に薗韓神を吾々の考へてゐる形で說明しますと、韓神は山城京の定つたその場所の地主神、薗神は大和時代で言へば御縣（アガタ）の神、謂はゞ宮廷の御屋敷をとりまいて散在してゐる宮廷の御料の食物其他を生產する土地の神ですから、結局、この二神は御縣の神と三輪或は大和（オホヤマト）の神にあたる訣です。だから御神樂といふものが、山城京になつてまとまつたものだといふことは、その一事でも說明出來ます。だが、世間の人にはまだ認められないことかもしれないが、我々仲間では定說にならうとしてゐる神樂のいま一つの大きな起源が、その上に加はつてゐることは疑はれません。つまりそれが、この本の中にも見えてゐる石淸水系統の神遊びです。

○

神樂の宮廷で行はれた、ごく自由な樣子はよく訣らないのですが、御遊抄を見ますと、後一條院の長和五年の條に「左の宰相等相共に舞樂殿の東廂より建春門に到り歌曲を唱へ舞袖翻す」とあるのが、他の淸暑堂の琴歌（キンカ）神宴の記述と違つて、神宴御遊果てゝ退出の時の樣子を書いただけに過ぎませんが、凡、その時に行はれた神樂のもどき或はやつしと謂ふべき形が窺はれるのですから、從來考へてをつたやうな極めて狹い範圍のお庭のうちにかしこまつて行つてをつただけではなかつたやうに察せられます。さうして、この御遊抄から更に察せられますことは、所謂管絃の御遊に關しての記述ばかりで、舞ひを奉仕したことは今擧げた例、或はそれより前の天慶九年村

上天皇御宇の記述くらゐのものです。そこには「御神樂御遊内舍人（ウドネリ）十人、彈琴歌人二人」とあります。だから、全く舞ひが加はらなかつた訣ではなく、恐らく御遊と併行してそれが行はれてゐて、謂はゞ殿上と砌の下の舞ひとを、同時に行はれる別々の舞ひに見てゐたやうに思はれます。これが一つになつて所謂琴歌（キンカ）神宴或は清暑堂御遊といふやうな名稱を失うて、御神樂と稱せられ、更にそれを庭上の神事といふ風に形を變へさせ、時期もくり下げて十二月に行ふやうになつたものと思はれます。さうして後に宮廷の御神、内侍所の神いさめに奉る風も生じて來たのだと思ひます。同じ宮廷にある御神でも神祇官にいらつしやる御神の爲には既に鎭魂祭の神遊びがあるのですから、これが内侍所に止まつた理由も察せられます。さすれば、庭の神事或は庭の藝能になる道筋を言ふ必要はありませう。神々は音樂がお好きであり、又和やかな噪音が神慮に叶ふものであり、殊に末座の神々はさうした欲望が非常に深いものと古人は考へてゐたのですから、清暑堂に御遊がある節には、宮廷の地主神竝びにその周圍の神々が垣間見をし、更にもの見高く内庭にまで這入つて來られる樣子が考へられます。其故、その頃殊に新しい勢力を持つて都近くまで近寄つて來てをられた石清水の神が這入つて來られ、大體石清水風に庭の藝能を統一せられたものと思ひます。勿論それ以外にも、諸國の神々が宮内或は内庭に集つて來られ、それ〴〵の神遊びを宮廷に寄與せられた樣子は殘つてゐます。

○

さつきの話ですが、人長の成立に關する想像を述べて見れば、大體神樂の疑問になる點が訣りさうですから述べてみませう。

京都邊の大社――賀茂・平野・梅ノ宮・石清水、これ等の社の祭りにはそれ〴〵山人が參加してゐます。江家次第の平野祭に據ると、山人は左右の衞士だといふ風にあります。其が而も、この祭りには二十人も出ます。これに對して梅ノ宮では僅か二人です。どの社も山人が榊を持つて來て、これを齋庭に立てることになつてゐるやうですし、その上これが臨場する時に、祭りに關係した男女が出迎へることになつてゐるやうです。だから尠くとも、最古い祭りには眞の山人が來たものとみてをつたに違ひありません。それが、段々假裝した山人になつた訣です。さうしてこの山人は、同時に薪を立て、庭燎を焚き、倭舞を舞うたことが梅ノ宮に關する江家次第などの記述を中心として考へると訣ります。だから、山人は宮廷が大和においでになつたときからのものだといふことが推察出來るし、旁この本にも出てゐるであらう「穴師の山の山人と」の歌などが傍證を示してゐます。これで神樂における庭燎の意味も相當に訣るし、同時に、人長その他の成立も知れるといふものです。樂家錄に據りますと、人長が手に持つ榊は、御神樂の日に、吉田山・賀茂山などから衞士が伐り出したのを、内侍所の女官に渡して置き、刻限に及んで内侍所の南階の下で、人長が女官から請ひ受ける。その時「人長の榊、人長の榊」と呼ぶやうにあります。女官が人長に授ける榊は、長さ四尺許りに切つてあつて、枝は上の方二尺ばかりにとゞめて、下は

はらつて柄として持てるやうになつてるさうです。これは、主客が顚倒したやうに見えますが、同時に人長が榊に關係の深い事、それから山人の爲事から出て來た役だといふことも察せられるやうです。さうして人長が歌人・樂人等の才(ザエ)を試すのは、つまり山人の主だつたものが、その仲間の中のものを一々指摘してその才を演じさせるといふことになる訣です。而もそれが後には、衞府の宮人の役になり、才男(サイノヲ)とまた別に歌人・樂人があるやうに想はれて來たのでせう。

神樂で最目のつくものは、殆、人長ばかりが舞つてゐるやうに見えることですが、他の人々には各、それ〴〵の才があるので、その才を特殊なものにして來た結果、人長の一人舞といふ形を生じたのでせう。だから、譬へば、前張(サイバリ)を勤めるものゝあることを韓神の後に述べて、自分の座にかへります。そこで前張が始つて、それがしまふと朝倉になります。かういふところから、また歌が分化して、外國音樂の呂律に合つた催馬樂が出て來ることになつたのでせう。清暑堂の御遊には、堂上方の歌ふものが呂と律とに分れてをつて、それが特殊なものゝ外、譬へば安樂鹽・鳥の破の如きものゝ外は、所謂催馬樂なのです。堂上方の御遊と庭上の藝能とは、別々に竝行してゐる筈なのが、何時か堂上のを庭上に移すやうなことにもなつて來たのです。この藝能のはじめはじめに勸盃(クンバイ)が行はれます。これが恐らく、今も東北地方の神樂系統のものに含まれてゐる劍舞(クンバイ)といふ風に理會され易いけんばいの名のもとなのでせう。つまり酒を飲んで藝廻しをするといつた意味と思はれます。

○

勿論、皆さういふ（才を試される男と才男とは同じ語）つもりで記錄は書いてゐると思ひますし、或は語はそこから出てゐるかも知れません。しかし、語原は、別に考へられることは、あんたもさうだつたし、私も今まで言つて來たところで說明は盡きてゐるのですが、逆にかうした順序をとつて出て來た語と言へないこともないのです。しかしさうすると、宮廷以外の人形をもつてする才男の說明が、全部宮廷の才男を原として說かなければならないことになるのです。たゞ、どちらでも宜しいが、人形を前(サキ)にする方が如何にも才男の說明には都合がよかつたのですが、さういふことが若し言へるとすれば、語だけは宮廷の才男が原であつても、人形は人形で自ら他の社或は國に於て發達し、宮廷の才男は又別に發達して來て而もその才男の中から、地方の人形のする態(ワザ)と最近い藝能を行ふものだけの名稱を才男といふことになつたとも說明出來ませう。しかしこれは、宮廷側の記錄の才男の說明が、或豫斷があつて出來てゐるものと思はれますから、今のところはまだ〳〵そちらへは決められません。

○

どうも、人長の持つ輪といふものは、樂家錄には鏡に見立てたものだとあつたり、曲玉(マガタマ)に見立てたのだといふ風にもありますけれども、それはたゞさう考へただけのことで、輪そのものゝ形は、到底榊の枝に下げられるやうなものではないのです。卽、輪の制法は「小圓木を以て作る、徑八

寸」とありますから相當に長い枝を折り曲げたものです。それと共に「柄有り、長さ一尺八寸」とありますから、謂はゞ靫猿（ウツボザル）の踊りに見ることの出來るやうな、又、どうかすれば普通の猿廻しも持つてをつた環鞭のやうなものなのです。さうして「白粉を以て之を塗り、白糸を以て輪を柄に結び附く」とあります。而もこの輪が、登比加介留（トビカケル）又は釣招といふ名であつて、「庭燎諸歌の時、人長のとびかけるときこれを投げ掛く」とあるのは、誰に投げ掛けるのか訣りませんが、「人長輪を冠にかけて之を引き止む」とありますから、人にかけることは確かです。輪をとびかけらして人を捉へたところからこの名が出來たものと思はれますが、今ではその目的が訣りません。しかし、かういふ爲方で他をつりまねくことは、恐らく同等の人間にすることではなかつたでせう。そこに、神樂の人數の中には異常なものが混つてゐることを示したことが訣ります。卽たゞの宮人たちが神樂を勤めるのではなく、人以外の者が來て祝福の藝能を演じたことを意味してゐるのではないでせうか。

それから、あんたの言はれた軾（ヒザツキ）を蹴るといふことですが、これ亦人長のする特殊なことで、樂家錄には、軾を蹴るやうに見えるだけだといふ風な說明もしてをります。「人長庭燎に立つて本末に行く時、軾を蹴る事、之を故實となす、然れどもこれ不解の說か、今案ずるに人長軾の前に立つて三つ拍子を踏み、東方に行き立ち、又軾の前を經て東方に行き立ち、その度毎に腰をめぐらし裾をよせる形をなす、事を好むもの誤つてその躰を見てこの說をなすものか」とあつて、寬

永の內侍所の御神樂の時に、四辻大納言が多備（オホノ）前守盛忠を呼んで、軾を蹴らないやうに下知せしめた云々とありますが、是等は證據になりません。たゞ、三拍子を踏むのも事實だつたのでせう。それをすることが卽、軾を蹴ることにあたるのだつたら、別にかうした說は意味のあるものとは思はれません。人長が左右左と足踏みするのは、三拍子の法を書いた條を見ても訣る如く、これは反閇の單純なものらしいのです。たゞ軾が常に用ゐられるのは圓座と同じ用途なのですから、それを蹴るといふことに或不調和を感じてかうした說を立てたのでせうが、吾々が疊莚は座る爲に用ゐてゐながら、又、反閇の範圍を模型式に示すことがあるのを思へば訣る筈です。つまり軾が、疊莚の代りに踏まれる、大地を意味してゐるものと見るのがほんたうなのでせう。祝福に來臨したものが、その庭を踏み鎭めることはあるべき筈で、舞踊と目的を一つにしてゐて、而も、もつと明らかにその目的を示してゐるものでせう。譬へば、猿樂能における翁・三番叟の踏むこと、他の五番能に於いて舞ふのと兩立してゐるやうなものです。たゞ、あまりにこの神樂なる藝能が發生の時を去ること遠く、宮廷に這入つても、早く部分々々の意義を忘れてしまつてゐた爲に、後世から思へば、とんでもないことが行はれてゐた訣なのでせう。それはあんたのこの御本に詳しく說明されてゐることですけれども、日本民族の間に、神樂以後に發達した藝能が、何等かの形に於て他の藝能を出來るだけとり込んで來たやうに、既にさうした日本藝能の宿命風な方向を、この最古い最神聖な藝能が暗示してゐたと申されるでせう。

神樂記

昭和二十四年七月「實演による日本舞踊史の展望」プログラム

神樂と言ふ名は、近代では、神事に關した音樂舞踊の類を、漠然とさす語のやうに考へてゐる。さう言ふ廣い用語例に當るものとして、神遊(カミアソ)びと言ふ語があつたのである。一體日本古代の遊びとか舞ひとか言はれるものには、鎭魂の意義が含まれてゐる。「神遊」は、神聖な鎭魂舞踊とか、或は神自ら行ふ舞踊(アソビ)とか言ふ意味らしいのである。其神遊びの一種として、平安朝の中頃から宮廷に行はれ始めたのが神樂で、最初は「琴歌神宴」と稱して、大嘗祭の一部分の、夜の行事から出たと言ふ說が、有力になつてゐる。

通說には、天岩戸の神出現に先立つて、天鈿女命の舞踊したのが起源だといふ事になつてゐるが、此は神樂よりも古い鎭魂祭の初めを說くものと思はれる。

恐らく宮廷以外の神社で發達したものが、天子を祝福する意味から、宮廷年中行事の一つに入りこんだものと思はれる。其にも順序があつて、最初に豐樂(ブラク)殿の淸暑堂(セイショダウ)に行はれたのが、後、內侍所にも行はれることになつたらしい。天子の御爲にするのであつた事は、庭上で之を奏してゐる

間、御座に出御になつてゐた事からも察せられる。

主要な樂器は琴で、之に笛・篳篥が伴つてゐる。歌は本方(モトカタ)・末方(スエカタ)に分れて、所謂「掛け合ひ」の樣式で謠ふのである。舞ひは、此神態(カミワザ)の長(ヲサ)と言ふ風に解せられてゐる人長(ニンヂヤウ)がするので、其も主として、初めの「採物(トリモノ)」に行はれる。採物は、其一つ〳〵が、此鎭魂呪術に用ゐる呪具だつたのだらう。其を携へて出て舞ふと、歌が之に伴ふ。之がすんで後、數回の勸盃(ケンバイ)がある。其間に古來の樂と今樣のと、民謠に唐樂風の節をつけた、當時の歌謠曲の樣なものが謠はれた。此が大前張(オホサイバリ)・小前張(コサイバリ)である。其後は「朝歌」とも言ふべき星の歌・星の呪文・朝倉などがあつて、晝目(ヒルメ)・其駒(ソノコマ)などを含む雜歌でをさめることになつて居る。正式に之を行へば、宵から夜明けまで夜を徹したものだが、曲目も殖えて次第に其を本格的に行ふことが出來ず、時々の選擇を加へて、拔きさしするやうにもなつたと見える。

神樂の主要部は、やはり採物にあるので、其後で、鎭魂を行つた慰勞として出る酒を頂く。謝意を表する爲の藝廻しとも言ふべきものが、其々の才技(サイ)で召された男たちによつて行はれ、其後なごり惜しみして別れて行く。其朝の部に屬するものが分化して、「雜歌(ザフノウタ)」を生じたと言ふことになるのであらう。今度催される「其駒」なども、雜歌のをさめに謠ふことになつてゐた。朝の神あげで還つて行かれる神に別れを惜しむやうな感情が、此部の歌には全體として現れてゐるのだが、朝は日神が來臨するのに、之になごり惜しみすることの矛盾を感じて、こゝで一しきり悲別

とも讃歎ともつかぬ歌群が出來た訣である。「さゝのくま　ひのくま川に駒とめて(書目)」と「其駒ぞや　我に草こふ」とを比べて見ても、同じ目的の分化したことは窺はれるのである。

神樂が宮廷に榮えて後、宮廷以外の地方の社で行ふものを、里神樂(サトカグラ)、夏の祓(ハラ)へに關聯した舞踊を夏神樂、伊勢國の片田舍で發達したのが、神宮直屬のものゝ樣に僭稱して、病氣災厄の祓へをして廻つたのが、伊勢神樂と言ふやうに、神樂と言ふ稱へが、壓倒的な勢力を、神事舞踊の上に持つて來るやうになるのである。

神賑ひ一般

昭和二十四年十一月
「明治神宮祭の栞」

靜かな秋冬が來る。わが國も、幸福な月日が廻つて來て、神の心も明るくなつて來て居られることゝ思ふ。秋からさきは神事が多く、從つて神の心を賑はし申す行事が、社々で行はれる。耳を澄すと、どこの野山、かしこの町中などに、必日毎に神祭りの樂器の音がしてゐる。秋ばかりに限つた事ではないが、此時期にかう言ふ神事の多く行はれるのは、理由のあることである。祭りがあると、藝能めいた所謂神賑ひの行はれるのが普通である。今日の人は、之を餘興のやうに思つてゐるが、其は違ふ。祭り自躰にとつて、極めて重要な部分だつたのである。

其等の中、特殊なものでない限りは、神樂(カグラ)といふ名で、いろ〳〵違つた藝能をひつくるめてゐる。まづ總括出來る名目を立てれば、「神遊(カミアソビ)」と言ふ古い語であらう。神樂はその中の特殊なものを言ふ語で、元はあつたのである。

神遊びは、神の行はれる遊びと言ふ義で、「あそび」と言ふことに意義の中心はある訣である。昔は鎭魂と言つて、人の身に魂を鎭める行事があり、それを行ふ時期があつた。其を行ふ方法も

色々あつて、地方々々家々で、實に多くの鎭魂法が行はれてゐた。併し、其等には皆共通した所があつた。歌をうたひ、樂器を鳴らし、舞踊を行ふことが其である。さうすることによつて、よい魂が人の身に鎭るものと信じてゐたのである。後世は、神事を離れた、遊びと言ふ語が廣く行はれることになつたのである。

そんな訣で、冬には何となく、心の溫まるやうな神事が行はれるのであつた。鎭魂行事のあつたのは冬の事であつたが、收穫祭が秋、其に續く鎭魂祭が冬と言ふ風に、祭りを中心に時の名を稱へたので、秋と言つても、冬の中にもなり、又曆の考へが變つて、秋に行ふ祭りだから、曆の上の秋季にすると言ふやうなことにもなつて、秋冬にわたつて、祭の種類が次第に分化して行つた。さう言ふ神遊びの中に、神樂（カグラ）と言ふ流行を捲き起すものが現れた。平安中期の事である。それ以前から必、神遊びが神事藝能としての享樂方面を拓いて居たには違ひないが、一躍して藝能の喜びを覺えさせるやうになつたのは、神樂が榮え、催馬樂（サイバラ）を分出させた頃からであらう。併しこの頃になると、もう、宮廷だけに神事藝能が發見せられたと言ふやうな事ではなく、諸國の社や聖地にも、神事から藝能の歡心が、目ざめて居たのである。東遊（アヅマアソビ）、風俗（フゾク）などは、東國から出た痕を明らかに示してゐる。併し詳しく言へば、神事藝能の起原は、此一つに止らない。

相撲などは、神事として、因緣の古い占ひであつた。秋に這入つてまづする農事の占ひは、このすぼうつによる外はなかつた。其が、宮廷にも、諸國の社にも催され、遂に藝能の神事として、

人の心に大きな喜びを唆るまでになつたのである。神事から出て藝能化したいろ〳〵の神賑ひを思ふと、信仰の根深さ、又形を變へて永續する強い意力を感じる。打毬・馬術・賭弓（ノリユミ）の各種目も同樣、神事占ひから出發した痕が認められるのである。

かうして日本の神々が、藝能を深く愛好せられると言ふ印象を、昔の人は持つやうになつた。壯嚴な雅樂——又、舞樂——が、神事藝能に入れられたのも、かうした古人の理會から來た。田樂・猿樂の如く、中世から近世へ榮えた藝能も亦、最神事に緣の深いものであつた。武術などはまさか、と思ふ人もあらうが、此亦相撲同樣、勝負を以て判ずる占ひの基準として、祭時に行はれたものが多かつたのである。

かう言ふ風に祭時に當つて、神社は藝能綜合の機能を發揮するのであつた。花などは、寺方からのみ起つたものと思はれてゐるが、之が純日本的起原を溯れば、やはり神事に歸する所もあり、最緣遠かりさうな茶の湯・香道などが、やはり神事に關聯してゐた。春日若宮祭りの夜の神幸には、盛んに香を燒くし、近江の日吉の大祭には、神輿に茶を獻ずる式を行つてゐる。

我々は、神が樣々の藝能文化を分出し、又新しい藝能をとり容れて來られた迹を眺めて、今後の祭りの益賑々しく、榮えゆくことを思ひ、心自ら豐かなるを禁めえないのである。

鶴が音

——鶴亀の藝能——

いかに、奏聞まをすべき事の候。毎年の嘉例の如く、鶴亀を舞はせられ、その後、月宮殿にて舞樂を奏せられうずるにて候。……謡曲鶴亀

所謂五風、十雨が、度に過ぎて、佗しかつた舊年の夢についで、今年はほゝ笑ましい現實の暦を捲き返したいものである。そのための祝言にもなれば、この短文の作者なる初老の翁は望外の慶びとする。

鶴亀の能は、極めての短篇で、いはゞ祝賀の舞を催さうとするだけの開口の文句に過ぎない。しかなる皇帝に、大臣わきが次ぐといふ異風でもあり、古式とも見える演出法を持つた曲である。

皇帝「ともかくも、はからひ候へ」

で、子方二人の鶴亀の連舞ひになる。これに興が進んで、皇帝自身も舞樂して、その後一同退場となる。初春「青陽の節會」に象つたもの、新年の祝賀能である。このしての地位に、極めて

昭和十年一月四日
「大阪毎日新聞」

「翁」と通じるところがあるやうに見える。この鶴亀の曲の起原とまで斷言することは出來ずとも、尠くともその能樂化する徑路を示すらしいものがあるやうに思ふ。「翁」の當今行はれるものは、所謂「四日の式」と稱するもので、初、二、三日の式とは、大同ながら小異を持つてゐる。五日の式も、初日同様であるが、この兩日に通じて行はれる特殊な部分の一個所は、所謂「千歳の舞」が度數の多いことである。その千歳の舞の間に、

ところ千代までおはしませ。地「我らも千秋さむらふ」鶴と亀との齡にて、ところは久しく榮え給ふべしや。鶴は千代經る。君はいかゞ經る。地「よろづ代こそ經れ。ありう。とうとう」

と第一の千歳の舞を舞ひをさめる時を見計らつて、「鶴亀の風流」といふものが、挿入せられることが、昔はあつたのである。つまり狂言方の爲事である。この風流と稱する物には、このほか色々あり、また出端も區々であつたが、今は話が小うるさくなるのを避ける。野々村・安藤兩氏の狂言集成本によつて、咄して行くと、して（鶴）つれ（亀）前後になつて、一度に出る。

一聲二人「亀は萬年の劫を經て、鶴も千歳や重ぬらむ」

千歳「あら奇特や。これへ鶴亀の現れ出でたるは、如何やうなる仔細にて候ぞ」

鶴「その事にて候。たゞ今、千歳ふるの次第に、鶴は千歳ふる。君は如何ふると候ほどに、其縁により、かゝるめでたきをりなれば、これまで罷り出でゝ候」

それから、千歳と亀との問答があつて、鶴亀に舞を促す。

二人「千歳ふるの縁に引かれ、〳〵、綠の龜も舞ひ遊べば、丹頂の鶴も飛びまはり、今このところに、一千年の齡を授け奉り、此までなりと、鶴龜ともに千歳ふるにお暇申し、千歳ふるに暇申して、海中さしてぞ還りける」

これが、まだ三番叟も座に直らぬ間に行はれたのである。つまり、千歳の祝言を脇で聞いてゐた形で、即興的に出で加はる、假裝の喜劇があつたわけである。われ〳〵上方で生れたものが、幼少のをりに見馴れて來た祭禮時の「俄ぢや。思ひ出した」と呼ばりながら、咄嗟の思ひつきらしい即興劇を演じて廻つた、あれによく似てゐる。即、まだ演藝として舞臺に登らなかつたにはかにそのまゝだといへばわかるだらう。江戸末期のにはかの種本といふべき風流俄（フリウニハカ）、俄天狗類の書物にはかういつた上品ぶつた物もまじつてゐる。

私は、にはかや、また「風流」なるものゝ成立を說かうとしてゐるのではない。「鶴龜」なる能が、どうして出來たらうかといふことを考へて行くうちに、そのほかの能にもおよそこれと似た徑路を通つて成り立つたものゝあることに、氣がつかれようと思ふからであつた。つまり、かういふ「翁」に附屬して行はれた色々の風流が、能見衆の人々に段々人氣を博して、今度もあれをといふ風に、所望せられると、何時かはそれだけが獨立したものとして、舞臺の上の番組に加へられるやうになつて來る。そのをかしみが勝つて、卑俗であり、また寫實傾向が深くて、世話物じみたものは、所謂「能狂言」の方に所屬させられ、その古典味が勝つて、笑ひを催す實感の缺

けたものは、次第に優雅化せられて、能樂の領分に這入つて行つたものである。かういふ能と狂言とは、古くからはつきりと對立してゐたやうに見えようが、實は一つの物が次第に、兩方へふるひ分けられて行つた次第なのである。後々まで殘つたこの「鶴龜の風流」の類のものは、勿論、能・狂言分離後の形であらうけれど、これと同じやうな事情で、しかも能樂草創期に幾多の曲目が出來て、それが二つの部類分けせられて行つたことは察せられると思ふのだ。能樂は、その以前あつた幾種とも算へ知れぬ所謂猿樂の本流となつた。さうして、長く猿樂能で通つてゐた。その新猿樂の本藝とも、表藝ともいふべきものは、春の初め或は農村諸行事の開始を祝福する意味を持つた「翁」であつた。この「翁」から種々の能藝が分化してゐる。「脇能」ともいふ「神能」が、その第一出發點にあるものであつた。こんなことも、實はもつと〳〵詳しい論理を辿つて行かねば、ほんたうには呑みこんで貰へないのであるが、今は荒筋しか語られない。

「翁」の所作や詞章の意義を再演し、解說するといつた「脇能」のほかに、かういふ風に何時でも勝手に、登場して、即興的な「口上や茶番」のやうなこと、舞踊を行つて行くものがあつて、それが今いつたやうに、猿樂能の發足點の一つを作つたと見てさし支へはないはずである。

鶴龜風流の場合でいふと、これが直に能の鶴龜になつたとはいへないまでも、「鶴龜」自身は、恐らくこれと同じやうな過程を以て成立したものと考へることが出來る。殊にそれが單に「舞」を行ふため言ひ訣に出來てゐるに過ぎない構造であるところから見ても、さういふことはいへると

思ふ。風流といふ以上、人目立つやうな假裝を凝して出て來たものであらう。鶴龜風流と似たらしいものに「仙鶴風流」などいふもののもあつた。恐らく丹頂の鶴が仙家の使ひ、といつた意味で出て來るものであつたと思はれる。或は「松龜風流」などいふ曲目も名は傳つてゐる。同じ鳥にしても、鳳凰風流などいふのがある。「仙人風流」「蒼頡風流」「青龍風流」などいふ名目を見ると、如何にも、能樂をずつと高尚にすることに役立つた先進藝能なる延年舞の風流の影響の、殘つてゐたことが思はせられる。しかもまた、「春日風流」「住吉風流」「布留風流」「相生風流」などいふ題目を考へると、皆がさうでないとしても、その中には神能と深い關係を持つたものゝあつたことが思はれる。その一方、前にもいつた通り、狂言に這入つて行つたものもあつたことの想像出來るものがある。「毘沙門風流」「餅風流」「蟻風流」その他、福神風流、三面風流などは、今も狂言に、それと同じ系統のものと思はれる曲を考へることは出來る。

鶴龜の謠によつて、小口を切らうと試みた鶴の物語の計畫が、唯それだけでもう、許された時間を費したことになつた。だから、ほんの目安だけを竝べて、私のいはうとした考へに對して、責任を塞いで置きたいと思ふ。鶴龜と熟して、長命延齡の禽蟲の標本と考へたのは、漢土傳來の信仰であるが、それが勢ひを盛り返して來たのは、福神信仰の隆んになつた室町時代であつたやうである。その頃すでに、支那では龜に對する考へ方があまりに廢頽的享樂を聯想させることになつてゐて、紳士としては、口外を愼まなければならなくなつてゐたでもあらうが、彼土の舊時代

の文化を爲入れたまゝの我が國では、龜についても依然、鶴と竝べて好しい聯想ばかりを持つに過ぎなかつた。それで勿論、藝能以外にも、さうした信仰は失せることなく、今まで續いて來た。だが、さうした漢土の信仰といつたものを受ける土臺になつた日本の古代民族信仰に、幾分でも鶴龜延年の思想があつたかといふことが、實は本題になるはずだつたのである。

所謂「たづ」の中には、勿論「つる」も這入つたけれど、「たづ」は必しも、後代の我々の考へる「つる」の類ばかりでなかつた。必高行く翅を持つて身は大きく、色は白かつた。必しも、近代の考へに上り易い脚の長いことが「たづ」の資格でなかつた。だから、その中特に、「脚高たづ」に限つて「あしたづ」といつたのだといふことを述べるつもりも含まれてゐる。今年の詠進歌などにも、幾百幾千とよみ込まれるだらうあしたづなる語は、蘆叢にゐる鶴でないことは勿論、丹頂鶴でもなささうだといふことがいへれば幸ひであつた。さうして最後にとつて置いた問題がある。日本民族共通の信仰の樂土常世の國に住む鳥で、人間の魂を保管して、搬び來り携へ去る白鳥が、古代人の考へた「たづ」であつた。靈魂の身に這入ることが、生命の初まりでもあり、復活でもあつた。その魂の鳥なる「たづ」と、鶴（カク）鵠（コク）と結びついて、長命の鳥といふ考へを育てゝ行つたことは、讀者の方々にとつても、考へ難くなからうと思つたのであつた。

春日若宮御祭の研究

おん祭りの今と昔と

春日のおん祭りに關しては、一番參考になるのは「嘉慶元年春日臨時祭記」のやうです。この本は南北合一の頃の記錄であるが、元々若宮祭りの記事ではありません。所が、これが臨時祭りの記錄であつたのかといふかるほど、只今の若宮祭りの行事と、ある點までぴつたりと合つてゐる。役々の名前なども大方合つてゐる。其より昔の臨時祭りは、ずつと古い記錄で見て、嘉元記の樣な風のものではないだらうかと思はれる程だが、事實さう書いてあるのだから、此頃の事として間違ひはあるまい。今行はれてゐる若宮祭りは、此臨時祭記によつて組織し直したものではないかと思はれるほど、よく似てゐる。

しかし、同時に春日祭り――普通、申祭（サルマツ）りと通稱する――も、今行はれてゐる若宮祭りと似たところがあります。今の若宮祭りといふのは、春日祭りと臨時祭りとを突き交ぜたものだといへば、大體さうした疑問は釋ける樣な氣がします。若宮祭りがある時代衰へたのを復興する時に、さう

昭和十五年四月「能樂畫報」第三十五卷第四號

したともとれるが、どうも春日祭りとしては、却つて此方が盛んであつたらしいから、其についてて又色々手入れをする機會があつたのではないかと思はれます。一つは此御祭は盛んは盛んでも、本宮の二度の恒例臨時の祭りと比べて、本質としての重要性が輕いとでも言ふか、まあそんな事から、時々延期したり、延期したまゝ擧行せずにすました年もあり、又もし行つても極々内々ですました年も度々あつたらしく、頻々と間隔が出來て居ります。勿論室町以後の記錄です。其以前にもさういふ事がなかつたとは言へないとすれば、毎年行つて居なければ段々變形し、忘却して來る樣な事はあつたといへます。

今度、二度目に若宮祭りを拜しまして、先に感じなかつたことを申せば、大乘院寺社雜事記を見ますと、毎年の恒例だからではありませうが――記事は頗、簡單である。けれども時々參考になるいゝ記事がある。譬へば、

祭禮行列次第、別會五師以中綱進之。小番取進之――尋尊大僧正記（享德三年十一月廿六日）。

同樣な文が後に見える。譬へば、長祿二年十一月廿六日の所に、

自別會五師方行列次第以中綱進之。小番取進之。立紙二書、三本式也。但近例折紙二書之。馬長頭辨法印・善定房法印權大僧都・宗禪房權少僧都・定清大法師・懷兼大法師・田樂頭・琳舜・房權律師・淨眞房擬講。流鏑馬……自餘如例也。

これらによれば、田樂は興福寺から出すものである。さうして五師から、其々田樂頭の出ること

も知れる。若宮祭りに年地を定める五師の坊から、若宮祭りをまかなふのであつて、本座新座の田樂も、五師の坊の監督で出る猿樂も、この五師の坊に關係はあるが、田樂から見ればずつと交渉が薄くなる。五師の坊中心に見れば、田樂はうちの者、猿樂はよそから來るといふやうな樣子がみえる。

若宮祭りは若宮の神官が行ふのであるが、所謂「おんまつり」の行列は、五師の坊が行ふものというてよいのである。

「春日若宮御祭禮圖」を見ても、只今とは時間が違ふ。お祭りの行列がお旅所に這入ると、直ぐに接續してお旅所の儀式が初まるやうで、だいぶ時間が變つて來てゐる。それよりも私の一番失望したのは、御旅所の芝舞臺が臨時祭記にはちやんとした舞臺としてあつたらしいことである。今のは卽、土居の舞臺である。前回來た時も今度と同樣、芝舞臺であつた。私は其が古くからの形だと信じて、相應の理論を導いて來た。芝舞臺が先入主になつて、それからいろ〳〵空想してゐたのだが、それがはづれたのである。

臨時祭記の御旅所の舞臺の圖では、板の舞臺でなければならないと思ふが、芝の樣にも見える。もしそれなら、露臺とでも書きさうなものだ。

又、圖にある舞臺前方の「中門」は、後にいふ埒であらうが、或はもとから、埒であつたのを、中門と呼んでゐたのかも知れない。

祭りのお練り

若宮を出てお旅所に這入るあのお練りは何であるか、と言ふと、同じく御神幸を中心とした行列と見えるが、實はあゝ言ふ風なのを私は近頃「招かれざる客」といつてゐる。方々の祭りの節、まれびととして臨む者の中、正座に來るのが眞のまれびと。そしてそのまれびとに正式に隨行して來る一行がある。所がさうした客座の外に立つて、之を眺めてゐるものが來る。これが精靈、すぴりつとに當る者で、祭りや饗宴を羨んでやつて來るのである。

田樂や猿樂についても其が言はれる。田樂は內々の者、猿樂は外のものである。だが同時に二つながら、若宮祭りからいへば、招かれざる客なのである。其田樂が正式のものゝ姿を備へて來ると、又猿樂が其に對して外の者として添うて來る。繪で見ても、田樂師の扱ひが違つてゐる。又、八處女等の神樂に對しては細男（セイナウ）といふ異風なものが出て來る。

少し話は違ふが、雅樂を盛んにするのは、——此想像は大分問題になりさうだが——相撲に雅樂が附いて發達して來たのではないか。相撲の節會には、雅樂が附きものであつた。臨時祭記にも雅樂は見えてゐるが、どうも相撲との關係からさう思はれる。かうして見ると藝能の組合せにも、皆相當據り所がある。わき藝とももどきとも附屬藝ともいへる。それで、三つのものが六つにもなつてゐる。

藝能以外のもので見ると、行列の最初に、京都から來た氏の長者の使に當る者とせられてゐる日の使が出る。それに對して五師の坊から澤山の人が出る。馬長の稚兒が出て來る。馬長頭と言ふ名目が大乘院寺社雜事記には見えて、五人出て居る。其が出ないで稚兒だけが出るやうになつてゐるのだ。それをめぐつて供が出る。その外願主が一つの中心になつてゐるが、出る所がきまつてゐる。只今忘れたが、神樣が外へお出ましになつて活躍して居られるときは、願をかけて聽いて頂けるものと信じた。其が祭りの時の願主である。主として神樂を奏して法樂を奉るつもりなのであらう。それは大和の豪族が出なければ願主が出ないから、祭りの要素が缺ける。それだから郡山其他大和の諸侯が參向するやうになつた。

その外大きな太刀を持つた者が出る。あれは奈良の六方法師・六方衆ともいふ者の流れであらう。これが芝居の六方の語源をなすものです。濶達といへば濶達、亂暴狼籍なる六方衆の風が、藝能化して傳つたのが芝居の六方である。この六方と語は變るが、かぶきと言ふ語からして、そもそもさうだし、其から寛闊丹前などゝ、外形も內容も變つて行つたが、この六方法師は祇園の犬神人、加茂の放免などに似た行裝であつたからだらうと思ふ。野太刀も、其姿をうつしたものと思はれる。

春日祭りならば、宮廷から近衞使が出なければならず、それと共に內侍使が出ました。春日祭りはもと〳〵齋女が出て、それが內侍使になつたのです。近衞使はそれについて送つて行く形だつ

たのが、却て此方が使の本體らしく見え出したのです。其から藤氏の氏の長者自身、其と別に出向いて來る事がありました。此が氏使となつたのです。臨時祭りには近衞使や內侍使が來ない。これも特別の事があつて、もと氏使が來たのが、其も來ないで、その又代理といつた意味で、奈良で出すやうになつたのが日の使だといふ說がよい樣です。

興福寺の僧が日の使に扮したのであるといふが、日の使の意義は、はつきりわからない。が、ともかく宮廷から來たものではない。この日の使は若宮祭りにもとからあつたかどうかわからない。此起原の說明として、藤原忠通が、これに當る役を勤めた處、急病で裝束を樂人に與へて代理させ、その日の使に命じたから日の使といふ、といふ傳へは訣らぬ樣で意味がありさうだ。交替で勤務することが、日の勤めであり、藏人にも日下蔦（ヒノゲフ）などいふ名稱もある位だから、當番のことである。當番の人が使として來る位の義かも知れぬ。併し、春日祭りに本來の性質を等しくしてゐる、大原野祭りで見ると、此祭りには神主が卜ひ定められる。其には藤原北家長岡大臣（內麻呂）の子孫から採るといふ事になつてゐて、毎年さうしてゐたらしいことは、北山抄にあります。だから、京都から來なければならなかつた時代には此使が、神主以外に今一人毎年下つたと見られませう。さうして其が何時の代からか、出る家が——內麻呂流でも——きまつて、日野家一流といふ事になつてゐたのではないか。其は內麻呂流では、此流れと今一つ藤原本流ともいふべき冬嗣の系統の外は微々たるものだから、結果日野流が、かういふ方面には用ゐられるのでせう。大

原野神社では一年神主であり、春日では若宮祭りに日野使が出た、かういふことになるのではありませんか。ともかく若宮祭りの行列に出るものゝ中には、興福寺から出るのに繋らず、臨時祭りは勿論、春日祭りに出た種目も出來る。僧上といへば僧上だが、一つの模擬行列です。さういふ所があります。だから前にも言ひました臨時祭りを型としてゐるものだといふ事が、はつきりして來ます。

それから巫女、藝能の者が出て來る。更にも一つ流鏑馬が出る。これは願主に附屬したものである。それから大和大名の連衆、六方の連衆が出た。それで一通り、祭り行列の整理がつく。つまり、神ではなく、招かれざる客の一行で、それが神の祝福に來た形だ。そしてそれは、春日祭りや臨時祭りの一行の形に似せた姿を見せてゐるのである。

公人の梅の白枝（ズハエ）

行列には二種類ある訣で、藝能の連衆と、京都からの使とに大別されるが、初めの方は、拍手の公人、戸上の公人とある。舊記には既に公人の字を書いてゐるが、公人は奈良だけの宛て字らしい。戸上拍手（カシデ）はわからないが、「とがめの公人」だといふ説もある。梅の白枝（ズハエ）を持つてゐるのがそれで、多くの舊社の祭禮には、これが先頭に立つ事が多い。

これは褌（チハヤ）をかけ、その裾を長く〳〵引いてゐる。臨時祭記にも出てをり、寺社雜事記にはこれに

要する木綿の分量も書いてあります。このちはやは年中行事繪詞の加茂祭りの條にもあり、春日靈驗記でもかけてゐる。加茂でも春日でも又餘所でもかけてゐるが、異風な感を興させるもので、お祭りにはふさはしいものである。巫女がかける笈摺に似たもの、あれも褌である。能などでは袖なしの前のあいてる側繼、あれがちはやである。公人のは裾を長く引きずるのが特長だが、加茂祭りもその通りである。元來このちはやは、裂地の中に穴をあけ、其處に首を入れて前にも後にも垂れるもので、原始的な着物である。着物が發達してからは、その上にかける、といふ狀態になつたのである。

公人は奈良だけだらうと思ふのは、これが春日神社から出たのではなく、興福寺から出たものだからだ。「公人」は候人、卽、さむらひゞとである。寺にゐる一種の武力をもつた奴隷法師なのである。「候人」を音讀もし、又「さむらひぼふし」とも言つた。

梅の白枝はしもとで、警固の爲の意味の物である。社々の前驅には、梅のずはえを持つことが實に多い。春日靈驗記にある、鏡を盜んだ男を捕へ、鏡をとり返して歸る行列にもそれが出てゐる。申祭りの時に、故老の神人が南大門から南に向つて、祭りの終りに强盜々々と中音で言つたと言ふ。其理由はわからぬが、ともかくも昔からして居るのだと答へたよしが御祭禮圖に見えてゐるが、其處にも書いてあるとほり、春日祭りにつきものゝ爲來りだつたのが、江戸の享保まで殘つてゐた訣だ。江家次第春日祭使途中次第に詳しくあります。一種のきまつた餘興とも演劇ともと

れるものです。之が昔は行はれてゐたのだが、後にさう言ふ事もなくなつて、しかも尙男の乳房のやうに、どこかに縋つて殘つて居ようとした形が見えます。だから大宮祭りのが臨時祭りに、臨時祭りのが若宮祭りにといふ風に、次第に這入つて殘るわけもわかります。一度さうした盜人が、春日使一行を襲うたことがあつたのでせう。其が歷史になつて、くり返された訣です。

白馬の節會に、犯人を作つて梅の白枝で打擲すると言ふ例があるが、北陣で檢非違使が雜犯を裁斷する式も、白馬節會のつきものです。起原が一つと考へられるのはおもしろいが、ちよつと場合が違ひますし、まあ宿題にしておいた方がいゝ。

公人がするのかどうか、誰がするのかわかりません。古くは近衞使について行つた近衞府の下部のやうです。祿を分ける前提として、盜人を拷へ、之が隱匿した贓物の所在を白狀する、といふ事になつてゐます。狂言の「瓜盜人」の鬼の責めが思ひ出されるが、齋藤香村氏によれば、「鬪罪人」はそれよりも、もつと爲組みが複雜になつてゐます。祇園會の山鉾を出す相談で、地獄の鬼が罪人を責めるところを囃子物に乘せてしようといふことに定まり、主人が罪人、太郎冠者が鬼の鬪を引きあてゝその稽古をするといふのです。

愛知縣には「かんど打つ」といふことがある。それは祝福に行つて物を貰ふことにさう言ふらしい。祭り日の闖入者、饗應の座を羨んで這入りこんで來る者といふことになる。さうした處に由來がある。白枝は、奈良のは特に長い。

十列の稚子はもと〳〵伶人なんでせう。舞人は武官です。使の伴だから陪從。其が素らしいのです。舞はないのではありませんが、普通は歌の方です。それが東遊びなどに關係します。

若宮の祭神

若宮樣は、元は畏い神でおありになつたのかどうかと言ふことだが、これについては、明應七年十二月三日、

昨夕自二九條殿一御書到來。若宮御本地事、預二御尋一、可二注進一之也。

とあつて、其後に、案文が載つてゐる。

……春日若宮御本地事。文殊候。令レ出二現師子間一給故也。（師子間者大宮殿第二御殿與第三御殿之間於申也）御出現時分事如レ仰長保五年候歟。不二存知仕一候。被レ稱二別殿一候事者、大治二年候。祭禮初候事者保延三年候。

其外、十一面觀音、阿彌陀八幡が若宮と示現せられたともいふと謂つた風な異說をあげて、此にもまだ異說はあるが、悉皆を南無阿彌陀佛と御祈念あるべく候といふ樣な答申をしてゐる。まるで落し咄です。九條殿では驚いたでせう。

若宮が天押雲命だといふ說は、御祭禮略記にあつて、「名法要集にあり。然れども若宮神主一家の祕にて知ることなし。長保五年三月三日、一三の御殿の間にあらはれさせ給ひしを、時風五代の

孫中臣連是忠三の御殿に移し祝を奉る云々」と、こゝでも祟り神だとある。たゝり神をば、大きな威力のある神様に附屬させて、若宮と呼んで和め鎭めるやうにしたのだといふのが、柳田國男先生の若宮考です。殊に八幡神關係について詳しく說かれてゐます。

若宮と若宮八幡との關係を考へれば、細男の出るのは八幡系だといふ考へも出て來るが、それは少し合理化しすぎるでせう。

祭りの時期は、しきりに動いてゐる。動かない方が不思議だと思はれる樣な時代さへありました。大和や河內に變事があつたりすると動いてゐます。

今は八月十一日に御旅所を造り、九月に棟上を行つてゐるが、寺社雜事記時代は、原則としては、十一月廿七日だと思ふが、それさへ動搖がある。若宮祭りは九月十七日に行つたといふのが記錄にある古い形でせう。平安朝末期です。併しどういふ訣か、若宮の祭禮の日は動搖が激しいのです。第一、舊記類で見ても、戰亂や物忌みで延すのは勿論、雨や荒天で延期してゐる例も段々あります。祭りに附屬した藝能の行はれない樣な場合には、日を替へることが出來たらしいのです。本社の祭禮にも延引の例が多いのですが、何か我々には窺ひ知れない理由と、日を替へる方法とがあつたものと思はれます。殊に若宮祭りが五月に行はれてゐるのなどは、不思議だが度々あります。

大和猿樂・翁

猿樂の大和の四座は、春日神社からはかなり遠いと思はれるが、大した事はない。本家が他國に移つてゐたことが、中間にあるとすれば——京都でなく——其期間は別だ。寶生はやゝ遠くて、昔の足で半日だが、觀世などは結崎だし、金剛の坂戸だつて半日かゝらない。

金春は、翁に對して、他流とは特別な點があるかどうかと言ふ問題だが、これについて、齋藤香村さんは、「金春は四座の中では最古いから、翁もやはり金春が古いと言はねばなるまいが、この翁について、金春と觀世との間に、古く足利時代に問題が起つた事があつたらしい。それは、觀世大夫が、代々京都の吉田神社から翁の傳授を受けてゐる一事から想像されるので、單に翁の神聖を裏書きする必要だけではない樣な氣がする」との說です。

影向松・鏡板・風流・開口

松の下の開口能の、例の影向の松だが、これは、昔からある標山（シメヤマ）——王朝時代の大嘗祭では、ひをのやま、或はへうのやまと言つた——の信仰から考へて、神樣の天降りなさる場所を、人がこことときめてゐる。さうした木のある所が標山で、春日の一の松もこれで解決すべきものだらう位に漠然と考へてゐました。ところが今日の能舞臺などの「鏡板の松」をこの影向松を表したもの

だといふ高野斑山博士の説が發表になりました。如何にも尤だと贊同してゐました。勿論其通り、標山・鏡板もおしつめれば一つになるのですが、まうちよつと、鏡板の松に直接に關係あるものが介在してゐるやうな氣がします。昔の松拍(マツバヤシ)を考へると、松の木を切つたものを曳いて來て、其を中心に大家の祝福をして廻つてゐる。それが松拍(マツバヤシ)なのです。神木の一部分を切つて持つて來る。卽、其に御分靈がのりうつつておいでになる。春日でいへば、時々都へ動座なされた神木といふのが、同じ信仰です。この伐りはやし(伐る・截るの祝福語)た木卽、松のはやしを牽いて其下で演じた藝能であるから、中門から庭の藝になり、庭から舞臺の藝になつても、なほ、はやした木だけは其形容を留めてゐる。其が段々誇張せられて老木を描くやうになつた。猿樂は古く松拍を行ふ徒だつたとは言ひきれません。尤、猿樂役者も後に松囃子を行うたことは確かですが、かう言ふ祝福藝能の村々では、拍子(ハヤシ)物を持つて居るのが多かつたし、拍子物の實體は囃すからはやし物でなく、さうしたひき物があり、ねりの中心になつてゐた事は考へなくてはならぬのです。ついでに橋掛りの松だが、斑山博士の説明は、橋掛りの松にも關聯して居まして、如何にも心ゆくうつくしい感じ方でした。此は私の方ではうまく説けないのです。唯、猿樂以前の先輩藝能の舞臺に既に其があつたと見るのが、ほんたうではないかと思ふのです。

風流も、翁烏帽子狩衣で、私どもの考へてゐる風流といふものと違つて感じられる。齋藤氏によれば、三笠風流といふのは、明治になつてからの新作ださうです。

細男・高足・呪師

細男は主として退る足ばかり、舞樂は出る足ばかりでした。此は大變おもしろい事だと思ひます。齋藤さんが「大ていの藝能が出るのに呪師が出て來なかつたのは一寸意外に思つた」と言つてをられたが、田樂が發達して來ると、その中にとり込められて、呪師其ものは痕を潛めました。だから今日呪師を見ることは望めません。五師の坊であれだけ保護したのだが、流行の力がもつと大切だつたのでせう。流行しなくなると忽ち他の藝能の中へよい物が吸收せられて了ふ。田樂自身があの通りで、今度は刀玉など曲りなりにもやつてゐたが、前はあれもなかつた。

高足なども、工夫がしやべるを足で土へ突き込むやうな形をするだけで、一寸足をかけるだけで、一向たあいのないものだが、今だつて高足に乘る地方の祭りが多いのだから、何でもないのです。一本足の竹馬のやうにして、兩足をかける横木がある。それに乘つて走るんでせう。正しくは一足でせうが、何處でも高足(タカアシ)といふ樣です。唯の一本の高足が、竹馬になつて珍しくなくなつてから、一足を高足と專ら言ひ慣らしたのでせう。

能舞臺の解説

昭和十四年二月「梅若」第七卷第二號

此會の此役は久しく、先輩山崎樂堂さんが續けられてゐましたが、今度は私が代つて申すことになりました。謂はゞ翁の替りに、風流が出て來た樣なものです。とは申せ、私にはお能の解説などゝ謂つた處で、全くの門外漢でございます。約束の多い舞臺について、完全な解説などは出來さうもありません。唯、何處か一點づゝでも、皆さんの御參考になる處があれば、それで結構だと思うて出た次第です。

偖、先程皆樣も御覽になりました『小袖曾我』梅若さんの御兄弟で、ちようど程よい年輩(トシバイ)で、景英さんは如何にも思慮深い十郎そのものであり、安弘さんは、又元氣な而もいぢらしい處のある能の五郎らしくて、感じ深く拜見しました。能に於ける曾我物は後の語の世話物とでも申しませうか、さうした意味のものゝ樣です。なる程かうして觀てますと、歌舞伎などゝ違つて却つて、今樣と申しますか、近代的な感じが致すのも、不思議なもので御座います。

私の話は、當節のお能の上を語るのではなく、ずつと古く、譬へば梅若に關したことで申しまし

ても、丹波や、或は伏見等で行はれてゐた時代に戻つてお話したいと存じます。そして其を話の本筋、お能の舞臺にかけて話を進めて行くやうな事にしたいと思ひます。御覽の通り、最初からこんなに立派なお能の舞臺が出來てゐたとは、誰しもお思ひにはなりますまいが、――尤、この會館の舞臺は、假設の物で、話の對象とするには完全なものではありませんが――譬へば此『橋掛』と言ふ長い廊下の樣な處も、長さは實は色々だつたので、五間、七間乃至十一間と言つた長いのもありました。又、大概はこの樣に本舞臺の横についてゐますが、これが後についてゐるのもありました。現に京都の片山家の舞臺にそれを見る事が出來ました。勿論、『鏡板の松』などもありやうはなかつたのです。大體、お能と言ふものは、どこからでも見られる樣に、見物は舞臺のぐるりの何處にでも控へてゐられるやうに出來てゐます。是は、お能と言ふものが、多くの見物人を本位としてゐなかつた事を示すものなのです。只一人の貴人、或は一家の主人と言つたその時の主座の人にのみ觀せればよかつたのです。さうした相伴に見るものは、自由に見ることが出來る。勝手に藝をやつてゐるから見たい者は勝手にどこからでも御覽、と言つた自由な觀客席をこさへて居たのです。その一つの例に、江戸柳營の町入能と言ふのがあります。あれがさうで、將軍の上覽の際、特に町人共にもお能拜見差許すと云つた意味なのです。

偖、前にも申しました能舞臺は、その他の點に於ても、元來かうした完全な形式を備へてゐたものでありませんが、それでは、古くはどうであつたか、お話して見ませう。始めは多く、庭でや

つたものだと思はれます。所謂、『庭の能』で、莚などの上でしたものゝやうです。だから勢、勿論平舞臺です。神社佛閣その他のぱとろんの庭で行つたものでせう。それがやがて舞臺めいた小高い物、所謂露臺を造つて、その上で演じる事になつたものゝやうです。それとてもきまつた方式があるのではなく、隨分自由だつたものと考へてよいと思ひます。舞臺の舞樂のやうなものになつた事もあるでせう。其には舞樂の影響もあつたかも知れません。その外に、『相撲節會』と言ふ儀式がありましたが、この場合の影響も舞臺に現れてゐるのではないかと思はれます。又、移動舞臺の名殘は「曲舞」に殘つてゐました。舞車の曲などを見ても、さう思はれます。芝能又は芝居能と稱せられるものは、築土塀の事を芝居と稱することから見ても、芝の上に居てするといふ事ではないのが訣ります。謂はゞ土壇の上でするのです。奈良の若宮祭りの能が、今日まで、その面影を傳へてゐるやうです。

本道の事はすぐ訣りませんが、田樂と言ふものは、家の中でしたと言ふ記錄は見當りません。大ていの田樂は庭の中門、――今も田舍では塀中門など言ふものを持つた建築が多いのですが――卽、所謂、寢殿造りの中門の處で演ぜられました。それで、この演技で重要なものに、『中門口』と呼ぶものがあります。只一つ、中門から中に入つた記錄が、經覺私要鈔と言ふ書に出てゐますのを、小林靜雄氏が見つけて居られます。應仁元年五月五日の條に、『午刻猿樂參。樂屋公文所也。屏中門ヨリ林入了。……』とあります。この『林』と言ふのは、卽『松』の事でせう。『松囃

子』――又松拍子・松拍など――と言ふ事は室町時代以下、江戸の末まで行はれてゐます。その松拍子などの中心になるものが、はやし卽「林」だつたのです。當時、別にとりたてゝ言ふ程の事でなく、言はゞ家常茶飯事ですから、誰もその形容や用途は書き留めて置かなかつたのです。松拍といふ名稱は行はれても、形式は次第に變つてゐたのです。記錄的な文獻がなかつたまゝで來たものと思はれます。つまり、始終お祭りやなんか祝言事でもありますと、「はやす」は元、木を伐ることです。「はやし」は伐つた大きな木の枝を幹ごと伐つて、これに當る事を後世にも松切り又は松下し（マツオロ）と言つてゐますが、それを、祝福すべき家へ擔ぎ込んで、祝言を陳べ、又所作を行つたのです。中心に之を置くから『松林』（松囃子）と言つたものです。「囃」の聯想が深くなつて、はやされた木を忘れたのです。風流と言ふものにも、之に似たものが多かつた。場合によれば「林」を風流とも言ふが、團體の中心になるものと、個人々々の頭上なり、著物なりについてゐるものが、風流と言はれる樣になつた。つまり風流をつけると、假裝した形になるのである。その面影を今も、千歲三番叟に附隨して殘つてゐる「風流」の類にも、その俤は見る事が出來ませう。そして、この松を擔ぎ込んでそれを立て、その圍りで祝言を述べ、或は謠ひ舞ひしたものなのです。

この假裝支度の風流をつけたものが、風流藝として分化し、更に其が風流であつたことすら忘れて了つて、一番の能として獨立したらしいものもあります。狂言にもその風流から出た事を露骨

に示してゐるものがあります。

能で申せば、譬へば今日最後にある「猩々」などに、やはりある本藝の間に、飛び入りのやうに、して・わきなどの詞・所作などにきつかけをつくつて、出て來る風流の一つが、人間以外の異類の物が所作するといふ考への藝能が、あれだけに發達して來たのだといふ事が想像せられます。古來、この『鏡板の松』については諸說色々でしたが、私はまづこの『松』の名殘だと解して居ります。つまり神降しの爲に設ける訣だつたのです。自然木のあるその圍りで、一種の神懸りを起して、神事を行ふ。其が段々儀式化して來る。影向の松の信仰が其であります。春日の社の一の松で行はれる松の下の式も其なのです。かうした事から、『鏡板の松』を暗示されたと言ふ解釋が先輩高野斑山翁によつてなされて參りました。私も以前、同樣に「標(ヘウ)の山(ヤマ)」山・鉾の前型の研究から、其に似たことを申して居たことでした。だが唯今は、私は前述の樣に、「林」を持ちこんで、祝言を述べた松拍子の松のある處でなければ、神事藝能は行はれない。其で後漸く「松」を描く鏡板が出來て、一方だけ見物を遮斷することになつたのだと考へて居ります。さうした事から又、橋掛りの一の松・二の松・三の松等に關しても同樣な事が言はれるのではないかと考へられますが、そこまで立ち入る事は些か危險です。

松の木のはやした「林」又は「松拍」と謂はれるものは、諸藝能に廣く通用してゐたので、唯記錄類に見える「松拍」といふのは、一唱門師の徒の爲事の樣に見えるだけであります。

神懸りの狀態になると申しましたが、今日これから梅若さんの舞はれる笘の井筒にしても、又杜若、一寸異りますが、松風、其に二人靜の樣なものに、さうした物を見出す事が出來ます。お能の本質的な演出に、かうしたものを見る事が出來るのは、慥かに前述の私の考への一證左になると思ひます。一人の役が二人分の藝を演ずることになつて居たり、又二人が同時に一つ事を演じたりするのは、つまり神懸りの形が、藝能式に發達變化して來たわけなのです。

從つて能舞臺の構造に關する從來の諸說中、神樂殿の影響を深く見過ぎる說は、私はあまり贊成致しません。これは却つて能舞臺の發達した後の形の模倣が見られる位ですから、まあ大した參考にはなりません。又雅樂舞臺の影響についても、何等根據のない事です。今も數種見ることが出來ますが、『鎌倉御所』の繪圖と言ふものに、能舞臺に似たものが見られますが、この『鎌倉御所』と言ふのは勿論嘘です。ですがともかく室町時代の柳營又は大名屋敷の僭上した建物のぷらんに違ひはありません。此圖面には、大抵所謂寢殿造りの『泉殿』が能舞臺の役目をして居まして、客殿——寢殿の變化——から見ることが出來る樣になつて居るのです。つまり泉殿がまづ、庭の藝が舞臺の藝になつた最初の建て物と見てよいのだと考へるのです。

更に藝をするものは神聖なものと言ふ一種の信仰、これは、その演者が神になつて、神技をするからです。ですから、その演技に對しても、一種の尊敬を認め、遙か遠方からそれを拜すると言つた風です。今でも、能舞臺の周圍に『白洲(シラス)』と稱し、見所との間に一定の間隔を保つてゐます。

庭の藝・道の藝の場合には棧敷であつた訣です。だから、客殿と棧敷との考へが一つになつて、後世の見所といふものは發達して來たことが察せられます。甚だ荒つぽい話し方に筋を澤山盛り込みまして、お訣りになりかねた御見物があつたらうと思ひます。

獅子舞と石橋

昭和二十二年一月二十七日「時事新報」

能樂の獅子舞には、本式に、赤頭（アカガシラ）に獅子口（シヽグチ）の面（オモテ）をつけて出る石橋（シヤクケウ）と、望月（モチヅキ）や内外詣（ウチトマウデ）のやうに、假面の代りに扇をかづき、赤頭をつけるのとがある。現實の獅子として出て來るのが石橋で、獅子藝で世を渡る藝能者の役を勤める場合、扇をつけて出る訣なのである。小澤刑部（ヲザハギヤウブ）・伊勢の神主などは、望まれて世間の獅子藝能を舞ふのである。

江戸時代の歌舞妓所作事の獅子舞で、石橋うつしでありながら、扇に牡丹をつけ、赤頭で舞つたものゝ多かつたのは、見當違ひである。本行（ホンギヤウ）らしく爲立て直した連獅子・鏡獅子の類は、石橋物らしい姿に還つた訣である。だが石橋は法被半切（ハツピハンギリ）など言ふ姿で、首から下は全くの人である。だが、能樂以前は、石橋系統の獅子舞があつたとすれば、恐らく胴體も四つ脚も、やはり獸類の姿を模したものだつたらう。能の獅子へ來る一つ前の形は、延年舞の中にあつたのではなからうか。趣向の石橋に並行してゐるのは、延年小風流の「聲明師詣（シヤウミヤウジセイリヤウセンニ）清涼山一事（マウヅルコト）」と言ふ曲である。奥州出の僧一人、聲明研究の爲に都へ上る。又一人の僧、これと道で遇ふ。其志を聞いて、それな

ら一層本元の唐土の五臺山、清凉山へ渡つたがよいと言ふ。奥州の僧、なる程昔寂昭法師――大江定基――も其山へ參詣して、種々不思議を見たと聞いてゐる。案内してくれ、お伴しよう、と言ひ出す。やがて清凉山に達する。こゝは文珠の淨土だ。法號を唱へ、祈念せよと言ふ。

笙歌遙に聞え候　孤雲の上。是は聖衆の來迎か。まのあたりなる奇特かな。

とある。寂昭の作と言はれた詩の一部だが、石橋の中入前にも、これに似た文がある。

能なら、後じてと言ふ風で、そこへ文珠菩薩獅子に乘つて、脇士二人を從へて出る。汝等の志にめでゝ現れ、聲明の祕曲を授け給ふ、と言ふ。旅の僧、このついでに、極樂の歌舞の曲を見せ給へ、と願ふ。心安いこと。それでは見せてやらうと言つて、囃しになる。

靈山を訪ふといふ曲ばかり多い延年舞の事だから、此外にも、寂昭法師が清凉山で不思議を見たことを作つたものがあつた事は、想像して不都合でない。天台山の石橋を見て記錄を作つたのは、成尋律師だつたのだが、其を延年を作つた何寺かの僧が、色々な點で錯覺をまじへたものだらう。延年舞には風流の被物をした動物類が活躍するので、右の文珠菩薩を乘せて來た獅子が、大いに狂うた段があつたものと思はれる。

石橋の方でも、間狂言の仙人の這入つて後、して・つれで文珠と獅子とが現れてよいはずだが、何時の間にか、獅子だけがはたらくことになつたのである。

しばらく待たせ給へや。影向の時節も今、いく程よも過ぎじ。

と言ふ語は、前じての語が地にふり替つたのである。謠ひ地よりも、寧、間狂言に牽かれて、獅子の出る形になつてゐる。

石橋の順道な解釋からすれば、獅子が文珠の化身と言ふことになりさうだ。文珠菩薩であつてこそ、獅子の座にこそ直りけれが、適切なので、獅子が獅子の座に直つたのでは、へんてつもない洒落にもならぬ文章になる。併、恐らく今日では、もうさうした變化の痕を辿ることの出來る資料は殘つて居ないで、却つて、後じての輝く樣な獅子の姿が、目に妥當性を持つて、動すことが出來なくなつた。

能自身にも、石橋系統以外の民俗舞踊式の獅子のあつた事を示してゐる。歌舞妓の獅子舞も、本流は石橋から出たやうに見えるのも、さう見せたゞけの事である。牡獅子、牝獅子の番――交――獅子、其に絡む嫉妬獅子とでもいふべき二人立の獅子、三人立の獅子と言つた形の石橋樣式を流しこんだものが多かつた。

上方歌舞妓の立役の獅子舞から岐れて、江戸へ流れこんだ女形の踊りの獅子は、一時期も二時期も畫することになつた。瀨川菊之丞の相生獅子――風流相生獅子――は、名でも訣る樣に交ひ獅子であつて、兩腕で使うた牝牡の手獅子であり、現に江戸下り以前は、番獅子と言つた樣だ。菊之丞の第二曲は英獅子――通稱枕獅子――で、其名をとつたのが、中村富十郎の英執著獅子だつたのである。元々石橋から出たものではない此系統の獅子が、踊りには多かつた。其外に、

太神樂・角兵衞獅子をとりこんだ、鞍馬獅子・角兵衞の一人獅子、勢獅子（キホヒジ）のやうな二人だちがあり、「三人石橋」の類は、三人だちである。此等は皆石橋が出來る前から、既にその種は用意せられてゐたのである。

薪能と呪師走の翁

昭和二十五年二月「春日神社パンフレット」

久しく絶えてゐた薪能が復活して、こゝに再、恒例の行事となつたのは、近年のことである。志深い大和侍の兒孫と稱する人があつて、南都の神事藝能を興すことを以て、偏に祖先にこたへる道と信じ、世の思議を越える奇特を行つたことによるのである。

舊日本の民俗には、年の初め一月望日に御薪（ミカマギ）を積んで、平常仕へる所に勤勞の誠を示す風、既に飛鳥の宮廷記錄があり、現に「小正月」の習俗として殘存する地方も多い。

薪能の語原に就いて、近年傾聽すべき新說のあることも知つてゐる。が、姑らく先輩の說に卑見をもまじへて、啓蒙の文を綴る。

興福寺東西金堂の鎭守河上・氷室兩社の神が、右二堂の佛の爲の御薪を積む儀が、二月初めの修二會に併せ行はれた昔から、時を經ていつか西金堂ばかりに執り行ふことになり、更におなじ寺の南大門の芝に、處を定めるに到つたのである。

翁姿の聖者の修二會に來臨した宗教儀禮が、薪を負ふ老躰の振舞ふ藝能になりゆく徑路は、想像

するに容易である。この藝が薪猿樂と呼ばれたのは、猿樂者の演ずる猿樂であつて、薪を積む古習俗に起因することを忘れなかつたことを示すものである。

一躰、猿樂者の興隆したのは、恰も、確執多い大和侍の競ひ起つた時に當つてゐた。宮寺の舊儀も世間動亂に妨げられて、定例どほり行ふことの方が、珍しいほどであつた。

修二會は行ふことなく、薪猿樂獨り行はれることもあつた亂離の間に、其も榮えるものは榮えて、猿樂全盛の春は來た。

○

古くは二月二日、近代の風では、其六日から向う一七日。その中、三日目以後は、毎日一座、四日間、四座の太夫の薪猿樂奉納が、春日社頭に行はれる。最後の日は、四座打ち揃つて南大門の能が行はれた。

猿樂者の持つ藝種目は、必しも單純ではなかつた。種々先行藝能、田樂・曲舞・小歌の類にして、猿樂の中に併容せられずにゐたものは寧、少かつた位である。外來の傳統を持つ呪師の技術も、固よりその一つであつた。

猿樂藝能の基本になつた翁舞は、複雜多趣なものだが、この呪師の演ずる藝種目の中にも、特有の翁はあつた。それを「呪師走(スシハシリ)の翁」と呼び馴れたのは、出自の呪師藝能なることを示すもので、四座其他の猿樂側で言ひのこした語なのであらう。春日社頭の薪能の翁は、此、呪師走と謂はれ

るものである。

猿樂の種々の翁の中、呪師走を以て、最古いものとするに傾く説もある。或は又、翁猿樂の中、外來種に屬する一つの變り手と見ることも出來るやうにも思ふ。そのいづれかは、今年薪能の群集に參加なされたあなた方の「勘」の直感する所に信頼をかけたいと思ふ。

黒川能・觀點の置き所

山形縣には、秋田縣へかけて、室町時代の藝能に關した民俗藝術が多く殘つて居ります。黒川能は、その中でも著しいものゝ一つで、これと鳥海山の下のひやま舞ひとの二つは、特に皆樣に見て頂きたいものであります。この黒川能が二十數年ぶりで上つて來るのであります。世話をして下さつた齋藤氏に感謝しなければならないと思ひます。

特殊の舞臺構造

特にこの能で注意しなければならないのは、舞臺構造であります。京都の壬生念佛を思はせるやうな舞臺で、上下の廊下が橋掛りになつて居り、舞臺の正面には春日神社の神殿を控へて居るのであります。卽、舞臺と神殿との間には屋根がかけられて、全體が內陣のやうな形をもつてゐます。以前は神殿だけが獨立して居つたのですが、現今は、全體として完全な室內舞臺の形式になつて居ります。奉仕する役者はといふと、上座と下座が二部落に別れて居り、こゝで能をする時

昭和十一年九月「能樂畫報」第三十一卷第九號

は、上座は左橋掛り（正面から見て）から出て舞ひ、下座は右橋掛りから出て舞ふことになつて居る。これは最大きな特徵で、今度の公演に幾分でも實現出來れば結構だと思ひます。この神前演奏の形は、春日の若宮祭りの第一日の式と同形式といつていゝと思ひます。しかも、黒川では常にその形式を繰り返してゐるわけで、見物人よりも神に對する法樂を主としてゐることがわかります。

五流の親族

能は上下兩座を通じて三百番も實演出來るといはれてゐます。果して正確にそれだけの數を演出することが出來るかどうか疑問ですが、今度の東上に際しては出來るだけむさぼり見たいと思ひます。地謠・囃子をはじめ、能そのものに對し、專門家或は同好家の一部からは、現在の東京の能謠を標準とした批難があることでせうが、それは謂はれのないことです。まづ、假りに、おほよそ百年も前に首府附近の田舍の演能を見て居る氣持ちで靜かに觀れば、正しい鑑賞が出來ると思ひます。中央の能にしろ謠にしろ、明治以後とても變化もあり進步のあとも確かであるから、それ以前とても、幾度か變轉を重ねてゐるに相違ありません。この能が、今の諸流家元の能の祖先ではありません。けれども或時代に血をわけた、極めて血の濃い親族藝であることを考へねば

なりません。寧、固定して自由を失つて殘つてゐるものと見ても、すぐれた藝が墮落してこんな姿になつたんだと思ふのはいけないと思ひます。たとへば泉お作、泉祐三郎などの照葉狂言などは、能とある點まで分離して考へれば、相當な價値もありましたが、能を標準とすれば、確かに墮落したものといへますけれども、それとこれとは大いに違ひます。

能樂史を省みたい

が又、この能が能樂の起原に近い形だと考へるのも間違ひです。可なり進歩したものであり又、相當に他からの影響も取り込んでゐます。それで尙これだけの特殊性をもつてゐる點は、專門家その他の方々がよくお考へになつていゝことだと思ひます。何も教へられることがなかつたと放言する人があれば、それは能樂の歷史を考へない人なのです。ともかく今の能もかういふ道を通過して來たのだなといふ靜かな見方が一番正しいのです。或は、能を普及させようとする野心のある方などには、黑川能の演出などが參考になることが多いと思ひます。なぜなれば、意識した品格といふものを持ち過ぎてゐませんから、その點で却つて素人にはわかり易いと思ひます。つまり代々の名人の特殊の鍛錬を經なかつた、鍛錬を經て高級な發達をしなかつたといふ點を見るべきでせう。

面白いのは狂言です。表情にも言語にも必多少の驚きを受けられるでせう。殊に方言的な言ひ廻

しなどには、つひわれ〳〵も見てゐて釣り込まれるものがありました。

黑川の能役者へ

今度は、出來るだけ番組に工夫がつまれてゐますから、黑川能の概念は十分に得られるでせう。私共は、まだ見たことのない「翁」を殊に〳〵期待してゐます。最後に、若しこの詞が黑川能役者の方々にもいふことが出來れば、これだけは申したい。「もうこれ以上に新しいものを取り入れるな」といふことです。大山能のやうになつては、存在の意義がなくなります。それは演技上にも、裝束の上にも、總べてについていふべきことだと思ひます。

けれども、底を割つた話をすれば、東京の家元の舞臺で舞ふより、黑川村の春日神社の內陣で行はれるのを見るのがほんとなのです。有志家には、一度彼の地へ行つて御覽になり、實感として の黑川能を得て歸られるやうに奬めます。この實感こそ藝の基礎であり、又學問的に組織する考察の土臺にもなるのであります。(談)

村で見た黒川能

黒川能東京公演に先だつこと二ヶ月、私は偶然あの村（黒川村）に行き合はせて能及び狂言を見ることが出來た。（本誌前號誌上で話した通りである。）そこで上京公演の日も近いといふことを聞いた時、私は、これが果して東京の目の肥えた、しかも高ぶつた能の常連に私共の得たやうな深い感銘や同感を持たせられるかどうかと、黒川村の舞臺、能役者その他の敬虔な氣分に刺戟された共感から危んだ。しかし東京公演に對する能樂批評家の批評を聞いて、すべてが杞憂に過ぎなかつたことを知つて、私は黒川能のために大いに喜んだ。たゞし能樂としてだけ見るのではない我々、つまり日本藝能全體の上に能樂を見、かつ、他の藝能と同じやうに扱つてゐる我々にとつては、多少不滿足な批評も耳にしないではなかつた。

それは第一に狂言が不評判だつたことで、私共はどちらかといへば、上座下座兩座の大夫その他が努力して傳統を保つてゐる能それ自體よりも、實は狂言の方を高く評價すべきだと思つてゐたからである。これは黒川能の人々にとつては名譽でないかも知れないが、地方の藝能或は演劇的

昭和十一年十一月「能樂畫報」第三十一卷第十一號

傾向のあるものとしては當然であり、意味があるのである。黒川能が本道に生きて、少くとも現代に近いものとして、役者にも村の人にも庄内人士にも同感を起し、なほ多少でも伸びて行くのは狂言の方にある筈だと思つた。ところが東京では、狂言に出てくる方言、或は方言的發音に好感を持たなかつたやうに聞いてゐる。これは狂言の性質上、たしかに東京の能樂愛好家の方が間違つてゐると思ふ。

私の印象――少くとも村の生活の全面にわたつて觀察するには一週間位滯在する必要があるのだが、ほんの半日ばかりゐた印象から言へば、流石に兩座の組織によつて村人の心が整頓されてゐるだけあつて、表情にも擧動にも他村に見られない、ある閑雅とはいへないまでもある靜けさが觀取された。大體、私共藝能の行はれる地方を見て歩いた者の經驗からすれば、藝能の行はれてゐる村は却つて質（タチ）が惡いといつた感じを持たされることが多い。處が黒川村は、私の瞥見では非常によい印象を受けた。これは今の社會において能樂の持たれてゐる感じが、村人にも反映してゐるのだ、といつた方が適當だと思ふ。

東京公演の成績については、私は他の能樂愛好家と變つた考へを持つてゐる。それはこの黒川能が、古代を現狀に保持すると共に一地方的に變化を自由に加へてゐるらしい所にある。能評家の話も多くこの點を中心として好意を示されたらしいが、「よく訣る」といふこと、「無暗に囚はれた高雅といふものに偏してゐない」といふこと、「地方風でありながら多少近代味が這入つてき

てゐる」といふ點にある。明治時代に一度能樂が衰へた時期から、その復興した後も引き續いて行はれてゐた泉お作、同祐三郎等の行つた照葉狂言一類の、能樂と三味線音樂及び京舞等を調和したもの――それは能樂からいへば非常な墮落といへるが、ある一面から見れば、今後も能樂の生きて行く道はこれに暗示せられてゐると思つてゐる。それと黑川能とは一つに扱へないけれども、あの能が私を同感させたのも、今の能樂よりも古い姿を持ちながら新しい方向を含んでゐる所があるからだ。

今後も一般の能樂や謠曲は、刻一刻新しい藝術家によつて變つて行くことは確からしい。そして愈、お上品なものになつて行く嫌ひのある一面に、この黑川能の持つてゐるよさを私達はよく顧みてゆくべきだと思つてゐる。かういふと、黑川能が無暗に立派に見えるが、私のいふのは能藝としてばかりでなく、演藝といふ方面を加味してこの能を批評してゐる訣なのだ。何にしても、私は旅行中で觀られなかつたが、觀世の舞臺では、あの黑川の春日神社――兩橋掛りを持つた神社の内陣ともいふべき場所で觀能するやうな恍惚境には、這入れなかつたらうと思ふ。

三河の山村

昭和四年八月「民俗學」第一卷第二號

早川（孝太郎）さんが遠慮をして居りますから私が代つて御話申し上げます。早川さんは、御承知の新興大和繪畫會の會員でございまして、そのお描きになつた繪が今度の展覽會で、何やら褒美を受けられた相であります。その繪の解說を申し上げたいと思ひます。

三河の山村の雪景色には、他所には見られない特色がある樣に思はれます。三河を歩いて居りまして一番心をひかれるのは雪景色、殊に春のはだれの樣子には何とも言はれないものがありまして、殊に心をひかれました。こんなことを話し出しますと何だかせんちめんたるな心がおこつて來ますが、一體今迄の民俗學にはこのせんちめんたるが多分に這入つて居りました。我々はそれを卒業しようと心掛けて來たのですが、今度がその「民族」との別れでありますから、まう一遍だけ、そのせんちめんたるを使はしていたゞきます。

山一つ越して信州へはいるともう雪の樣子が違つてしまひます。三河でも段々平野の方へ出ると雪景色も明るくなりますが、山の方に這入ると憂鬱なものがあります。人の顏附きも同樣でござ

います。かういふ雪の山村を二人で寂しく歩いて居りまして、その殘雪の樣子にひどく胸打たれた經驗がございます。

かうした殘雪を描かれたのがこの早川さんの繪です。家の横手にある澤の樣子に非常に特色があると思ひます。信州・遠州・飛州などの小澤にはかうした感じはございません。早川さんの繪にも個性が、はつきり握んだ土地の個性が出て來たのだと思ひます。私が、かうしたはだれの時に三河を歩いたのも、又三河の花祭りを知つたのも、皆早川さんの手引きでございました。その御蔭で漸く考へに一寸見當が立つやうになりました。近いうちに三河の陰鬱な舞の本が早川さんによつて出ますが、さうしたものを味はふ豫備の知識を作るためにも、此繪は大切なものとなると思ひます。三河を歩いたのは早川さんが第一で、怪しまれる程歩き廻つて居られます。その次には私が歩いて居ります。歩いて來た氣持ちの中では殘雪の氣持ちが、餘程あくがれになつてゐると思ひます。

「民族」の集りが、今度「民俗學」に變ると共にかうしたせんちめんとに屬する表現法を止めたいと思ひます。「民族」の最後としてこんな話をさせていたゞきました。

山の霜月舞

——花祭り解說——

昭和五年三月「民俗藝術」第三卷第三號

まだあの時のひそかな感動は、消されないでゐます。小正月を控へた殘雪の山の急斜面、青い麥の葉生えをそよがしてゐた微風、目ざす夜祭りの村への距離を遠く感じさせる笛の響き、其後幾度とも知れぬほど、私どもの花祭りに、あひに出かける心の底には、此記憶がひろがつて居るのです。五年ほど此方、初春にさへなると、三・信・遠、三州の境山へ、ものにおびかれた樣になつた訣は、この「花祭り」の作者早川さんが、最よく呑み込んでゐられるはずです。今では、廣い東京にも大分、花ぐるひなどゝ砧村の先生に冷笑せられることに、却て滿足を感じる人々が殖えて來ました。此は皆、早川さんのきめの濃やかな噂話に魅いられたのです。

昔も、洛中に田樂流行して、狐の業と騷がれた記錄があります。花祭りにもさうしたつき物の力が、籠つてゐる樣な氣がしてなりません。

其最初の聞き出し手であり、今尙、語ること益幽に這入つて來たのは、早川孝太郎さんでありま

す。さうして、其手初めに誘惑せられたのが、實は私でした。花祭りを思ふ毎に、此大和繪かきの懷しい話しぶりを憶ひ浮べずには居られません。私などの花祭りに關する乏しい知識は、隅から隅まで、此人の東道によつて、とりこんだものと言はねばならぬ。其ほどおかげを蒙る事が深い次第を皆様に告げておきたいのです。

花祭りに、「ねぎばな」と「法印ばな」とがあり、其が、設樂の奥山家に、昭和の代にも繰り返されてゐる。さうして、時には、「役花」の願主の招きに應じて、平野近くまでも出て來る。その行儀のうちに、鬼のへんべなるものをふむといふ事があつた。さう言ふ不思議な記憶が、長篠の山口で育つた幼時の印象として殘つてゐる、と初中終、早川さんから聞かされてたものです。

その頃既に、早川さんは地狂言を研究せられてゐました。さうして私も、藝能史の組織を思うて居た頃でした。其より又四五年前、私もまだ若く、感傷に溺れ易くてゐた頃、信州の南隅、下伊那の旦開村の通りすがりに、新野の伊豆權現の正月、雪祭りの田樂の話を聞いて、又來る時のありさうな氣がしてゐました。新野から東三河の東北隅、佐太に越える坂部といふ字では、雪祭りの面一つ、遠州から盗まれて來る途中、辨當をしたゝめた大夫に忘れ殘された爲、新野祭りの晩には、荒びてならぬといふやうな事も、上の空に聞いて通つた事がありました。

此雪祭り見物の宿願と、その後、早川さんに唆られた花祭り採訪の欲とが、道順によい日どりも續いてゐる事を知つて、もう壓へることが出來なくなつたのでした。大正十二年の正月、前後五

日に亙つて、雪祭りの作法と、村人の感情とを凝視しました。本祭りの前日は、一日だけ目だつ行事もなかつた。その日ちようど、三河領豐根村三澤の花が、山坂一つ越えるばかりの牧ノ島といふ字にある、と聞き出して、村の好學者仲藤增藏さんをたよりに、はじめて、新野峠を越えました。設樂の山村の、寒く霞んだ夕を、靜かに見おろした其夜を徹して、翌日晝まで見續けたのが、私にとつて、初めての花祭りの行事でありました。此時のが、早川さんの區畫に從ふと、振草川系統・大入川系統とある、其後者の現在での代表と見なしてよい、三澤山内のものでありました。

其頃の三澤の花には、顏の整うた、舞ひぶり優な若い衆が揃うて居ました。三つ舞ひ・湯ばやしなど、若衆の役になつてゐるものは、旅人の私どもにも訣り易く、味ひよかつた、と記憶します。繪卷物に見る下人の直垂から法被に、さうして、近代のはつぴ・絆天の出て來る道筋の明らかに見える上衣に、山袴をつけた姿は、新しい時代の上に、古い姿の幻を、濃く浮べてゐました。舞ひ處に焚く榾のいぶりに、眼を勞し乍ら、翁の語りや、あるかなしの瞳を垂れて歩く巫女上萬や、幾らとも知れぬ鬼の出現に、驚きつゞけて居りました。これが、ある時代、神遊びの一つとして、廣く行はれた時代を思ひ浮べようとする努力感が、心を衝き動かさずには居ませんでした。けれども、一つ〳〵が、今におき、問題として竝んでゐるばかりです。

其ほど複雜な、渦卷き返す夢の樣な錯亂と、在所々々で特殊化の甚しくなつた神事藝能とが、其後も常に同行と憑んだ早川さんの手で、此一冊に鮮やかに組織せられたのを見ますと、嫉ましくさへ感じます。

でも、早川さんは、當然酬いられたのです。その後、唯一人の旅人として、村から村へ、木馬（キンマ）の道や、棧道（カケハシ）を蹈み越え、禰宜（ネギ）からみようど、宿老（トネ）・老女（トジ）の居る屋敷と言へば、新百姓の一軒家までも尋ね入つて、重い鈍い口から、答へをむしりとる樣な情熱が、組織を生んだのです。もつとえらい事は、祕し隱しにせられた紙魚のすみかになつた傳法書や記錄を、ひき出して來られた事であります。

其結果は、我々の知る限りの神樂以外に、ある時代・ある地方から宣布せられた、一種の神樂があつて、其方式や、目的の點に於て、從來學者の定說變改を促す含蓄のあるものゝ存して居た事が、見出されたのであります。

數十百度、此土地の方言どほり、らんごくな山の家に寢返りし、自身は、稗の飯・切りこみ汁に腹の損ふ事に甘んじて、都會の優雅な人士に、栃餅や、茸の胡桃あへなどの珍味を齎して還つて來られた、とでも言ふべきでありませう。

而も早川さんは、最よい指導者と、美しい心の擁護者とを持つてゐられました。前者は、私ども

共同の學問の父たる、日本民間傳承學の祖たる柳田先生であり、後者は、志篤い、學問の本宮へ詣る間もない忙しさから、人をして代參の禮を致さしめようとする澁澤敬三さんであります。

柳田先生から受けた方法を守る爲に、採訪記の範圍を出ようとせられなかつた。此事は、今の學問のにさい衆、豈夫、能くせむや、と言ひたい。而も、其記錄は、結論を言ふと等しいまでに、賢明な配列法をとられてゐます。柳田先生の方法上の一つの理想は、玆に完全な姿を顯したのであります。

澁澤さんは、早川さんの學問を遂げさせる爲に、又其記錄を公にさせる爲に、述べ難いまでの奇特心を發起せられました。さうして、其間に、自身亦、花狂ひの一人と呼ばれるまでの情熱を持つ樣になられたのは、世間に名を揭げる金持ち趣味や、檀那（パトロン）かたぎの道樂を超越した、晴れやかな志を示してゐます。

早川さんは、師匠に、擁護者に、得難い人を竝べ得ました。だが、今一つ、なくては寂しい學友の、一人として學問の感觸を溫めてあげる者がない事であります。此は、日本の民俗學が、まだ新らしく、おれが〳〵の學者に充ちてゐるからだ、と思ひます。私なども、友人でありながら、早川さんの爲のよい友人としての誇りは持てない不心切な心で居ます。此後もつと、採訪と實感と論證とに、互ひの勵みをつけて行きたい、といふ氣になつてゐます。其は、此「花祭」に對する感謝からばかりではありません。此研究の、形をとり出した始めから、早川さんの後について

來た久しい歩みの跡をふりかへる事が、りくつゞくめの、中年の同門の盟友としての感情に、止つてゐられなくしたのです。さう言ふ唆られる様な情愛を以て、此本の解説であり、一異見とも
なる様な文章を書きました。
私の此文章が、必しも花祭り及び山の神樂(カグラ)の本義を説き得て居ないかも知れません。私自身すら
處々、既に轉換を欲する固定した考への型に這入つたのもあります。あやふやな點の著しくなつ
て感じる部分も、可なり悟つてゐます。併し、其も、今日から後(サキ)の私の爲にも、早川さんや私よ
り後の研究者の爲にも、みじめな足場位には、役立つだらうと思ひまして、目を瞑つて、大方の
前に暴す事としました。

山の神人團體

一　問題の土地

花祭りを行ふ村々は、早川さんの、細密な報告が既に明らかにして居る様に、此設樂だけでも二
十个所ばかりあります。其外、境を接した、南信州の一部・北遠州天龍沿ひの山間にも、一二个
所はあります。此を行ふ村は、それ〴〵範圍がきまつて居るので、どこからどこまでは、どの字(アザ)

が出て來て舞ふとか、舞ひをしに出て來る字もきまつて居ます。つまり、一種の太夫村とも言ふ
べきものがある訣なのですが、どうしてそんなものがあるかは、何故、こんな行事が三河の山間
にだけ殘つたかを考へて行けば、自然訣ると思ひます。
こゝ、三河の北東は、まことに興味の多い土地です。南、北設樂郡を中心に、信・遠の國境一帶
の山間には、雪に花祭りがあるばかりではありません。色々な民俗藝術――主に私の謂ふ藝能に
屬するもの――が殘つて居ます。何故こんな土地に、そんな藝能が殘つたかは、我々の仲間で、
一つの問題でした。嘗ては、設樂と言ふ地名から、設樂舞(シタラマ)ひを聯想した人もあつた様です。志多
羅神を持つて歩く人――つまり、神を送る人達が、亂舞する、それを設樂舞ひと言うたのですが、
何にしても、此は平安朝のものなのですから、あまりに時代が遠すぎる様です。私は、設樂とい
ふ地名には貪著なく、此花祭りの這入つて來た時期を漠然と考へて見ます。

二　庸兵の村――遊行神人の定住

私の考へは、二通りあるのですが、此考へは、當然一致すべきだと思ひます。一つは、三河の山
奥に庸兵の村――其は同時に神人團體であつた――があつて、こゝから多くの人が出かけて行つ
て、諸方の武家に力を貸した、其殘りが花祭りの村々であると、かう考へるのです。勿論、今あ
る花の村が、皆昔からの村々だとは言へないでせうが、大體、さうした昔からのものが、主にな

つて居るとだけは見られます。どうしてそんな村が出來たか。三河の北東の山間は、前に、三河・尾張・美濃、三ヶ國の平野を受けて、一種の神事に與る人達の住むのに適した地勢だつたからです。彼等は、同時に庸兵ともなりました。此等の人達は、それほど大昔から居つたとも思はれません。或時代に、諸國を廻り歩いて居たものが、地勢の關係から、こゝに屯する樣になり、其が分派し、又後に來た者も、同じ樣に定住をして、村が出來たのだと思ひます。

日本には、國家意識のまだ確定しないほどの大昔から續いて、一つの神人團體が流浪して居ました。一種の宗教的呪力を持つて諸國を遊行し、其力で村々を幸福にもし、押へもした、後の山伏團體で、彼等は、時代々々の色合ひを受け、當代の宗教に近づいて行つた爲に、多少の變化は見せて居ますが、本來の精神は、殆變らないで、かなりの後までも、藝能と呪力とを持つて、旅を續けて居たのです。

此形式が、はつきりとは言へないが、鎌倉時代以後、或種の武家によつて眞似られてゐます。つまり、武家の亡びたものや、庶流の者などが、部下を引きつれ、土地を求めて旅に出たのが、直に昔からの遊行神人を眞似して、村々をおびやかしたのです。らつぱ・すつぱ・すり・がんどうの樣なものが、其から出て居ます。

斯樣に武家は、誰でも旅に出ると、さう都合よく、直に神人の眞似が出來たと言ふのには、理由があります。昔の武家は、皆一種の、或地方共通の宗教を持つて居たので、自然、神事の中心と

なるべき儀式も心得、其に附隨した藝能も出來た訣です。彼等は、村々國々から歡迎を受ける爲には、先、村・國を祝福する藝能を行うて、人心をひきつけた樣です。

併し、彼等の爲事は、それだけではなかつた。傭兵となつて、戰爭にも參加しました。昔は、戰爭も一種の神事だつたからです。法力の戰爭から、實戰にまで與る樣になつたのです。

此らの人達は、大抵、地方の武家・豪族の家に寄食の形で止り、其まゝ居著いてしまふ者もあり、用事がすむか、不都合があれば、また新しい土地を求めて旅へ出るのもあり、時には、保護を受けた主家を倒して其土地を奪つたなどゝ言ふのもありました。鎌倉以後、戰國時代までには、さうして地位を得たものが少くありません。

譬へば、後北條早雲なども、此樣式で旅行をした樣です。彼の動き出した初めは、宇治の奥、田原から起つて、山城・伊賀・伊勢・近江の一部に跨つて居ます。嫡流は伊勢の關にあつて、其岐れが宇治附近に居たのでせう。其で伊勢新九郎などゝ稱したのだと思ひますが、彼が最初に連れて出た部下は、極僅かで、何れも宇治附近の地名を名告つて居ます。彼が藝能を持つて居たかどうかは訣りませんが、兵力は持つて居ました。それで、最初今川氏に憑り、後追々と東方の勢力を自家のものにして、遂に小田原まで出て行つたのです。少數の團體を組んで歩いて、どうしてそんな勢力が得られたかを、歴史家は疑問にして居ますが、これは、昔から旅行を續けて新しい土地を開いて行く、遊行神人の形式を眞似た武士團體には、常にあつた樣式です。元々、彼等に

は傳つて居るものがあつたから出來たのです。

三　山のことほぎ——山人・山姥

かうして漂泊を續ける形の神人も昔からあつたのですが、其よりも、神人としては、常には奥山家にあつて、時折り里に下りて來るのが古い形なのです。山の神に仕へる神人で、此を山人（ヤマビト）と言ひます。

山人と言ふと、後には、鬼・天狗を想像し、又、山男・山をぢなどゝも言うて、蠻人を考へる樣にもなりましたが、決して、さうした妖怪でも、先住民族のあとでもありません。鬼と考へられた道筋は、後の說明で、追々に訣つて行くだらうと思ひます。

山人が山の妖怪らしく考へられたと同じ樣に、山姥も山の女怪と信じられる樣になりましたが、此は、山の神に仕へる巫女で、うばは、神を抱き守りする職分から出た名で、小母に通じるものです。これが後には、神の妻ともなるのです。

設樂の山間に屯した一團は、此古い形を守つたのだと言へます。併し、だから彼等は、餘程古くから居つたらうなどゝは申されません。彼等は都合で、平野にも奥山家にも出入りをしたので、諸國を巡り歩いて居る中に、一つの中心地として、此、美濃・尾張・三河の平野を控へた、設樂の山間に屯する樣になつたと見るのがよい樣です。其選ばれた理由の一つには、天龍の水を考へ

に置かねばなりません。

かうした山人と言ふのは、常には里との交渉を絶つて居ますが、歳暮・初春には、檀那の家や村をことほぎに下りて來ます。冬の祭りの、鎭魂を傳へた山舞ひを持つて降りて來るのですが、それが終れば、また行方知れずの樣に山へ歸つて行きます。里人に氣づかれない樣に、道を迂廻するのです。「隱れ里」の傳說は、其から起つて居ます。私は、田峯を訪れ、又遠州の山奥に田樂を見學に行つて、つくづく出入りの地形が似て居る事を感じました。うつかり海道を行つたのでは、容易に氣づかれない樣なところに村が展けて居るのです。山人としての祝言職を持つた人達の根據は、大抵、さうした隱れ里にあつた樣です。

四　冬祭りの古義——たまふり祭り

此山人が里へ下りて來る年の暮は、古くは霜月（シモツキ）でした。三河に殘つてゐる花祭りも、今は正月に行ふ所が多く、所によつては十二月にも行ひますが、元はやはり霜月の行事でした。

霜月の極限がしはつで、しはつとは極限と言ふ事であつたらしい。其をしはすとも發音したので、古代には、師走といふ月があつた訣ではない樣です。

此冬祭りの日に、彼等は里へ降つて、鎭魂（タマフリ）をしました。山姥が、山姥の舞を舞ひ、山人が、山の神に扮して舞うたのです。其場（ニハ）がいちと言はれました。「市」の古義です。

此たまふりに來た山人のみやげが山づとで、此を里のものと交換して行つたのです。山姥が市日に來て大食をした話や、小袋に限りなく物を容れて歸つた傳說は、其から起つたと思ひます。古代に市といはれた處が、大抵山近くである理由も考へられませう。そこで物々交換が行はれたのです。

冬祭りに就いての私の考へは、他の場合に述べて居ます。ふゆは魂(タマ)ふゆの意から出て居るとするのが、私の考へでもあります。ずつと古代には、春祭りと刈り上げ祭りとは、前夜から翌朝までの行儀でした。其中間に、今一つあつたのが冬祭りです。ふゆまつりは鎭魂式です。家屋・家長らへの祓ひをした後に、よい呪詞を以て祝福する。此呪詞が、冬を轉じて若春にするのです。春になれば、其一年間の村の行事の祝福と豫行とをして、精靈達のみせしめにします。

此祓ひのすんだしるしに、山人の持つて來た山づとを家の內外に飾り、身にもつけます。淨められた村人は、神の物となつた家內に、忌み籠るのです。此が正月飾りの起りで、山かづら・羊齒の葉・寄生(ホヨ)・野老(トコロ)・山藍・葵・榧(カヤ)・山桑(ツミ)など、何れも山づとと見られるものです。

五　山人の杖——むつきの起り

此山人が持つて來るものゝ中で、最考へねばならぬものは、山人がついて來る杖であります。大きければほこですが、此杖を山人が里へ殘して行きます。此で地面を搗くと、土地の精靈を押へ

る事になるのです。むつき・うづきは、そんな事に關係のある語ではないかと、私は考へてゐます。

むつはむちうつと同義語です。むつ・うつ・むち・うち、すべて同じ意を持つた語です。むつきに就いては色々な說明がされてゐますが、月を聯想するから訣らない事になるので、きさらぎ・やよひなどにはつきがついて居ません。此なども意味の訣らない語だと思ひますが、結局、月のつかない、意味の訣らない語の方が古いので、むつきなども、さうした語だつたのが、つきとあるので、月の運行を聯想する樣になつて、月名となつたのではないでせうか。元は、きさらぎ・やよひ・しはすなどゝ同じ樣につきはつかなかつたのだと思ひます。其つく樣になつた初めは、恐らくむつきなどが最初ではなかつたかと考へられます。

六　地を打つ行事——卯杖・卯槌

正月に關係のあるもので、卯杖・卯槌など言ふものがありますが、此は、元は地面を叩く道具だつたと思ひます。此行事は、今は小正月にも行ひますが、正確には、霜月玄猪の日に行つたもので、土地の精靈を押へて廻る儀式だつたのです。後には、精靈は地中に潛むと考へた事から、土龍(ツチ)などを想像する樣になりましたが、此を打つ木がうつぎでした。中がうつろだからうつぎ（空木）と言うたとも言はれますが、昔のうつぎがあれであつたかどうかは訣りません。とにかくう

つぎと言ふ木はあつたのです。其が變化して、うづち・うづゑになつたのだと思ひます。此、地を打つ行事は、歳暮・初春とは限らなかつた。五月田植ゑの前にも、田畑を押へる必要がありました。初春に行つた事を、更に效果がある様に、まう一度くり返すのです。四月のうづきも、やはりむつきと同じ意味だと思ひます。言海などの説明は、もう改めなければならぬのだと思ひます。

七　はなうら——削りかけ・削り花

山人の持つて來る杖には、大體さうした意味があるのですが、尙、其さきの割れ方・裂けた狀で、來年の豐凶を占ふと言ふ意もあります。其をはなと言うたので、はなと言へば、後には木や草の花だけに觀念が固定してしまひましたが、ついで起るべき事を、豫め假りに示すのがはなです。で、此杖は、根のあるまゝのものを持つて來て地面に突き插して行く事もあります。根が生えて繁ることを待つたのです。根のないものでも、桑などは根が著き易い木です。祝詞にも、「生し八桑枝の如く」などゝあります。一夜竹・一夜松の傳説は、此から起つて居ます。

とにかく、此杖の信仰は、我が國の後々の信仰生活にかなり大きな影響を與へて居ます。形狀も段々に變つて來たので、ほんとうの杖である事もあり、ほこである事もあり、或は御竈木にもなり、又、先の割れたのを主とした、削りかけ・削りばなの様なものにもなつたので、其極端に短

くなつたのが、削りかけの鷽です。鷽換へは天滿宮の行事になつてゐますが、天神様に關係がある訣ではないでせう。地方で、天神様に祀つたので、其から關係がついたのだと思ひます。

八　信・遠・三山間の風習——鬼木・にふ木

此杖の一種が、今でも、信・遠・三の奥山家には殘つて居ます。年の暮・小正月の前夜に、家の入口・納屋の入口などに薪を立てるので、此をおにぎともにふぎとも言うてゐます。今では人が立てに行くのですが、其に祝福の意味がある事だけは忘れないでゐます。

おにぎは鬼木でせう。こゝの鬼は、尙後で述べます様に、決して惡鬼羅刹ではありません。たゞ巨人といふだけの古い意義を止めてゐます。此鬼木にも、山から來る不思議な巨人が持つて來ると考へた印象のある事は十分感じられます。

にふぎは、もし、此が、丹生（壬生）から出た語だとしたら、其は非常に古い語なので、どうして此が結びついたか、不思議だと思ひますが、にふはみそぎに關係のある語で、禊ぎをしたしるしの木といふ事になります。あまりに古い語で疑問ですが、どうも、それ以外には意味がない様です。

とにかく、年の暮になると、山から不思議なものが來て棒を殘して行くと信じた古代の信仰が、そんな形で殘つて居るのです。

斯様に、常には奥山家に隠れてゐて、時あつて里を訪れる神人が、古くから我が國にあつたので、殆ど其が空想化されてしまつて、山人を妖怪と考へるほどの後になつても、尙それを學んで、年毎に山を下りて來る人があつたのです。此が三河の山奥に花祭り行事の殘つた一つの原因だと考へるのです。だが、此様なものは、必しも設樂の山の中にだけあつた訣ではないでせう。恐らく外にもまだあつたらうと考へられますが、其が、特に設樂にだけ殘つたのは、彼等が戰國時代に力を借した檀那の家々が榮えて、其保護を受ける事が出來た爲だと考へて見る事が出來ます。併し、現在の花祭りが殘つた原因は、單に、其だけではない様です。他に、まう一つ原因があると考へられるので、それは割り合ひに新しいところにあると思ひます。

近世に於ける移動

一　伊勢神樂の影響

私は、最初花祭りを見ました時には、以上述べて來た様な事を心に浮かべて、單にそれだけの興味と、一種の尊ぶ様な氣持ちとで此行儀を見て居たのですが、尙よく考へて見ますと、其うちには、割り合ひに近世らしい移動のあとが見られます。どうも此には、伊勢皇太神宮の信仰を持つ

て歩いた人の運動が這入つて居る様です。

此信仰を持つて歩いた人は相應たくさんありました。其藝能は神樂でした。神樂藝能には、最後に獅子が出て解決をするので、段々此が中心になり、今では、神樂と言へば獅子面を想像する様にさへなりましたが、恐らく此にも幾度か變化があつたのだと思ひます。

私どもが知つて居る一番新しいものは、代神樂です。此は色々に聯想が重つた爲に、今では殆、訣のわからないものになつて居ますが、代神樂と言うたのには、代參の意味と、寺方で謂ふ永代の意味とがあつたのだと思ひます。つまり一種のきよめはらひに村々を廻つたので、皆が伊勢へ行つて淨めて來なければならぬのを、彼等が廻つて來て、代りにみそぎをしたのです。禊（ミソ）ぎと祓（ハラ）ひとには區別があるので、禊ぎには水の關係がある訣ですが、早くに此區別は忘れられてゐます。とにかく、彼等が廻つて來て、伊勢へ參る代りに、其土地でみそぎをして行く。其土地でもやり、また伊勢へ歸つてもやつたのです。其しるしに、衣服・髮、其他色々なものを持つて歸る。此が彼等の收入にもなつたのです。だから、代神樂は社にあるのは間違ひです。さうして、此功德は永代に及ぶと考へたらしい。代々神樂は、永代神樂と言ふ事らしいと思ひます。

伊勢に限らず、熊野神明の信仰を持つて歩いたものなどもさうですが、時代によつて色々な形で傳つてゐます。室町から江戸へかけて評判になつたものでは、伊勢踊りがあり、それが新しくな

伊勢踊りと神樂と同じものであるかどうかは疑問ですが、伊勢の神樂は、今の代神樂だけでなく、もつと古い形式のものが幾つかあつたに違ひありません。一昨年、三越呉服店で催された「伊勢詣での會」の出品中、神樂の書止めがあつて、其に、まどこおふすまの繪があつたと言ふ話を聞きました。私は遂にそれを見ないでしまひましたが、恐らく天蓋の樣な形をしたもので、其を垂らすとすつかり姿が隱れてしまふ事になるのだと思ひます。眞床襲衾（マドコオフスマ）が蒲團の樣なものであつたのは、極古代で、後にはそんな形になつたのです。此が伊勢の神樂に這入つたのが何時であつたかは、一寸想像もつきません。又、後の神樂にもそんなものはない樣ですが、確に或時代には其があつたらしいのです。其を想像させるものが、設樂の山奥に傳つた神樂の中にあるのです。

二　設樂神樂の輸入者

早川さんの調査によつて訣つたのですが、こゝには元、三日三夜に亙る神樂があつたので、現在の花祭りは其一部分であると言はれてゐるのです。神樂に關しては、其後段々書止めなども出て來たので、其がいつ時代に這入つたかは訣らないが、とにかく、今民間に傳つて居るどの神樂よりも古いと言ふ事だけは言へ相なのです。併し、現在の花祭りが其一部分であると言ふのは問題で、果して神樂が最初から此を含んで居て三河へ這入つたのか、以前から此行事が山間にあつて其が神樂に結びついたのか、三日三夜に亙つた行事が一夜に短縮されたと言ふのは、其重要な部

分だけを行ふ樣になつたのか、此は、容易には解決の出來ない事ですが、私は、今のところ此二つを別種のものだと見て居るのです。

とにかく、我々の知つて居る、今の代神樂よりは幾代前かの神樂でせう。其を持つて此山間に這入つて行つた人があるのです。此地方でも、漠然と其人を想像して傳へて居るので、其をみるめ樣と言うてゐますが、みるめ樣はそんなに古い人ではないと傳へて居る村もあります。私も見て來ましたが、坂宇場（サカンバ）（振草村）の神樂屋敷の庭には、其みるめ樣の墓と言ふのがあります。又、曾川（三澤村字上黒川）には變つた傳說があつて、此を持つて來た人を二人だと言ひ、山伏の樣に言つてゐます。其屋敷跡といふのも見て來ました。此を二人と傳へるのは、神樂・花祭りを通じて、みるめの王子・きるめの王子といふのがありますので、其から二人と言ひ出したのだと思ひます。勿論こんな事は信じられません。或時代に有力な人があれば、死後の假想から、家も墓も出來る訣です。だが、此傳說で見ても、これの這入つて來たのが、そんなに大昔でないと言ふ事だけは想像出來ます。

結局これは、山人の職業を、其後幾度か人が變つて受け繼いでゐる中に、最後に伊勢の神樂が這入つて來た、さうして以前からあつた花祭りを習合する樣になつた、かう考へて見るのがよい樣です。其を、山人が習つて來たか、別に持つて這入つた者があつたか、其這入つて來たのがいつ頃であつたかと言ふ事は、もう訣らないと思ひますが、大體伊勢の神樂はそんなに古いものでは

ないのです。何故ならば、伊勢に起るべきものではないからで、八幡の神樂などに比べれば、かなり新しいと言へます。此の這入つて來た年代も、さう古い事ではないでせう。さうして、傳說に從へば、他から持つて這入つたものがある樣だとだけが考へられる訣です。

三　物の中に這入る儀式

此神樂で、先注意しなければならぬものは、伊勢の神樂の眞床襲衾にあたるものを、こゝでは白山と言うてゐる事です。此に這入つて生れ出る式があつたのです。

これも、後にそんな理窟がついたのかも知れませんが、ものが生れ出る時には、すべて裝飾を眞白にしなければ、生れ出ないと考へたのです。我々の辿れる限りでは、產室は眞白でした。八朔には女が白無垢を著ました。此風習は、後には遊女だけに殘つたのですが、此は神事に與る女は皆行つた樣です。つまり成女戒前の物忌みのしるしで、女となつて生れ出る式ですから、產室を白くした樣に、白無垢にくるまつたのです。

白山と言ふと、すぐに越の白山が思ひ出されます。あの山をなぜ白山と言うたかは訣りません。雪が積つてゐるからかも知れません。しらあいぬかも知れません。語原を同時に、三つも四つも考へるか、一つの語原で說明するかは、此からの學問の岐れ目だと思ひます。とにかく、此山を白山と言うたのには、何か由來があつたと思はれますが、一つの聯想は、此山に菊理媛を祀つた

（一宮記）とある事です。此神は、黃泉比良坂に顯れた神で、伊弉諾神が禊ぎをする前に現れてゐます。其から考へて行くと、菊理は泳で、禊ぎをすゝめた神らしく思はれるのです。白山に祀つた神が、果して菊理媛であるかどうかは訣りませんが、併し、此神が白山の神になつたのは、生れ變ると關係のある、白山の聯想からではなかつたでせうか。

山伏の生活の中に、いしこづめと言ふ事があります。こづむはたゞのつむではありません。海岸などに、波でうづ高くなつてゐるのを木積と言うたので、石こづめは、石の中へこづみ込むのです。此が後には春日の十三鐘の樣な傳說を生む樣になつたのですが、此は、山伏生活の中にそんな式があつたのだと思ひます。其も單純に、山伏の私刑であつたなどゝ考へてはなりません。魂を身に著ける、復活の儀式として行はれたのが最初の樣です。

爰で聯想されるのが、謠曲の「谷行」です。此をたにかうと讀んだのには意味があると思ひますが、其に就いて申す事は今は控へませう。たゞ、此は山伏の死んだものを谷に棄てる事だと考へるのは、却つて謠曲から出てゐる考へで、其よりも、松若が後に復活をしてゐる事に注意すべきだと言ふことだけを申して置きます。要するに、眞床襲衾に於けると同じ樣に、ものゝ中に這入つて、完全に魂の身にくつつく時期を待つたのですが、石の中には這入れぬので、石を積んで其中に這入つたのだと思ひます。

四　うまれきよまりの意味

つひ先頃、穂積忠さんから聞いて非常に興味を覺えたのですが、伊豆の海岸には、まだ盆がまの風習が殘つてゐる相です。盆がまと言ふのは、成女戒を受ける前の女兒が物忌み生活をした遺風で、まゝごとの起源でもあるのですが、こゝでは、大小二つの竈（カマド）を作つて、小さい方を家の外へ出して置くのださうです。此に似た風習は、男の子にもあります。東北では、かまくらと言うて、小正月に雪の洞窟を作つて幸の神のお祭りをします。

かまと言ふ語はどこまで遡れるか、かまどは釜をかけるからと言ひますが、其では訣らないと思ひます。洞窟の事を、かま・がまと言ひます。がまは多く水邊の洞窟を言ふ樣ですが、其には限らないと思ひます。これにもやはり、洞窟の中に密閉して置いて、或時期が來ると出すといふ風習があつたのではないでせうか。盆がまなども、一緒に飯を食べるといふことゝ、一緒に籠るといふことゝ、二つの意義がある樣です。穂積さんの話の、竈（コモ）を二つ作ると言ふのは、大きい方が籠るかまで、小さい方が飯を炊く竈ではないかと見當を立てゝゐます。かまどのかまと洞穴のかまとは、元は同じだつたかも知れません。併し、かまど・くど・ほど、皆少しづゝ違ふ樣です。とにかく、かまから出ると復活の形になるので、洞穴に這入るのも、山を作つて這入るのも、同じ事だつたのだと思ひます。

此山が、後には道成寺の鐘にまで變つて來たのですが、かう考へると、設樂神樂のしら山の事がかなりはつきりしてくる樣です。眞床襲衾が天幕の樣になつた訣で、神樂の方では、これに這入る中心行事を、うまれきよまりと言うてゐます。きよまりはきよまはりで、物忌みをして淨める事だつたのですが、白山の聯想から生れ出る事を考へて、うまれとつける樣になつたのではないでせうか。此行事は、六七十年前に全く跡を絶つてしまつたのですが、要するに、設樂神樂の中心行事はうまれきよまり、卽、はらひをすることであつたと思ひます。さうすると行事の意味がよく訣るので、つまり後の代神樂と同じ事になるのです。

花祭り行事の主なる問題

一　花祭りを行ふ人々——禰宜・山伏・行者

話は愈花祭りに這入りますが、現在行はれて居るものを見ますと、純粹に花祭りだけを行うて居る所、田樂を兼ねてゐる所、まう少し不純な藝能を兼ねてゐる所などがあります。

花祭りを行ふ主なる人を「花禰宜（ネギ）」と言うてゐます。禰宜は神主の事ですが、別に、もと山伏であつた者が行うてゐる村もあります。山伏であつて、同時に京の土御門家に納金をして陰陽師に

なつた者がやつて居るのです。花祭りをやるのには、其だけの資格が必要だつたのです。

山伏の方は、「花山伏」とは言ひませんが、此が中心になつて居るのを、「山伏花」「法印花」と言ひ、禰宜の中心になつてゐるのを「禰宜花」と呼んでゐます。勿論正確な區別ではありません。漠然と昔からの傳へが殘つてゐるだけで、昔でも、土御門家からの扱ひは同じでした。

處がこゝに、一つ違つたと思はれるものがあります。京花園の妙心寺派に屬する、一種の奴隷宗教家――念佛聖（ヒジリ）の様な者で、禪宗の方で行者（アンジヤ）と言ふもの――のやつて居たのがあるらしいのです。まだよくは訣らないのですが、黑倉（クロムラ）といふところは、田樂をやるものだけが住んでゐるので、田樂が主になつてゐますが、花祭りもやるのです。此村の様子を見ますと、どうも妙心寺に屬する行者らしいところがあるので、妙心寺と土御門家との、兩方に關係してゐたのかも知れません。

此事は、一度妙心寺に行つて調べて來たいと思つてゐます。要するに、禰宜・山伏に限らず、宗教家の資格を持つてゐたものであれば、どんなものでも、破格な藝でもやつて行けたのでせう。此を行ふ人達は、村の中の小名ともいふべき部落に居つて、他はすべて其をうける形です。どこでも、かうした藝能を持つた部落は、大抵村のはづれなどにあり、他から特別な扱ひを受けた事から、地方によつては、特殊部落だと思はれる様になつたものなどもありますが、幸ひこゝでは、さうした事がなく、全く關係のない他の村からも賴まれて出かけて行く様な事が頻りにあつたらしく、平坦部近くのものは、殊に其が多かつた様です。譬へば田樂を兼ねてゐる、古戸（フツト）・小林な

どの花は、南、北設樂のあちこちに賴まれて出かけた様でした。

二　行ふ場所――社と民家と

第一に申さねばならぬ事は、以前は此が霜月に行はれた事です。昔は、霜月が月の終りで、其極限がしはすであると申して置きましたが、斯様に十一月・十二月の區別のなかつた頃の習慣は、曆が出來て師走といふ月が出來れば、當然師走に行うてよささうな行事を、やはり霜月に行つて不都合を感じなかつたのです。時代が經つと段々實感がなくなるからです。さうして其が翌年の祝福になつたのです。明治になつて偶然正月に行ふ様になりましたが、此は、偶然ながら當を得た事になつたのです。

此行事を行ふ場所は、村によつて違ひます。社の境内でやる處と、毎年場所をかへて、家々で行ふ處とがあります。此は家々で行ふ方が古いと思ひますが、一概には申されません。可なり古い形式と思はれるものが社で行はれてゐるのもあります。

斷定的な事を言ふのは暫く控へたいと思ひますが、社で行ふのは、恒例通り社で行ふといふ考へが生じてからだと思ひます。神樂でも社でやつたとは限りません。神事だから社ですると言ふのは、常識的な考へです。とにかく、此を行ふ場所は二様あるので、其は、禰宜花と法印花とで違ふのでもない様です。

家で行ふ時には、今では戸をはづす位のものですが、昔は、壁もしたみ板も全部とり拂つて、吹きさらしにしたのでした。此家を舞ひ屋といひ、入口の土間を、舞ひ處（舞戸・舞土とも）と言うて、舞を舞ふところにあて、其中央に釜を据ゑるので、釜の据ゑ方には、やかましい方式が言はれて居ますが、此は陰陽道の方で勝手に考へ出した事です。釜の上に湯ぶた――つまり天蓋です――を下げ、其から四方に紙で作つた綱を渡すので、其うちの一筋を神道といひ、此はかん座前の梵天に通じて居るのです。

家の設け方に就いては申しますまい。上り框を上ると、そこがおへで、其奥が奥座敷で、鬼部屋になるのですが、納屋になる事もあり、舞ひ役者が支度をする處です。おへは、かん座と言うて囃子の座になります。かん座は、三河の方言では解釋出來ない様です。上座でも神座でもない様です。そんなに古い語だとは思はれませんから、或は神樂などの持つて來たものかも知れません。

今は、笛・太鼓の樂人と、村の主なる人が坐りますが、昔は檀那衆が控へた處でせう。

舞ひ處で行ふ事は、其威力が村全體に及ばねばなりません。此が花祭りの精神で、同時に日本固有の藝能の精神を傳へて居るのです。三番叟などもところ繁昌の爲に踏んでゐるので、村全體を廻る事は不可能ですから、其中心になつて居る處で行ふのです。だから、其威力が村全體、國全體に及ぶ様に、壁もしたみも取り除いて、吹きさらしにするのです。

三　中心行事――反閇・花の行事・物語り

花祭りの中心になつてゐるものは色々あります。神樂と習合した事から、一層複雜になつたのだと思はれますが、現在行はれてゐるものを見てゐますと、其最中心になつてゐるものは反閇（ヘンバイ）です。三河ではへんべと言うてゐますが、此は、昔から、陰陽道の方でやかましい方式で行つてゐるのですが、反閇の本道の精神は、陰陽道でやるものではなく、その家の主人がやるべきものだつたのです。卽、居所を離れる時に行ふ式で、天子から貴族・將軍・大名にまで及んでゐますが、いづれも其主人が行ふのがほんたうでした。後になると、主人がお出ましになる時、家來が掛け聲をかけ、力足を蹈みます。尊い人がお通りになるのだから悪いものに逃げよと豫告をするのです。其力足の方が陰陽道にとり入れられたので、かけ聲の方は警蹕になりました。

一つの假說ですが、此警蹕の聲は、家々で皆違つた様です。さうして、それが尊い人の名前にもなつたのだと思ひます。日本紀に、「天壓神（アメノオシカミ）來る」とありますが、あ行とわ行とは、遠い様で、實はもつと關係が緻密だつたかとも考へてゐます。壓神のおしは、或はをしで、をしをしと言うて來られた神様だつたのではないかと思ひます。平安朝になると、天子の先拂ひはをしをしと言うてゐます。此假名の違ひに就いては、まう少し音韻の研究をしなければならぬと思ひますが、つまり、警蹕の聲で、誰が來るかゞ訣つたのでせう。さうして悪い精靈を追ひ拂つたのだと思ひま

す。反閇の蹈み方にも、色々種類があつたらうと思ひます。現在行はれてゐるものにも幾通りかありますが、此は陰陽師が勝手に方式を作つたと思はれるものが多いので、此から考へて見る事は出來ないと思ひます。

花祭りでは、此反閇を、主に鬼が蹈みます。此が一つの中心行事になつてゐるので、まう一つは、花の行事（花の唱文・花の言ひ立て・花の舞など言ふのがある、總括して假りにこんな語で言つて置く）であります。此二つが行事の中心になつて居て、其外につき添うてゐるものがあるのです。此を行ふ人の來歴を語る事で、同時に其は、行事の由來を說く事にもなるのです。先此三つが花祭りの主なるものと見られます。只今では、反閇だけが中心の様になつてゐますが、嘗ては物語りの盛んだつた時代もあつたと思はれます。

四　花の行事——花やすらひと花育てと

花祭りの花は、花の行事から出てゐると思ひます。はなと言ふのは、なりものゝ前兆を示す、一種のさきぶれの事です。木の草・草の花は其一部分で、成りものゝ前ぶれになるものは、すべてはなと言うていゝのです。だから、はなが出來る出來ないは、穀物の成熟不成熟を示す重大な前兆になるのです。同時に、此はなは、成年戒とも關係があるのですが、此方は殆忘れられてしまつて、今では、穀物だけの關係を考へてゐる様です。成年戒の方は、神樂の中心行事になつて居

た爲に、神樂が衰へると共に忘れられてしまつたのだと思ひます。

日本の古い信仰では、花に就いては、初めと終りとの二つを考へてゐました。育てる事、いゝ花を咲かす事、むだに散らさない事、此が非常に大切な事だつたのです。春の花が早く散れば田のみのりが悪い兆と見、人の身に譬喩して悪疫流行の前ぶれと考へたからで、なるべく花を散らすまいと願つたのです。此が鎭花祭の起りで、平安朝の初め頃から愈盛んになつたのですが、奈良朝には既にあつたのです。併し、平安朝にも奈良朝にもない神を祀つてゐるのですから、恐らく其以前からあつたのでせう。やすらひ花のやすらひは、花にぐづ〳〵しろの意で、散るのをまつて落ちつけといふ事なのです。

鎭花祭では、此點が頗重要なのですが、三河の花祭りは、此方面には、深く關係がない様です。此關係があれば、もつと田樂に結びついてゐなければならぬと思ひます。

三河の花祭りは、花育ての方が主になつてゐるので、同時に其は、花の占ひにもなるのです。此行事は、古い藝能では、延年舞の中にあります。露拂ひの出た後で、花の稚兒と稱するものが、花の枝をもつて出て舞ふのですが、三河でも、此行事は大抵子供がします。だから、花祭りは、延年舞と同じものだといふのではありません。併行して行はれてゐる中に、一方は發達をして止まり、一方はそのまゝ續いたゞけです。とにかく、花育ての行事は子供がするものになつてゐる様ですが、或はそれが若者であつたかも知れません。

日本では、赤んぼから子供になる――袴着は褌をつける式である――のと、子供から若者になる――元服――のと、成年戒と準成年戒と、二度も繰り返して行ふので、花の稚兒の舞ふのは、其形だと思ひます。さうすると、白山の行事とは二重になる訣ですが、そんな事は平氣でやつたでせう。

併し、田舍の人には、うつかりした事は言へないと思ひました。一昨年上黒川の花祭りを見學に行つた時、そこの神主に聞かれて、花祭りの花は、翌年の穀物の花を占ふので、花育てが中心であらうと話したところ、次に行きますと、「成程仰言つた通りらしい。調べて見たら、稚兒の持つ花の杖に、米の穂がついて居た」と言うて、早速そんなものを造つて持つて來られたのには驚きました。米の穂がついたのでは意味をなさない事になります。

かやうに、花の占ひが大事な事になつてゐるので、其には唱言（トナヘコト）があつたのです。其が後に分化して、花の唱言（或は莊嚴・唱文などゝも）といふものがたくさんあります。

五　鬼――山見鬼・榊鬼・朝鬼

花祭りの中心は、どうしても花育てにあつたと思ひますが、同時に、其が冬の祭りであつたので、山から山人が祝福に下りて來る印象がとり入れられてゐます。鬼の舞ひが其です。

山人が、鬼・天狗と考へられる様になつた事は前に述べて置きました。後には、鬼といふと暗い

方面だけが考へられる様になりましたが、花祭りの鬼には、祝福に來る明るい印象が十分見られます。

鬼が里を訪れる機會は幾度かあつたのです。歳暮・初春の外には、五月田植ゑの時にも現れます。此の發達したのが田樂の鬼で、田樂では、天狗もまた大切なものになつてゐます。殊に田樂では、「四匹の鬼」といふ名高い演藝種目がある位ですが、四匹の鬼には意味があると思ひます。花祭りにもやはり四匹の鬼が出ます。四つ鬼、或は朝鬼と言はれてゐますが、恐らく元は一匹であつたのが、二匹になり、四匹になり、後無條件に殖えて來たのだと思ひます。

一匹の鬼を、山見鬼と言ひます。語の意味はよく訣りませんが、土地では、山の姿を見て廻る、ほめて廻るものゝ様に思つて居る様です。

此山見鬼と問答をする役があります。鬼――神――と問答をするのには、人間の語では訣らないから、通辯役が必要なのです。手草（タグサ）を持つのは、即、神の詞を解する事の出來る、神人のしるしで、巫女が榊や笹を持つのにも、其意味があるのです。花祭りに、榊鬼といふのがあります。今は、此鬼が出て來ると、また人が出て來て、榊の枝で背を打ちます。それで榊鬼といふらしいのですが、恐らく元は、榊を持つて山見鬼と問答をした通辯役だつたのが、鬼の詞を解すといふので、此も鬼にされたのだと思ひます。勿論、此は私の假説ですが、鬼の二匹になつた道筋が凡そ訣ると思ひます。

花祭りでは、此二匹の鬼が大切なものになつてゐます。其中最大切なのが、山見鬼です。此鬼が、鎭魂に來たしるしに反閇を蹈む、其威力が村全體に及ぶと考へたのであります。

いづれ斯うした鬼には、眷族がお伴をして來ます。これが子鬼で、今は無數に殖えてゐますが、元は四匹だつたと思ひます。

朝鬼（四つ鬼）は、其引き上げの形を見せたものでせう。昔は、一番鷄が鳴けば朝だつたので、其時には、もう鬼が退出しなければならぬのですが、段々朝日を考へる樣になつて、朝の考へが二重になつた爲に、鬼の口に旭があたるまでには祭りを終らねばならぬなどゝやかましく言ふ樣になつたのです。つまり、鬼はあの世のものなのですから、夜が世界である、だから朝一番鷄が鳴けば引き上げねばならぬので、退出しないのはいけないと考へた事から、追ひ拂ふ樣になつたのです。此から鬼やらひの考へが出てゐるので、殊に出雲系統の神樂では、皆鬼が惡者になつてゐるのですが、花祭りの鬼には決してさうした處はありません。

六　禰宜と翁と——面の神祕

前に言うた物語りの話になるのですが、神主が出て物語りをします。其に、たゞの禰宜で出てくるのと、まう一度翁に變つて出て來るのと、二度あります。ひいなと稱する一種の御幣を擔いで出て來て、遠い旅行をして來た、自分の來歷を物語るのですが、此は神樂に關係があると思ひま

す。つまり神主が祓ひにやつて來るので、なかてばらひと言うてゐますが、中臣祓ひだと思ひます。

土地によつては、此を海道下りとも言うてゐます。日本の藝能に、海道下りといふ一種目が出來たのは鎌倉時代ですが、此形は、餘程古くからあつたので、遠くから來た神が、其道筋の出來事を語る辛苦物語りから出てゐるもので、此の最發達したのが宴曲の海道下りです。つまり都から地方に下つて來た道中を語る道行ぶりです。

ところが、此物語りを翁が出てまう一度やります。黑式の尉で、生ひ立ちから、母の述懷を述べて、自身の醜さを誇張して笑はせ、婿入りの失敗、京に上る道中の出來事などを語るのです。翁と禰宜とは、表裏になつてゐるので、一方は祓ひをし、一方は由來を語つたのだと思ひます。此翁・禰宜が分裂をして色んなものが出來てゐます。翁から媼が、禰宜から巫女が出てゐるのです。巫女を天照皇太神宮と呼んでゐる處がありますが、つまり、面から來る神聖感が、さうした神を想像させる樣になつたのだと思ひます。面は、どれでも、非常に神聖視してゐるので、此を被ると一種の神祕な心が起るらしいのです。それから何でも神樣になつて行つたらしいのです。

面で、特に注意しなければならぬものは、翁の面の顎が切れてゐる事です。新野で寫して來た書物には顎がない樣に書いてあつたが、顎の切れてゐるのはものを言ふしるしです。大體面を被る藝は、聲を出すべきでないので、翁の面だけが、顎が切れてゐるのです。

更に面で注意すべきは、巫女面・上萬面などは、殆、目の穴がないほど小さい事です。昔のものには、大きいのと小さいのと二つあつた様ですが、とにかく、日本の藝能には不思議に、盲人を主役にしたものが發達してゐます。猿樂にも田樂にも其がありますが、恐らく此は、面から起つたのだと、私は考へてゐます。

尙、花祭りの面で最大切なものになつてゐるのは、ひのう・みづのうと言はれる二つであります。此は最初から二つだつたのでなく、後に對照的に作つたのではないかとも思はれますが、其形が所によつて區々なのです。ひのうは男の様でもあり、赤い翁である所があり、天狗である所があり、みづのうが白尉である處もあり、うづめである所もあります。

どこでも此をしづめ様と言うてゐます。最後に神樂がすむと、此陰陽二つの面を被つて出て來て舞ひ納める。しづめは其から出てゐるらしいのです。恐らく此語は神樂の將來したものでせう。併し、此にみるめ・きるめの二人の王子の聯想が結びついて、實在の人物の様に考へてゐる所もあり、又、ひのうを猿田彦に、みづのうを鈿女に說明したがつてゐる所もありますが、元は一つだつたらうと思ひます。しづめと言ふ語は、割り合ひ新しい語だと思ひます。

七　もどき——翁は禰宜のもどき

翁・禰宜・巫女などが出ますと、其について大勢のもどきが出ます。花祭りではもどきが肝腎な

ものになつてゐるので、正式なのと、ふざけたのとありますが、翁には正式のもどきが出ます。翁の言うた事を擴大して言ふのがほんたうなのですが、今では、一緒に言うたり、本を持ち出して讀んだりしてゐます。もどきと言ふ語は、反對するが古いのかも知れませんが、中世の藝能では、相手方と言ふ事になるのですが、時には違つた語・違つた動作であらはす事もあります。その外、飜譯する・物まねするなどの意味があるので、翁の通譯と言ふ事になるのですが、時には違つた語・違つた動作であらはす事もあります。

私の考へでは、禰宜がもとで、翁が其もどきであると思つてゐます。三河には、まだ翁を猿樂とする考へが殘つてゐます。譬へば、鳳來寺の田樂を見ても、翁を猿樂と言うて、前にやつた事の物まねをするものになつてゐます。都の藝能が翁を本體にしたのは、翁を主體としてゐた猿樂役者が榮えたからであります。併し、日本の藝能は、或時代、複演に複演を重ねて來ました。こゝでも其が見られるので、禰宜のもどきが翁であり、翁にもどきがつき、更にそれの複演出である、ひよつとこ面を被つたのがあばれ廻りもします。ひよつとこは關東の里神樂にもありますが、此は反對する・逆に出る方の、惡い意味のもどきです。

要するに、翁の語りは、今花祭りの中では重要なものになつてゐますが、此行事には從と見らるべきもので、後から這入つて來たものでせう。主としては、中臣祓をしに出る禰宜が、神樂をすすめる爲に諸國を廻つたと言ふ物語りと、山から鬼が來て反閉を踏む霜月の行事、それにまう一つ花育ての行儀と、此三つが重つて居るので、翁の方は輕く見ていゝと思ひます。

既に平安朝の新猿樂記を見ましても、どれだけの種目があつたのか、どれが主體であるか訣らないほど、色々なものがとり入れられてゐます。由來、民俗藝術には、さうした性質があるので、あらゆるものを吸收して膨脹して行くのです。花祭りにも、色々な種目がとり入れられて、どれが中心だか、もう殆訣らない樣になつてゐますが、やはり元は一つの中心があつたに相違ありません。たゞ、昔の人は、後に色々なものをとり入れるにしても、單に面白いからといふのでなく、何か根本的の關係があつて結びついたのだと思ひます。其だけに、一層訣らないものにもなつてゐるのです。

それでも、花祭りで比較的筋目立つてよく見られるのは、田樂との關係、神樂との關係で、此三つが纏綿としてからみついてゐるのです。信・遠・三、此三ヶ國の山奥に殘つてゐる藝能を集めて見ますと、田樂・花祭り・神樂と言うてゐるものが、皆一部分づゝ關聯してゐて、彼等の間に取り合ひの行はれた跡がよく訣るのです。

延年舞との比較

一　稚兒・舞臺・山の類似

既に前にも一寸觸れておきましたが、此花祭りと、かなり似通うて居る古い藝能を、中世のものに求めますと、第一に延年舞が思ひ浮べられます。延年舞の研究の權威は、何と申しても高野斑山博士であります。其おかげで、非常に此方面の事が訣つたのです。

延年舞は、先、大體、平安朝の末に盛んに行はれたものと見ていゝと思ひます。そして、此中心になつて働くものは、花祭りの話の中で既に暗示を全うして置いたと思ひますが、やはり成年戒前の稚兒を主體として居ます。それに對照して、遊僧と稱する一團があります。此は、村方に於ける小若衆・若衆の關係を、寺方で行つた形と言ふ事が出來ます。此爲組みが複雜になつて來ますと、女をも老體をも含んだ、田樂の樣な形が認められ、更に擴張せられても來る訣です。

延年舞の稚兒は、先第一に、花の杖をさゝげて出て來る樣です。そして舞臺の構造が、著しく後々發達する泉殿式の舞臺とは區別せられて見えます。それは、最適切に芝居と稱するものゝ語原に當つて居る樣です。時代によつて舞臺の構へ方にも變化はありませうが、如何に後になつても、地上を舞臺として、其上に或種の敷物を設けて、此を芝居と稱して居た事だけは言へます。

單に、そればかりでなく、舞臺以外に、別に山と稱するつくり臺が設けてありました。此は後には、しんめとりいをとなへる爲に、左右に据ゑた樣でありますが、私は、此を初めは一つのものと考へます。そして、樂屋と稱すべきものが、出演者の道路、即、橋がゝりを隔てゝ、舞臺の後にあつた事、そして、其謂はゞ花道を圍んで、囃子方・謠ひ手・舞臺番などの人々が控へて居つ

た様に見えます。

此構造と言ふものは、能舞臺とも、芝居の舞臺とも變つて居て、延年舞が一つの典型をなすものであります。ところが、よく考へて見ますと、昔の藝能の舞臺が、泉殿式の舞臺になる以前の形を維持展開して來たものだと言うてよさ相です。

私どもの語では、門外の藝・庭の藝・泉殿の藝と、かう三通りに、藝能の格式を分ける標準を立てゝ居ますが、此が庭の藝の、古い形の、少くとも一つであります。

延年舞との比較は、詳しくするほどの資料もありませんし、また其だけの岐路に這入る餘裕もありませんから、さしづめ入用な部分だけをとり出して、花祭りと比較しようとしたのです。併し、此を直に、花祭りの出自を延年舞だと引き出す企てだと思はれては困ります。

二　花祭り舞臺の特徴

先第一に、花祭りの舞臺は庭であります。其が社の庭であるにしても、或は家の庭であるにしても、或は屋外の野天であつたらしい證據もありますが、いづれにしても座敷藝ではありません。

また、ものゝ外側から内に向つて演奏するといふ内容も持つて居りません。其行はれる庭が、即、其家及び家を中心とした、土地・村・郷・荘を意味するものだと考へて居ります。そして、其周圍がすべて見物の見所であり、時としては、舞臺までも見物が割り込んで來るといふ事になつて

居ります。

延年の記錄では、花祭りの様な亂雜な村々の祭りを書いて居りませんから、見物と舞臺との關係を截然たる區畫のあるものと言ふ風に考へさせ易く記され、描かれしてゐます。でも、此は、かうした舞臺の性質上、後にうすべり或は所作舞臺に似た敷板を設けるまでは、優人見物の入り亂れの行はれた事は考へられます。

まして、此に似た様式の祭りが、古い村々に行はれて居たとしたらどうでありませうか。其、囃方や役方の控へて居る中を中道が通るといふ事は、只今では花祭りの著しい特色になつて居ますが、歌舞妓芝居の如きも、或は此に似たものでないかといふ姿をそなへて居りました。其は、見物が舞臺の後方に、役者よりも高い位置に控へて居る、所謂らかん臺の形でありますが、此もらかん臺の發生を探つて見ない以上は、只今の花祭りのかん座に見物が割り込んで居るのと早急に一つには出來ません。唯、最延年舞の側の形が、花祭りのかん座に似てゐる事だけは言へます。

さうして此かん座は、謂はゞ舞臺の藝を觀る、客殿の位置であります。そして、其に控へて居る人は、祭りを執行させる擁護者、即、檀那、並びに其招待客及び一族といふ考へがある様です。

で、さうしますと、其場合、庭の藝は、よび迎へられた藝人のすることゝいふ形です。

ところが、まう一つ含まれてゐる考へを分析して見ますと、かん座に控へて居る人達は、舞臺へ出て舞ひ奏でる人と同種類の、神聖な人達と見られて居つたらしいのです。

樂屋は、其後にとつてあるといふのも、此また今日の花祭りに必、見られる事でありまして、之はかん座の一部分を、特に神聖な祕密部屋として圍ひ込んだものだといふ姿は見えます。

三　延年舞の山

それに、今一つ大事な、延年舞の山は、勿論、大嘗祭り其他の古い祭りに曳かれた標の山の意義に於て立てられて居たに違ひありませんが、大昔の標の山が、まだ標山であつた時代、神の依るところのしるしの山だと考へられて居つた時代から段々變化して、標の山のうちに尙、外の內容を含む樣になつて居たらしい事は、早い時代から考へられます。

其は、此神物なる事を示された山の中に、同じく神物となるべき人が山ごもりをして居るといふ考へが含まれて來た事を思ふ事が出來ます。

標の山に人形を立て、其人形が人間の舞人になり、舞車に變化して來た一方に、延年舞などでは、造り山の上に、女裝した稚兒が控へて居つた樣です。

とにかく、山を立てなければ延年舞の完全な形が備らなかつたといふ事だけは申されます。此山は、ねりもの藝には、非常に執念深く殘つて居りますが、舞臺藝の上では、痕蹟といへば痕蹟、或は別種のものと言へば、さうも言へ相なものが、歌舞妓芝居に存して居るばかりです。卽、高野博士が謂はれる山臺の事です。

何故舞臺の外邊に山を立てるか。勿論、藝能を行ふ神を迎へる形式です。だが、其に早くから、前に言うた別の意味が加はつて、藝能を行ふ神の出て來る時に、其山ごもりをして、精進潔齋の生活を續ける者を控へさせて置く場所と言ふ意味を生じて來たのであります。此は、文獻の僅な延年舞の山を、却つて花祭り側から說明する事が出來ます。其は、花祭りと關係の深い神樂の山であります。

今日の花祭りでは、此山を立てる式を行ひませんが、此は、かなり重大な事の忘却と言はねばなりません。恐らく此山は、花祭りに於ては、また複合して、柴燈と稱する庭燎の中に含まれてしまつたのでありませう。だから山見鬼が出て山割りの儀式をし、また柴燈の火を搔き散らす所作をする事にもなるのでせう。

四　神樂の白山

花祭りで最注意しなければならぬ事は、神樂を改作したとすれば、修驗の方式が、其規範になつて居るに違ひありません。だから、舞ひ處の外邊に立てる山を、山伏の柴燈と一つにするのは、無理のない事です。そして此が、屢、家に於て行はれる爲に、柴燈を出來るだけ小さくして、實のところは、柴燈とは言ふべからざる焚火にしてしまつて居るのであります。

神樂の一大事とせられたものは、山についての行事で、凡そ、若衆の舞ふ、三つ舞ひ・四つ舞ひ

に、直に接して行はれて居たのであります。傳天正・傳正德・傳慶長以下、六種類の神樂の次第書を見ても、大體、生れきよまりの山立て、或は山を立つべし、山をまつるべし、山をたづぬべし、山を賣り買ふことゝいふ事から、子供の誕生に比喩をとつた行事を行ふ様であります。

そして、此行事を、總括して、うまれきよまりと稱してゐました。勿論、ゆまはり・きよまはりと言ふ俗神道にも通用せられた、古い語が、其用途と直に聯絡して、生れきよまりと言ふ様な形になつたものと思うていゝ様です。

そして、此行事を行ふものが、山割り鬼で、花祭りの中、最重大な神役であります。たゞ、花祭りでは、山を割るといふ事を主にしなくなつた爲に、山をたづねる方面から、山見鬼なる名前が普通になつて來たのだと見てよいと思ひます。

結　語

此設樂の一番奥、御園村園部と言ふところに大入川といふ川があり、其川上の山の上に大入といふ、たつた家が二軒しかない寒村があります。こゝを花山と言ひ、花山院が來られたところだと傳へてゐますが、勿論それは嘘でせう。併しこゝが花祭りの元祖だと言ひ、一つの根據地にはなつてゐる様です。現在は豐根村三澤の山内・振草村古戸などが中心になつて居ますが、段々里近

く下に下りて來たとも見られます。山内の花も、一代前に有力な人があつて、方々の花を調べて改修したのだと言ふ者があります。或は妬んで言ふのかも知れませんが、古戸・山内が元祖だとも思はれません。つまり、方々の村が、皆まねし合つて居るので、もつと古い狀態を考へて見なければならぬのです。

要するに三河の山奥には、最初から、單に花祭りだけがあつた訣ではないでせう。色々な藝能を行ふ一種流浪の宗教家が居つて、彼等は時々里へ祝福に下りて來ては、里の趣向に應じた藝能を含んで行つたのだと思ひます。花祭りの村も、最初は、さうたくさんはなかつたのでせう。奥といふのも、最初は里近い處だつたのが、後に、里が開けて行くに隨つて段々山奥に這入つて行く様になつたのだと思ひます。たゞ考ふべき事は、高山靈山などいふものがあると、そこへ這入つて行きます。此は、彼等の旅行には、常に一つのめどであつたのです。

只今のところでは全然訣らないのですが、大入は或は古い村かも知れません。三河では一番奥で、殆、遠州領といつてもいゝほどの山奥で、山の彼方には水があります。此は大いに考へねばならぬ事で、山の上の池・瀧の水で淨めに來ると言ふ考へは、日本の宗教では大切なものになつてゐたのです。いつの時代か、遊行神人の一團が三河の山奥に屯したのには地勢の關係があると前に述べて置きましたが、境山を下りると天龍の流れがあります。此水が彼等の生活には大切だつたのだと思ひます。

若、花祭りが古いと言ふ事を許せば、先、東に聳えてゐる山々に、根據を据ゑねばならぬ様です。さういふ點から言ひますと、中心が段々里近くへ下りて來た様で、山内・小林・古戸と下つて來て居るのです。

信州新野の雪祭り

前代文明の殘溜地

東海道の奥から、信州伊那谷へ通じてゐる道が、大體三通りあります。其中、一筋は遠州から這入るもの、他の二筋は三河から越える道です。その眞中にあたる道が、丁度花祭りの行はれる三州北設樂（シタラ）の村々を通つてゐるので、極僅かな傾斜を登ると、すぐ信州領になつてゐます。所謂新野（ニヒノ）峠が其境目で、此から半里も下ると、旦開（アサヒ）村新野の町になるのです。而もこゝは、西へも北へも、或は東へも、すべて又、山坂を越えなければ通れない、盆地です。

東海道方面からやつて來た前代の文明は、或期間、此風の吹き溜りの様な山の窪地に、あたかも、吹き寄せられた木の葉の様に殘溜してゐたのだと見られます。此村の伊豆權現、或は、以前此地の開發（カイホツ）主であつた、伊東家に關聯した神事・儀式の傳承が、其を明らかに示してゐます。

我々、民俗藝術の會の仲間では、近い中に一度、皆で手わけをして此土地だけの村落調査をやつて見たいと言ひ合つて居る事です。若しさういふ事になれば詳細な報告を作る事が出來るでせう

昭和五年五月「民俗藝術」第三卷第五號

が、最近新野の雪祭りなる祭儀が東京へ來る事になつたのを機會に、先、小手調べとして、其に對する調査報告集を、同人の方々でお作りになる事になつてゐます。「花祭り號」の後に「雪祭り」號が出る事は、感じの上で、まことに快い事だと、我々も思ひます。それで、當然その時にも、行きがゝり上、私も仲間入りをしなければなりませんから、こゝにはほんのざつとした此春の祭りの輪廓だけを書いて、追つて行はれる雪祭り試演の爲の、引札がはりにしたいと思ひます。

伊豆權現と伊東家

一躰、下伊那の南部地方は、明治の初めに、謂はゞ奴隷解放とも言ふべき運動の盛んに行はれたところであります。つまり、昔から被官と稱して居つた門百姓が、親方から獨立した爲に、大變もめた事でした。聞くところに依ると、理窟ばつた信州人の間でも、殊に解放問題を喧しく言ふのは、未だに下伊那が最甚しい相です。或は被官解放運動の名殘りかも知れませんし、其運動自身が、起るべき理由のまた此土地に強く根ざして居たのかも知れません。新野ではさういふ運動があつたとは聞きませんでしたが、さうした氣分は見えて居たと思ひます。

此雪祭りの行はれる、伊豆權現は、豆州の伊豆山權現が將來せられたものに違ひありません。そして此を携へて來たのが伊東氏なのです。だから、新野の土地と、伊東の家と、伊豆權現の社とは、村の開發の最初から、放つべからざる關係を持つて居ました。其が、明治になつて、完全に

伊東家の手を離れたので、たゞ、社と村との續きあひだけが、前よりも一層濃くなつた樣に思はれます。伊東氏の古邸（フルヤシキ）は、現在でも新野の東方、大村といふところに殘つては居ますが、しかし伊東家の人は、既に先代の時から村を追はれて、山澤一つ越えた北に住み替へてしまつたと言ふ事です。

此伊東家を中心とした行事が、今日では、多少形をかへて殘つても居り、或は、既に傳說にくみ込まれた部分もあります。殘つて居る部分は、大抵、伊東邸の代りに、同じ大村の中の諏訪神社の社殿で行はれる事になつて居る樣です。一月十三日の此雪祭りも、元は、伊東家から行列が練り出したものですが、今では諏訪神社から出て、西へ長い新野の町を通つて、伊豆權現の山へ登る事になつて居ります。

元々此行事は、土地の精靈を意味する、夜叉神・羅刹神・麻陀羅など〻一つのものが群行して、まづ伊東家を訪れ、此を祝福した後、伊豆權現、或は其別當寺なる二善寺をことほぎする形だつたと思はれます。其は恰度、田樂に、水驛・飯驛・蒟驛など言ふ、立ち寄り場が考へられて居つたのと同じ意味で、精靈が群行して、豪家・宮・寺の祝福に廻る訣です。だから、大體は伊東家に於ても同じ事を行つたものと見られます。だが勿論此は、伊豆權現の神前で行ふのが本式と考へられて居ます。

南から來た藝と北から來た藝と

只今殘つて居る形を見ますと、さま〴〵なものゝ複合した跡は明らかでありますが、中心は何としても、田樂、殊に「夜田樂」と稱すべきものだと思ひます。三州北設樂の花祭りと比べても、非常に似た部分が多い樣です。が、よく見ますと、南から上つて來た藝能と、東から來て國境を南へ越えて三州へ行つた藝能との、交り合つて居る度合ひが、信・遠・三の國境地方の村々で、濃淡がいろ〳〵になつてゐる樣です。私は、只今のところでは、南から來たものと、北から來たものとを見なければなるまいと考へて居ります。其北から來たものゝ或時期の足溜りになつたのが、此新野の雪祭りに印象して居ると見られます。尤、部分的に見れば、三河鳳來寺、或は田峯（タミネ）の藝能と共通するものがあります。しかし其は、根本的のものだとは受けとれません。

行事の意味

此祭りを、雪祭りと通稱して居ますのは、讐ひ一握りの雪でも神前に供へなければ、此日の祭儀は行はれないと信じられて來て居たからです。それで若し、近邊に雪のない時には、二里餘も西北に隔つた平谷（ヒラヤ）峠あたりまでも出かけて雪をとつて來る相です。此は、言ふまでもなく、雪を以つて田の作の象徴と見るので、祭りの夜に當つて雪が降らなければ、當年の成り物は望みがない

と考へたところから出た、變化であります。

此祭りを始める前に、第一に、社の上にあるがらん樣と言ふ祠を祀ります。此は、所謂伽藍神で、前に申した、社・寺の地主なる、精靈の發動を意味する行事であります。此から、神事やら藝能が引き續いて行はれるので、翌朝午前まで續きます。只今では、大體午前の十時か十一時に終りますが、昔は、明け方、日の出を限（キ）りとしたらしいのです。

此行事の最後に行はれるのは、田遊びと稱へるもので、宣命と稱するものを、社地の一部で唱へて居る間に、藝能がすべて結着する樣になつて居るのです。朝に殘る藝が少々はありますが、大體は、日の出前に三匹の鬼が出て、神主に退散させられる儀式を境として居ります。鬼が退散するに當つて、其口へ朝日が差し込む樣に事を運ばなければ、其年は不作だと言うた相ですが、今では、さうは出來なくなつて居ります。

行事の主なるもの

私が、日本の藝能の歴史を考へようとした最初に、非常な興奮を催してくれたのが、此雪祭りの田樂の話を聞いた事でありました。しかし、こゝでは、其中二三の刺戟を含んだ部分を申すのに止めませう。

此行事の、主なる役廻りをするものは、右の鬼に扮する人達です。行列の山に上るのを迎へるの

も、此人々です。後に言ひますが、矢取りの役を勤めるのも、やはり此人々です。

此祭りに於ける鬼は、殆、恐るべき鬼といふ考へはなく、親しむべく、信頼せられるものゝ様に見えます。そして最著しいのは、此鬼と、天狗とが、此雪祭りに於てはほゞ一つものに考へられて居る事です。

鬼の外に目につくのは、もどき・翁でありまして、もどきは二様に繰り返されて居ます。一つはさいほうと言ひ、更に其繰り返しをもどきと言うてゐます。二つながら、所謂鬼の面を被つて舞ふものです。翁は三種類あります。翁・松かげ・しやうじつきり、と言ふ三種類の面を被つて、引き續いて出て來て、各違つた唱へ言をします。つまり、翁の言ひ立てを三部分に區劃して語る事になるらしいのです。此翁に就いては、鳳來寺・田峯、或は花祭りのものと、比較研究の興味があります。

其外に、面をかついで出る役としては、此も一つ事でせうが、田畑の害物を壓伏するらしい、しづめの行事があります。これが二つに分れて、しづめ及び八幡として、面形も違ひ、身振りも變つて居ります。そして其對象も、鹿と駒とになつて居ります。此を見ますと、神樂系統の獅子の様に、獅子に扮するものが能動するのでなく、征服せられるものだといふ形が見えます。

人間の直面(ヒタ)で行ふものとしては、牛系統のものと、籠・編木(ビンザラ)系統のものと、二つに分つ事が出來ます。牛の方では、競馬(キヤウマ)と稱する三分藝を分化して居りますが、此は、乘りものに乘つた弓とり

の姿を原(モト)とする様です。即、所謂牛が其です。此牛に乘る役は、最神聖なものと考へられて居ます。矢をつがへて、一度は社殿の屋根に向けて射放ち、今一度は、社地の境に居る鬼に向けて射る行事があります。鬼の場合は常識的にも解釋出來ますが、社殿に向つて射る形が殘つて居るのは面白いと思ひます。つまり、矢は遠方に居る精靈、或は神に奉りものをする爲の媒介物であります。此牛一つを見ても、日本の狩り場の社が、山の神・木の神・境の神に、上差(ウハザ)しの矢を捧げた古俗の説明が思はれます。

秩序もなく、また、報告か解釋か訣らない様な文章を綴つて來ましたが、雪祭りの試演を御覽になるのに、此だけの漠然たる用意でも持たれる様にと思つたのです。

「雪祭り」しなりお

——岩波映畫「新野雪祭」のために——

昭和二十七年十二月稿。二十八年十月「藝能復興」第一卷第五號

行事次第

◎印は必、撮影すべきもの、○印はそれにつぎ、丶印はそれにつぐ。

宵の儀

○一、おのぼり
○二、鬼迎へ
◎三、本座のびんざゝら
◎四、ながもち來着
◎五、新座のびんざゝら

神樂殿

◎六、論舞ひ
◎七、萬歳樂
◎八、神おろし
◎九、順の舞ひ

神殿の儀

十、御幣いたゞき
十一、萬歳樂
十二、神おろし
○十三、中啓の舞ひ
十四、順の舞ひ
○十五、二善寺の觀音像

深夜の儀

丶十六、萬歳樂
丶十七、ごさんごう
丶十八、らんじやう
◎十九、松明

○二十、さいほう
◎二十一、もどき
○二十二、きようま
◎二十三、お牛
◎二十四、翁
◎二十五、松かげ
○二十六、しやうぢつきり
○二十七、海道下り
◎二十八、かんば
◎二十九、朝鬼
○三十、こま
○三十一、しづめ
○三十二、かぢや
○三十三、田あそび

○

◇「面」（注、以下◇印は畫面のかつとを示す）
◇面だけがゆら〳〵ゆれてゆくと
◇面を背負うた旅人二人の後姿
◇倉ノ平（ダヒラ）――天龍川ばたの見とほしのきく場所
◇旅人、とある一軒の家に休み、面をおろし、いろ〳〵見る事あり
◇とゞ、一つだけ面を置いて、發つて行く。（荒びた面だけ殘して、他の面は持つて行く感じにする事）
◇殘された面
　このかつと、幻想的に。
◇日本地圖。中部地方。（始め、太平洋も日本海も見える位のものにて）
　次に代つて、
◇長野縣。下伊那地方を中心としたものを出し、
◇「新野」の説明とする。
◇その地圖が新野峠から展望の實景に代る。
東海道の奥から、信州伊那谷へ通じてゐる道が大體、三通りあります。

其中、一筋は遠州から這入るもの、他の二筋は、三河から越える道です。その眞中にあたる道が、恰度、花祭りの行はれる三州北設樂（シタラ）の村々を通つてゐるので、それから僅かな傾斜を登ると、すぐ信州領になつてゐます。

（このあたりより、遠くはるかに始終、太鼓、笛の音――）

所謂新野峠がその境目で、これから半道も下ると、そこが旦開村新野――

◇　傾斜を上つて行くにつれて、開ける眼界

これから皆さんに御披露しようといふ、「無形文化財選定郷土藝能」に選ばれたものゝ一つ「雪祭り」を保存してゐた新野なのです。一帶の低地は新野千石平（センゴクダヒラ）。はるかに南あるぷすも望まれます。

◇　四方の山々の遠望――

この峠は地藏峠といひますが、昔、新任の郡視學が山ふかくこゝまで登つて來て、これは叶はんと辭表を出したといふので、辭職峠の異名のあるところです。

◇　はるかに深く、天龍川の流れ。

◇　その展望――（南あるぷすをも含めたところの）

◇　峠から――新野平への展望――

ごらんなさい。こゝは西へも北へも、或は東へも、すべてまた山坂を越えなければならない盆地。

◇　その展望――

三河の北設樂郡へ出る道――

◇

地藏峠を越して坂部（サカンベ）へ下る道。これは天龍川を渡つて遠州へ越える道――

◇　平谷（ヒラヤ）から廣い海道、西に向ふ岩村道の展望

賣木（ウルギ）から根羽へ向ふ山路

◇

この道を遠く行けば、美濃の岩村、中央線大井へと出ます――（全く風の吹き溜りのやうなところです）。

雪祭りに雪を供へなければ、お祭りが出來ない。雪をたづねて、こゝまで來たこともあります。

こゝは標高千二百だから、まづ雪祭りの雪には事かゝなかつた訣です。

◇　旦開村の北、或は西南、西北方へ向いてゆく村々をうつし出す。

しかしこの風の吹き溜りのやうな山の窪地に、東海道方面からやつて來た前代の文化が、あたかも吹き寄せられた木の葉のやうに殘つてゐたと見られることは、意義深いものがあります。

◇　道、段々に下つて、旦開村の大村に入る――

◇　伊東家の跡

皆さん、これは新野の開發者、草分けともいふべき、伊東家の古屋敷です。以前は正月の元旦、伊東家に古い由緒のある內輪衆といふ人々がつめかけてゐると、外からおとなひかける上手(ワデ)衆の人々が、「たのまう〳〵」と聲をかけて、門開きの儀式をしたものです。

「雪祭り」は、元はこの伊東家から行列が練り出し、西へ長い新野の町を通つて伊豆權現の山へ登ることになつてゐたのですが、今では諏訪神社から出ることになつてゐます。

これが諏訪神社——

◇ 雪祭りの準備をしてゐる諏訪神社の實景——

雪祭りの準備がはじまつてゐるやうです。

◇ さゝらを稽古してゐる所をうつす（そのとほりに行ふ）

◇ それを見てゐる村びと、子どもらの顏々——（註。出來るだけ素朴な顏の子達）

◇ さゝらをする所を又こゝへ入れる

◇ 神事に使ふいろ〳〵なもの——

では、伊豆權現の方へ御案內しませう。

◇ 景色移動——

宵の儀

◇ おのぼり（午後三時）（大村から新野まで、新野から伊豆權現まで三个所寫す。）

◇ 鬼迎へ。おのぼりが御坂へ着くと、鬼三役出迎へ、かゞり火をもやす。

◇ 同時に神樂殿で本座のびんざゝら始まる。

◇ ながもち來着。

◇ 新座——本座に代つてさゝらをする。

ごらんの通り、先のは本座の田樂で、後のを新座の田樂と言ひます。新座・本座には、大した違ひはないのですが、昔の田樂の約束として本座・新座の別をたてゝ、言はゞ劇團を組んでをりましたから、それで、かう言ふ名稱を殘してゐるのです。

これも新野では「上手」と書いた、わでしゆうの家で、代々繼いだ役目なのですが、その上手(ワデ)と言ふのは、伊東氏が此土地へ這入つて村を開いた後に、新しく加はつて來た、關遠江守の子孫、それから下條伊豆守の子孫達だと言ふことになつてゐます。

時が變りましたから、神事に與る權利も、ある點は自由になつて來たやうです。

これでいよ〳〵神樂殿及び神殿の儀式に這入ります。

◇ 論舞(ロシ)ひ

まづ最初に論舞ひです。今日では、大して興味をひかないかも知れませんが、これが昔の人々には面白かつたもので、唯今でも御覽になつてをれば、いくらかその感じは皆さんは傳るでせう。

◇　萬歳樂

次に萬歳樂が出て來ました。御覽の通り形式だけのものですが、それでも、お能の翁の舞ひなどと似た所は、お訣りになるでせう。

◇　神おろし

こゝに現れたのは、神おろしの人々です。これも時間がかゝるのですが、一部分だけをうつしてお目にかけます。

◇　順の舞ひ

それから、賑やかな順の舞ひがはじまります。文字の通り藝廻しで、もとはいろ〳〵な變つた舞ひをめい〳〵行つたのでせうが、同じ舞ひを席順によつて舞ふと言ふやうになつてゐます。しかし昔の宴會では何處も、ろん舞ひ・順の舞ひを大切なものとしてゐたやうです。

神殿の儀

これからいよ〳〵神殿の儀式にうつります。ごらんの通り、一通り内務省令による祭式を行つた後、御幣いたゞきの式に這入ります。

◇　祭式

◇　御幣いたゞき

こゝで又、順の舞ひを中心として、萬歳樂・神おろし、それに中啓の舞ひと言ふのが行はれます。

◇　萬歳樂

◇　神おろし

◇　中啓舞

舞ひは古風で、近代のあなた方の氣持ちとはかけはなれた所があるかも知れませんが、この囃しは、あなた方の心をとらへないではおかないでせう。中啓の舞ひと言ふのは、中啓の扇を持つて舞ふからでもありますが、佛（ホトケ）の舞ひとも言ひます。少し舞ひぶりに變つたところがありますが、もと神佛混合時代にこゝにあつた、二善寺（にせんじと清んでよむ）の本尊に仕へてゐる別當が舞つた舞ひだと傳へてゐます。

◇　二善寺の觀音像を出す

これは久しく寺と離れて、民家に祭られてをられたもので、これがその寺の御本尊だつたのです。

深夜の儀

御覽の通り、大方お宮の庭が活氣づいて來ました。もう昔なら、夜（ヨ）も丑の刻です。新野で言つてゐる古いことば、夜田樂（ヨデンガク）の時間が來たのです。なつかしいことにはこれを庭の能、即、庭能（ニハノウ）とも方言では言つてゐるやうです。

◇　萬歳樂

こゝで三度目の萬歳樂が庭の上に行はれてゐます。

◇　ごさんごう

それからあの掛け聲は「ごさんごう」「ごさんごう」と言つてゐるのです。あの投げてゐるのは、庭に溜つた雪です。あゝして、このお社をとりまく地主の神、そのほかの小さな社々へ、お供へかた〴〵御訪問申し上げる形式を行つてゐるのです。おそらく字はもと、散（ちらす）供（そなへる）――さんくうと書いたのでせう。

俄かに大きな聲が廳屋からして來ました。

◇　らんじやう

廳屋の壁を叩く音です。これが舞樂以來しきたりのらんじやうと言ふものです。字は亂れる聲と書きます。

あの聲も「らんじやう〳〵」と言つてゐるのです。民俗藝能としての雪祭りらしい點は、これから頂上に這入るのです。

◇　松明

いよ〳〵松明にかゝりました。これで高さが五間ばかり、周圍が三抱へ程あります。あの松明には大黑様・ゑびす様の福の神をのせた寶舟がついてゐて、それが火を松明につける事になつてゐ

るのです。

◇　さいほう

庭へ飛んで出たのは、さいほうと言ふ神ともお化けとも説明の出來ないまで、昔からこの雪祭りには、つき物になつてゐるのですが、生産を豐かにする力のある靈的なものらしいのです。

手に持つてゐるのは「うちは」と杉の枝です、それを振つてあのとほり踊つてゐます。

あの足つきを御覽下さい。雅樂風な足どりが見えるやうです。さいほうと一緒に本座のさゝらが出て來てさいほうの動作をはやすやうに、さゝらをすつてゐます。これがなか〳〵見ものです。

さゝらを返して腕にかけて、あのやうに「大雪でござります〳〵」と申します。雪祭りといふ名前のおこりの一つはこゝにあるのです。次のもどきにも、おなじくさゝらが伴つて出ます。

◇　もどき

さいほうが引つこんでもどきが現れて來ました。これも靈的なものゝ一つとして昔から考へられて來たのでせうが、よく訣りません。たゞさいほうと似てをります。違ふ所は御覽の如く、面に區別があります。

名前のもどくと言ふのは……まねをする。まねをして人を厭がらせる、反對する。……といふやうな意味のことばですから、さいほうの藝から分化した物眞似の藝に違ひありません。これらになると舞ひと言ふより踊りです。手に持つてゐる棒を女にくつつけてゐるぢやありませんか。

あれは生産――人間をふやすためにするまじなひだと言つてゐます。りんがをもつて追ひ廻してゐるのです。をかしいけれど、迷惑がつて逃げ廻つてゐる人々の顔を御覽なさい。子のない人はわざと、これをおつゝけて貰つてゐるものもあります。

◇　きようま

馬の胴の中に足をつつこんで歩き廻るのです。この邊では、きようまと言ふ風に發音してゐますが、つまり昔の神事（カミゴト）の競馬（ケイバ）です。神前へ出てあゝいふ風に拜禮してゐます。

◇　お牛

おゝこんどは又變つたものが出て來ました。ものと言へば、失禮と感じる程、この地方では尊いものになつてゐます。この神事の中心といふ風に民間で考へてゐます。ごらんなさい。神殿の棟にむかつて矢をつがへた神主が射ようとしてゐます。日本の神社信仰では、神様に矢を射かけるやうな事は普通不都合なことゝ考へるでせうが、昔の神事には上（ウハ）ざしの矢を神様に捧げて通るといふやうなことがあつたのです。

神主は今「近江の湖」と言ふやうなとなへごとを致しました。これは矢が近江の湖の水の面に、此時影を落すのだと、昔から言ひつたへてをります。

近江でも、さう言ふのだと、此邊では信じてをります。ともかく、かう言ふ山家にはこんな古い精神の神事を殘してゐることをお考へ下さい。

◇　翁

こゝで少し、皆様に親しい感じのするものが出て來ます。こんどは翁が現れました。今出たのは普通の翁です。お面があんなに小さいのですが、昔のお能では、さういふお面のあつたこともあるのです。翁の生ひ立ちの昔がたりをしてゐるのですが、そのことばをこまかく聞いてみると、なか〳〵面白く古風なもので、又地方に多く行はれてゐるのですが、何と言うても唯今はもう皆さんがお聞きになつても興味がないほど古いものになつてしまひました。

◇　松かげ

あゝ又翁が出て來ました。あれが松かげと言ふ名の面です。

この翁のことばに、「翁松かげにかんざされ」と言ふ文句があるから、このお面を松かげと言うたのだらうと思ひます。これも一通り古い物語りをして引つ込みます。

◇しやうぢつきり

そのあとへ出て來たのが、しやうぢつきりです。さあ、どう言ふ意味でせうか。昔からさう言ふことばで言つてゐますが何ですか。よくしやべる爺さんといふやうに考へられるやうです。翁が三體出るのは、お能の方でも古くはさうでしたので、翁・千歳・三番叟、この三つは言はゞ翁を意味してゐるものなのです。かういふ所に、お能の翁の古い形が、美しく修飾をせられないまゝに殘されてゐる部分があると同時に、又、飛躍して、考へ及ばないやうな變化をしてゐる所もあ